

山梨県中巨摩郡八田村
Yagoshima Otsuka
野牛島・大塚遺跡

八田村道163号線ボトルネック解消市町村道県代行事業の工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

八田村教育委員会
山梨県甲府土木事務所

山梨県中巨摩郡八田村
Yagoshima Otsuka
野牛島・大塚遺跡

八田村道163号線ボトルネック解消市町村道県代行事業の工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

八田村教育委員会
山梨県甲府土木事務所

序 文

本書は、八田村教育委員会が八田村道163号線ボトルネック解消県代行事業に伴い甲府土木事務所の依頼を受け、平成11年度に発掘調査した野牛島・大塚遺跡の報告書であります。

遺跡が所在する八田村は、村の北側を流れる御動使川と村の東側を南流する釜無川が合流する地点に位置しています。村の西側は御動使川によって作られた扇状地にあたる一方、村の東側は釜無川によって扇状地が削られ、沖積低地となっています。

近年まで御動使川扇状地上は遺跡が少ない地域と考えられてきました。扇状地を作り出した御動使川は暴れ川として有名で、頻繁に洪水をおこし多大な被害を村に与えてきました。このような悪条件の土地では、古くから集落は営まれず、たとえ存在していたとしてもすでに流されているものと考えられてきました。しかし、平成11年度に行なった村内遺跡分布調査によって、村内随所に先人の足跡を刻む遺跡が多数発見されました。また、野牛島・大塚遺跡周辺では、山梨県埋蔵文化財センターによって、大塚遺跡や立石下遺跡、石橋北屋敷遺跡、仲田遺跡など多数の遺跡が発見され、調査が行われています。

今回の調査によって、新たに奈良・平安時代の住居跡が9軒、50条を越える溝跡、そのほか畑状構造や多数の土坑が発見されました。こうした成果は、「古代の人々が扇状地という環境をいかに利用し生活をしていたのか」という問い合わせるために重要な手がかりだと言えます。

この報告書が地域の歴史を解明する資料として幅広くご活用いただければ幸いです。最後になりましたが調査にあたって御指導御協力を賜りました関係機関並びに調査・整理に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

八田村教育委員会

教育長 内田一雄

例　　言

1. 本書は、山梨県中巨摩郡八田村野牛島に所在する野牛島・大塚遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、八田村道163号線ホトルネック解消市町村道県代行事業の工事に伴い、甲府土木事務所から依頼を受けて八田村教育委員会が実施した。
3. 遺跡の名称は、遺跡の所在する小字名と大字名を組み合わせて野牛島・大塚遺跡とした。なお、遺跡は複数の小字に所在しているが、住居址が多数検出された「大塚」を小字の遺跡名として選択した。
4. 本書の執筆分担は以下の通りである。

- 第IV章……………バリノ・サーヴェイ株式会社
その他……………斎藤秀樹（八田村教育委員会）
5. 編集および写真撮影は斎藤が行った。
6. 発掘調査期間は、第1次調査が平成11年5月10日から平成11年9月10日まで、第2次調査が平成11年10月4日から平成11年11月19日までである。
7. 遺物実測図の作成は、江川晶子、満田恵幸、斎藤が担当した。
8. 本報告書のトレイスおよび版組は、小林素子、藤原洋子、穂坂美佐子、矢崎康美、斎藤が行った。
9. 発掘調査における分析依頼および委託した事業は以下の通りである。

- | | |
|---------------|---------------|
| 基準点測量 | ㈱ジェップス |
| 航空撮影 | ㈱フジテクノ |
| 植物珪酸体分析・微細物分析 | ㈱バリノ・サーヴェイ |
| 鉄製品保存処理 | ㈱帝京大学山梨文化財研究所 |
10. 発掘調査から報告書作成まで、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意としたい。（敬称略・五十音順）
大島正之、今福利恵、河西 学、櫛原功一、小林健二、諏訪間伸、田尾昌敏、立花 実、田中大輔
新津 健、畠 大介、廣瀬和弘、保坂康夫、森原明廣、山本茂樹、米田明訓
帝京大学山梨文化財研究所、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、㈱湯澤
工業
 11. 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は八田村教育委員会に保管してある。

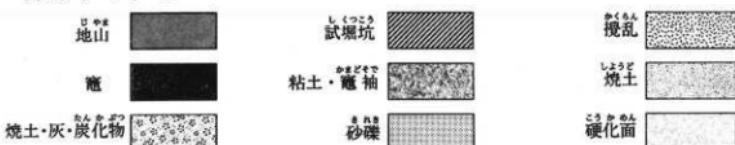
凡 例

1. 造構および遺物の実測図の縮尺は、それぞれ図に明記しているが、原則として以下のとおりである。

(1) 造構	住居址	1/40
	竈	1/20
	柱穴列	1/40・1/60
	土坑群	1/60・1/100
	溝状造構	1/40・1/60
	窓状造構	1/100
(2) 遺物	土器	1/4
	鉄製品	1/2

2. 第III章の造構図版に用いたスクリーントーン・ドットは、以下のものを表す。

(1) スクリーントーン

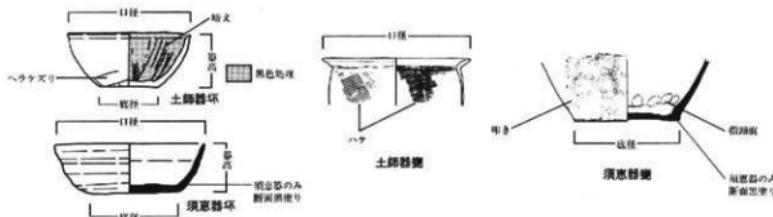


(2) 遺物分布図におけるドットは次の遺物を表す。

- 土器 ●
- 鉄製品 △
- 炭化物 ■
- 石 ○

3. 造構断面図、土層図における数値表示は標高を表す。

4. 遺物実測図の表現は、以下のとおりである。



土器の口縁部または底盤の残存率が1/4以下のものについては、正確な口径が求められないため任意の口径とし、口縁部を中心線の左右で切って図示している。

破片資料の場合、断面図の右側の図は外面を、左側の図は内面を表現している。

5. 掘図中の遺物番号、遺物観察表、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と経過	2
(1) 調査に至る経緯	2
(2) 調査の経過	2
(3) 調査組織	2
第2節 調査の方法	3
(1) 調査方法とグリッドの設定	3
(2) 基本層序	3
第Ⅱ章 遺跡概観	11
第1節 地理的環境	12
(1) 甲府盆地	12
(2) 御動使川扇状地と八田村の地理的環境	13
(3) 遺跡の立地	16
第2節 歴史環境	20
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	23
第1節 I区の調査	24
(1) 住居址	24
(2) 柱穴列	47
(3) 土 坑	50
(4) 溝状遺構	50
第2節 II区の調査	59
(1) 柱穴列	59
(2) 土 坑	59
(3) 溝状遺構	65
(4) 烟状遺構	74
(5) その他	76
第Ⅳ章 自然科学分析	79
第1節 野牛島・大塚遺跡発掘調査に伴う自然科学分析報告	81
第Ⅴ章 調査の成果と課題	87
第1節 野牛島地区における奈良・平安時代の住居址	88
第2節 まとめにかえて—調査の検討課題—	93
遺物観察表	95
写真図版	101

挿図目次

- 第1図 野牛島・大塚遺跡発掘区域 (1/4,000)
第2図 基本層序柱状図
第3図 野牛島・大塚遺跡全体図 (1/1,000)
第4図 I区全体図 (1/500)
第5図 II区全体図 (1/500)
第6図 山梨県地形図 (1/100万)
第7図 甲府盆地における扇状地 (1/40万)
第8図 八田村位置図 (1/10万)
第9図 八田村地形図 (1/50,000)
第10図 御勒使川扇状地地形分類図 (1/50,000)
第11図 野牛島・大塚遺跡周辺地形図 (1/7,500)
第12図 遺跡位置図 (1/7,500)
第13図 八田村周辺の遺跡 (1/20,000)
第14図 1号住居址および竪平・断面図 (1/20 · 1/40)
第15図 1号住居址出土遺物 (1/2 · 1/4)
第16図 2号住居址平・断面図 (1/40) · 出土遺物 (1/4)
第17図 3号住居址平・断面図 (1/40)
第18図 3号住居址竪平・断面図 (1/20)
第19図 3号住居址出土遺物 (1/2 · 1/4)
第20図 4 · 5号住居址平・断面図 (1/40)
第21図 4 · 5号住居址出土遺物 (1/4)
第22図 6号住居址平・断面図 (1/40)
第23図 6号住居址竪平・断面図 (1/20) · 出土遺物 (1/4)
第24図 6号住居址出土遺物 (1/2 · 1/4)
第25図 7号住居址平・断面図 (1/40)
第26図 7号住居址出土遺物 (1/4)
第27図 8号住居址平・断面図 (1/40)
第28図 8号住居址竪平・断面図 (1/20)
第29図 8号住居址出土遺物 (1/4)
第30図 9号住居址平・断面図 (1/40)
第31図 9号住居址竪平・断面図 (1/20)
第32図 9号住居址出土遺物 (1/4)
第33図 9号住居址出土遺物 (1/4)
第34図 I区28~33号土坑 (1/40) · 1号柱穴列 · 14~26号土坑平・断面図 (1/60)
第35図 I区1 · 2号溝平・断面図 (1/60)
第36図 I区3 ~ 7号溝平・断面図 (1/40 · 1/60)
第37図 I区8 · 9 · 10号溝平・断面図 (1/40 · 1/60)
第38図 I区11~17号溝平・断面図 (1/40 · 1/60)
第39図 I区18~21号溝平・断面図 (1/60)
第40図 I区溝状構造出土遺物 (1/4)
第41図 II区1 · 2 · 3号柱穴列平・断面図 (1/40)
第42図 II区土坑群平面図 (1/60 · 1/100)
第43図 II区1 ~ 7号溝平・断面図 (1/40 · 1/60)
第44図 II区8 ~ 13号溝平・断面図 (1/40)
第45図 II区14~22号溝平・断面図 (1/40)
第46図 II区23~30号溝平・断面図 (1/40 · 1/60)
第47図 II区烟状遺構 (1/100)

表目次

- 第1表 I区土坑計測表 (第4 · 34図)
第2表 II区土坑計測表 (第5 · 41 · 42図)
第3表 II区土坑計測表 (第5 · 41 · 42図)
第4表 II区土坑計測表 (第5 · 41 · 42図)
第5表 野牛島地区住居址比較表
第6表 野牛島地区時期別住居址比較表
第7表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(1)
第8表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(2)
第9表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(3)
第10表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(4)
第11表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(5)

写真図版目次

写真図版 1	103	4. I 区 9 号住居址発出土状況	
1. 野牛島・大塚遺跡 全景(西から)		写真図版 9	111
2. 野牛島・大塚遺跡 全景(東から)		1. I a 区 2 号溝(南西から)	
写真図版 2	104	2. I b 区 2 号溝(西から)	
1. I 区 1 号住居址(西から)		3. I 区 3 号溝(北東から)	
2. I 区 1 号住居址竪(西から)		4. I 区 4 号溝(北から)	
3. I 区 1 号住居址遺物出土状況		5. I 区 5・6 号溝(東から)	
4. I 区 2 号住居址(南から)		写真図版 10	112
写真図版 3	105	1. I a 区 8 号溝・1 号柱穴列(西から)	
1. I 区 3 号住居址(西から)		2. I b 区 8 号溝(西から)	
2. I 区 3 号住居址竪(西から)		3. I 区 7 号溝・8 号土坑(西から)	
3. I 区 3 号住居址刀子出土状況		4. I 区 11(奥)・12 号溝(手前)(東から)	
写真図版 4	106	写真図版 11	113
1. I 区 4・5 号住居址(南から)		1. I 区 14 号溝(西から)	
2. I 区 4 号住居址遺物出土状況		2. I 区 14 号溝遺物出土状況	
3. I 区 4 号住居址环出土状況		3. I 区 17 号溝(南から)	
4. I 区 6 号住居址(西から)		4. I 区 18・19・20・21 号溝(北東から)	
写真図版 5	107	写真図版 12	114
1. I 区 6 号住居址 竪の壁に張り付いた刀子		1. II 区 F, G-12, 15 区土坑群(西から)	
2. I 区 6 号住居址竪(西から)		2. II 区 C, D-14, 15 区土坑群(北から)	
3. I 区 6 号住居址环出土状況		3. II 区 1 号柱穴列(北から)	
4. I 区 6 号住居址発出土状況		4. II 区 1 号溝(北から)	
5. I 区 6 号住居址环出土状況		5. II 区 2 号溝(北から)	
6. I 区 6 号住居址环・発出土状況		写真図版 13	115
写真図版 6	108	1. II 区 3 号溝(右)・4 号溝(左)(南から)	
1. I 区 7 号住居址(南から)		2. II 区 5 号溝(手前)・6 号溝(東から)	
2. I 区 8 号住居址(西から)		3. II a 区 7 号溝(東から)	
3. I 区 8 号住居址竪(西から)		4. II 区 8 号溝(左)・9 号溝(右)(北から)	
4. I 区 8 号住居址环出土状況		5. II b 区 調査区遠景(西から)	
写真図版 7	109	6. II 区 10 号溝(手前)・11 号溝(奥)(東から)	
1. I 区 9 号住居址遺物出土状況(西から)		写真図版 14	116
2. I 区 9 号住居址(西から)		1. II 区 13 号溝(右)・14 号溝(左)・3 号柱穴	
3. I 区 9 号住居址竪・発出土状況(西から)		列(北から)	
写真図版 8	110	2. II 区 16 号溝(右)・17 号溝(左)(北から)	
1. I 区 9 号住居址竪(西から)		3. II 区 18 号溝(左)・19 号溝(右)(南から)	
2. I 区 9 号住居址竪(西・正面から)		4. II 区 23 号溝(右)・24 号溝(左)(北から)	
3. I 区 9 号住居址环出土状況		5. II 区 26 号溝(右)・27 号溝(左)(北から)	

6. II区28号溝（右）・29号溝（左）（北から）	写真図版18	120
写真図版15	1. II a 区畝状造構造構確認（西から） 2. II a 区畝状造構全景（西から） 3. II b 区畝状造構確認（東から） 4. II b 区畝状造構全景（東から）	117
写真図版16	写真図版19	121
	1. I 区3号住居址出土遺物 2. I 区4号住居址出土遺物	
写真図版17	写真図版20	122
	1. I 区6号住居址出土遺物 2. I 区7号住居址出土遺物	
写真図版21	写真図版21	123
	1. I 区8号住居址出土遺物 2. I 区9号住居址出土遺物	
写真図版22	写真図版22	124
	1. I 区9号住居址出土遺物 2. I 区9号住居址出土鐵製品X線透過写真	
写真図版23	1. 住居址出土鐵製品X線透過写真	125

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

平成8年、甲西バイパス(建設中)および国道52号線のアクセス道路として、村道163号線のボトルネック解消事業が山梨県と八田村によって計画された。平成9年度、山梨県と八田村は協定書を結び、八田村道163号線ボトルネック解消市町村道県代行事業として八田村が主体となり工事が実施されることとなった。

工事区域は、山梨県埋蔵文化財センターによって平成7年に発掘調査が行われた大塚遺跡の隣接地である。そのため山梨県甲府土木事務所と八田村は埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、試掘調査の実施が決定された。平成10年当時、八田村には専門職員がないことから、敷島町の協力を得て試掘調査を実施した結果、平安時代と思われる住居跡や時期不明の瀧が数条確認された。

試掘調査結果をふまえ、甲府土木事務所と八田村教育委員会との協議の結果、平成11年度に発掘調査が行われることとなった。

(2) 調査の経過

村道163号線は、野牛島集落の北に位置する能蔵池から西へ向かい、国道52号線に通じている。道路の両側は現在、柿、キウイ、葡萄等が栽培されている農耕地となっており、一部では水田耕作も行われている。この水田部分に関して、調査区へ水がしみ出す危険性が予想されたため、水田に隣接する調査区の一部は水田の水が入る前に調査を行い、残りは収穫後に水が抜ける10月以降調査を行うこととした。上記の理由から、調査は大きく第1次調査と第2次調査に分かれる。

第1次調査 平成11年5月7日～平成11年9月10日

第2次調査 平成11年10月4日～平成11年11月19日

第1次調査は、II区(調査区区分については第2節参照)の水田隣接区域から調査を行った。水田に水が入るまでにできる限りのIIa区の水田隣接地を調査し、残りの水田隣接地については10月以降の調査とした。次に水田隣接地以外のII区を調査し、その後I区の調査を行った。9月で一度調査を終了し、整理作業を開始した。

第2次調査は、水田から水が抜かれた10月に開始した。主にI・II区の水田隣接地および水路が引かれていた区域を調査した。

(3) 調査組織

調査主体 八田村教育委員会

調査担当者 斎藤秀樹(八田村教育委員会)

調査参加者 潮田恵幸、江川晶子、長田美智子、小林素子、斎藤なおみ、桜井理恵、清水まき、新津かつみ、藤原洋子、保坂佳代子、穂坂美佐子、保延勇、矢崎康美、吉田晃明

第2節 調査の方法

(1) 調査方法とグリッドの設定

調査は、バックホーで表土を確認面まで下げ、人力で掘り下げながら遺構確認を行った。それとともに試掘トレンチを任意の場所に設定し、確認面より下層の堆積状況および遺構の有無を確かめながら調査を進めた。

調査を行うにあたって、調査区域を以下のように区分した。村道163号線を南北に貫く甲西バイパスを境に西側をI区、東側をII区とした。さらにI、II区を村道によって細分し、村道の北側をa区、南側をb区とした。つまり甲西バイパスの西側（I区）の村道北側はI a区、南側がI b区となり、甲西バイパス東側（II区）の北側はII a区、南側がII b区となる（第1図）。

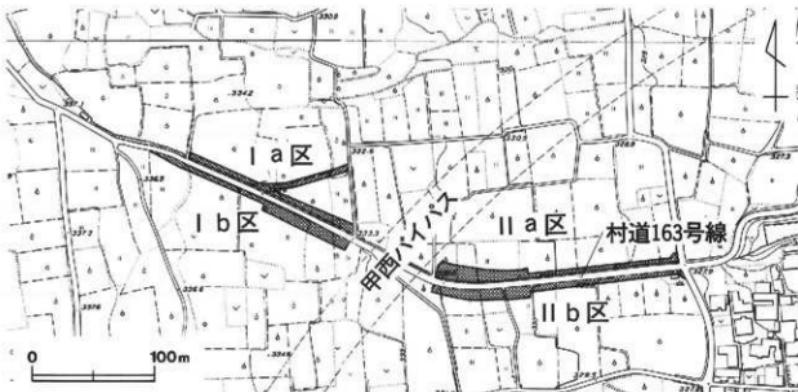
調査グリッドは、甲西バイパス測量図作成のために設置された2点のトラバースポイントを基準とし、 $5 \times 5\text{ m}$ の方眼グリッドを設定した。中部横断道と交差する地点から村道163号線が進路をやや北によりに変えるため、I区とII区とではトラバースポイントを変えて異なるグリッドを設定した。つまり、I区とII区ではグリッドの方位が異なっている。

グリッド名は、 5 m ごとに東から西へ数字（1.2.3.~）を与え、北から南には大文字のアルファベット（A、B~）を配置し、アルファベットと数字をハイフン（-）で組み合わせて表記している。例えば1号住居が位置する場所は、I a区のJ-10区である（第3・4・5図）。

なお、遺跡の所在する野牛島地域は、八田村の中でも遺跡が多い地域であり、山梨県埋蔵文化財センターによって隣接地域の調査が行われている。このような他遺跡との整合性をはかるため、調査区の国土地標を求めてある。国土地籍を基準としたグリッドについては、第3図を参照していただきたい。

(2) 基本層序

調査区は東西に約450mの広がりをもつ。そのため、耕作地をつくるための造成や旧流路などによって



第1図 野牛島・大塚遺跡発掘区域（1/4,000）

土地は改変を受けており、場所によって土層堆積は異なっていた。しかし、調査区全体を大きく見れば、以下の基本層序を読みとることも可能である。

第2図は本遺跡で最も標準の堆積を示す試掘坑の断面を模式化したものである。

I層 かつしょく はいかつしょく 土。耕作土。

II層 おういろしょくじ 黄灰色土。I層の鉄分が酸化し、やや黄色みがかる。

III層 あんかくしょくじ 暗褐色土。奈良・平安時代の遺物包含層。

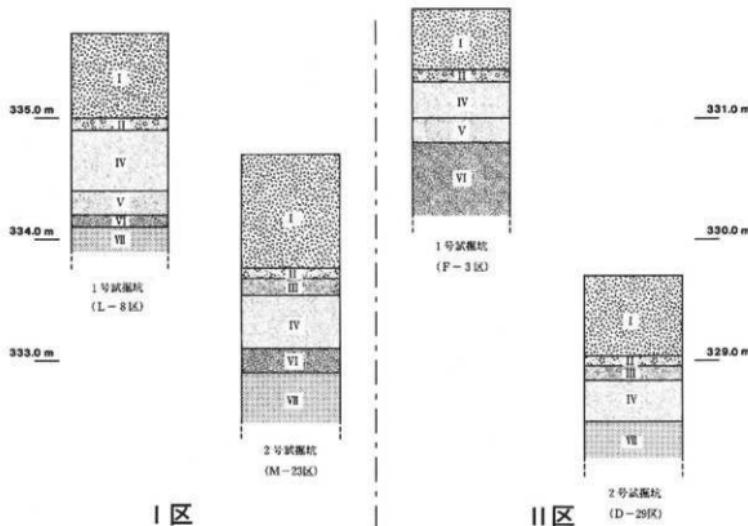
IV層 褐色～明褐色土。奈良・平安時代の遺構確認面。

V層 IV層とVI層の間に位置する砂礫層。

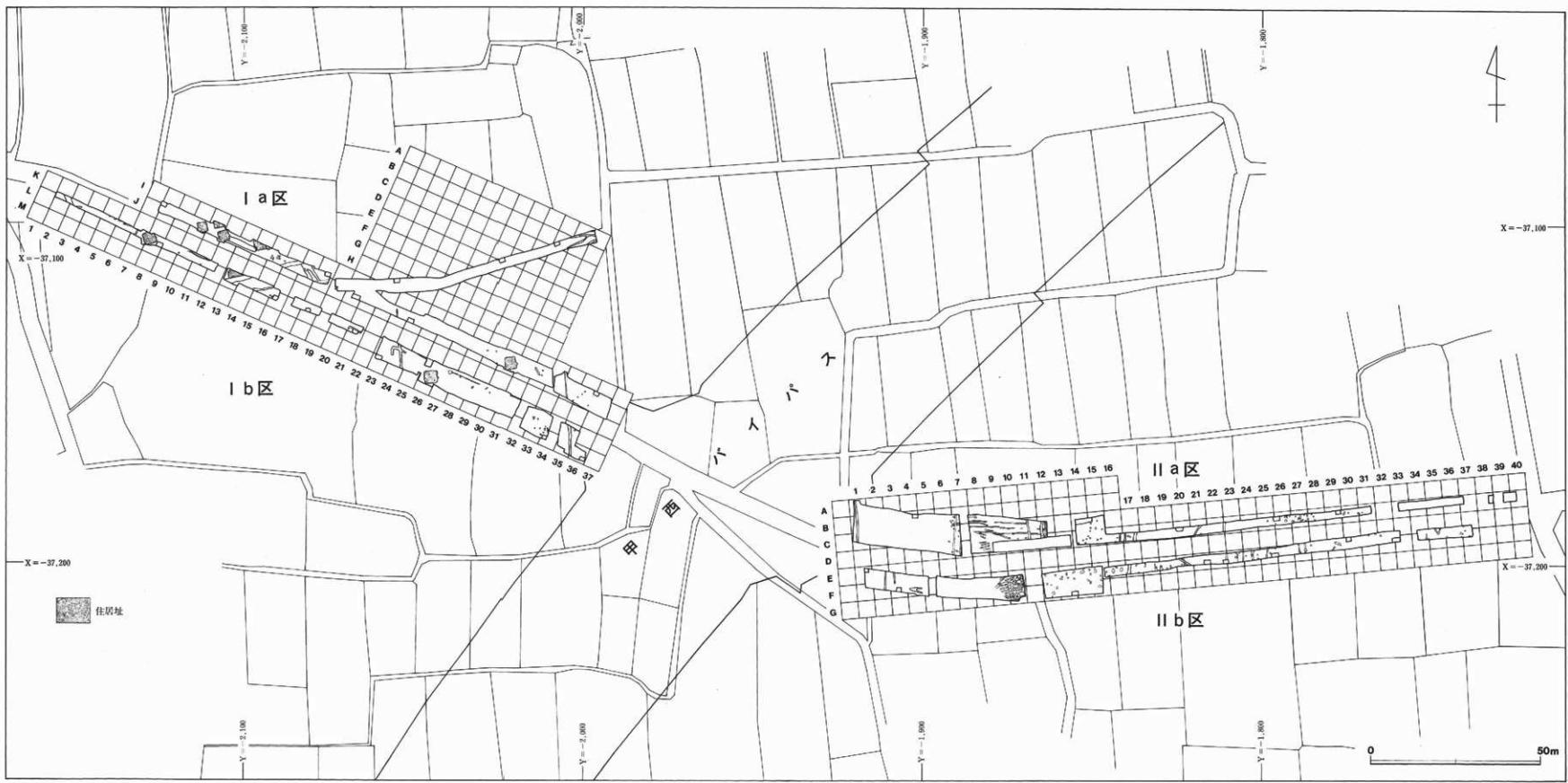
VI層 褐色土。砂を含む場合がある。IV層と連続する場所が多い。

VII層 砂礫層。

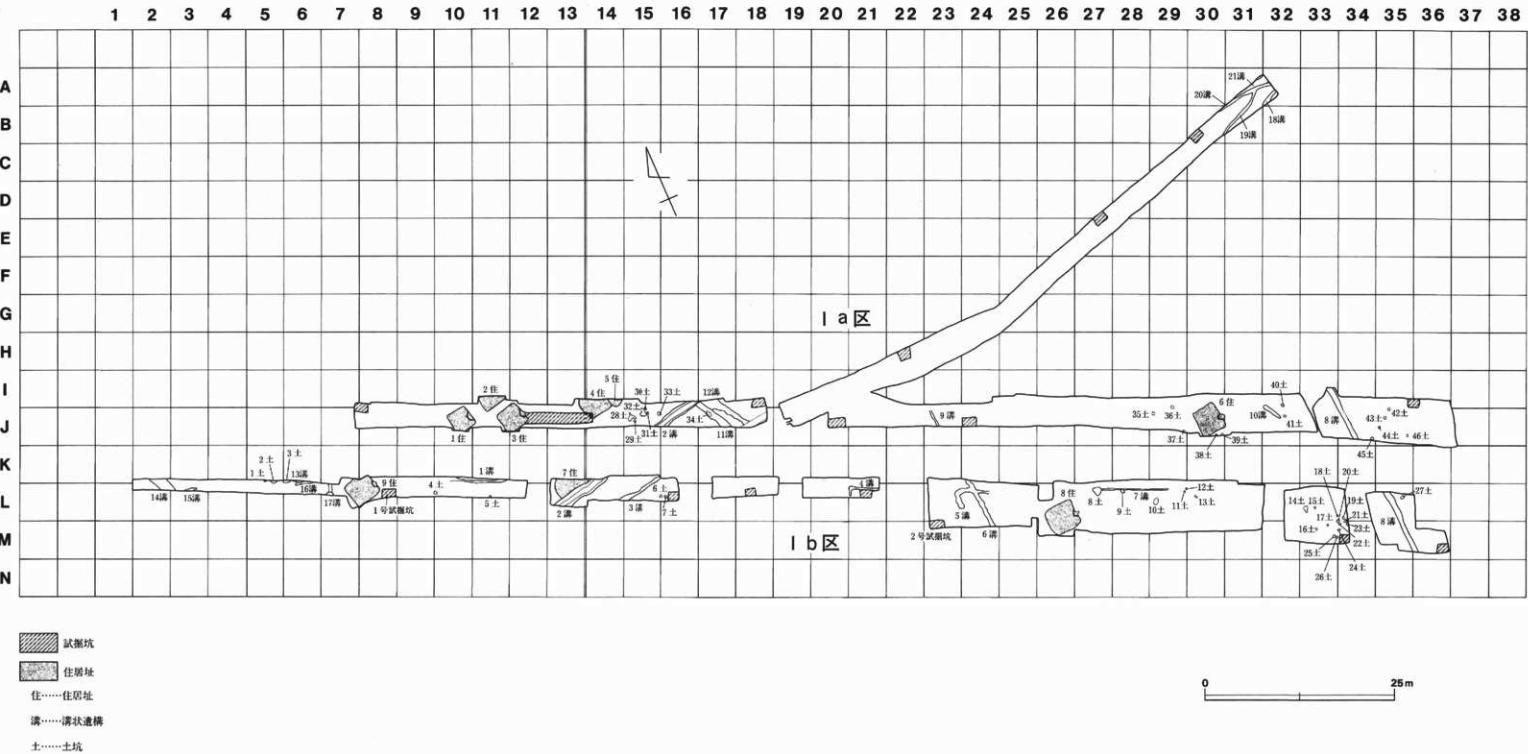
なお、VII層以下は、砂礫層や砂層が幾層にも堆積している。分層も可能であるが、場所による変異も大きく、ここでは一層として扱うこととする。今回のトレンチ調査では、VII層以下に文化層は発見できなかった。



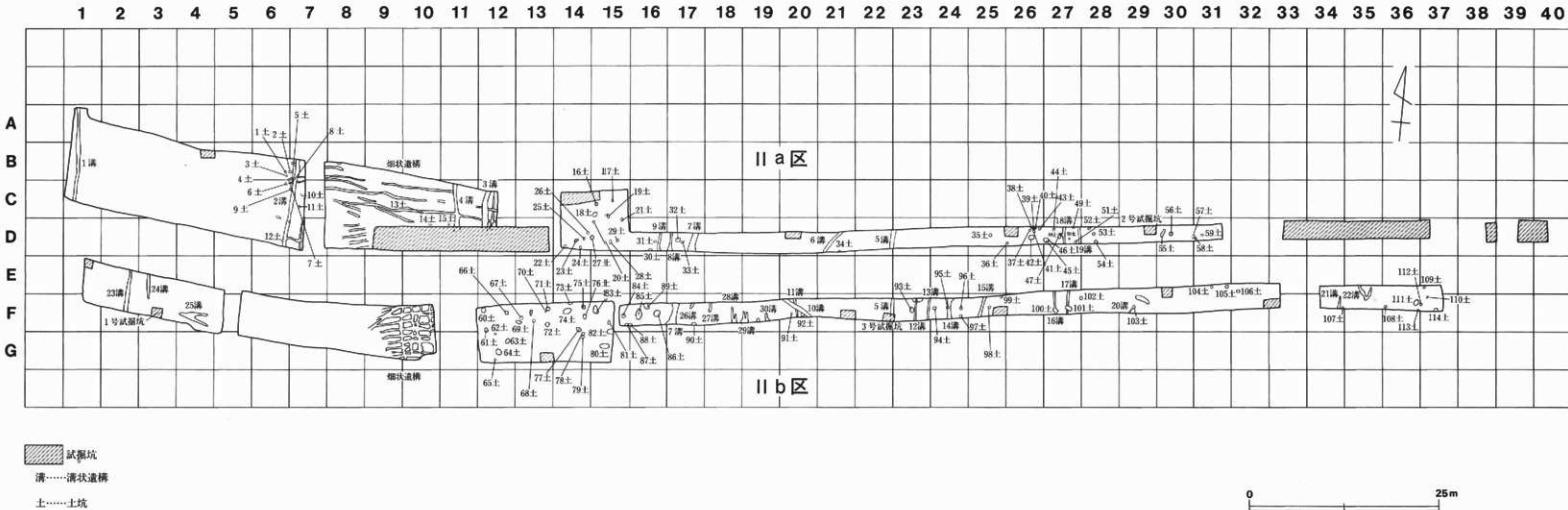
第2図 基本層序柱状図



第3図 野牛島・大塚遺跡全体図 (1/1,000)



第4図 I区全体図 (1/500)



第5図 II区全体図 (1/500)

第II章 遺跡概觀

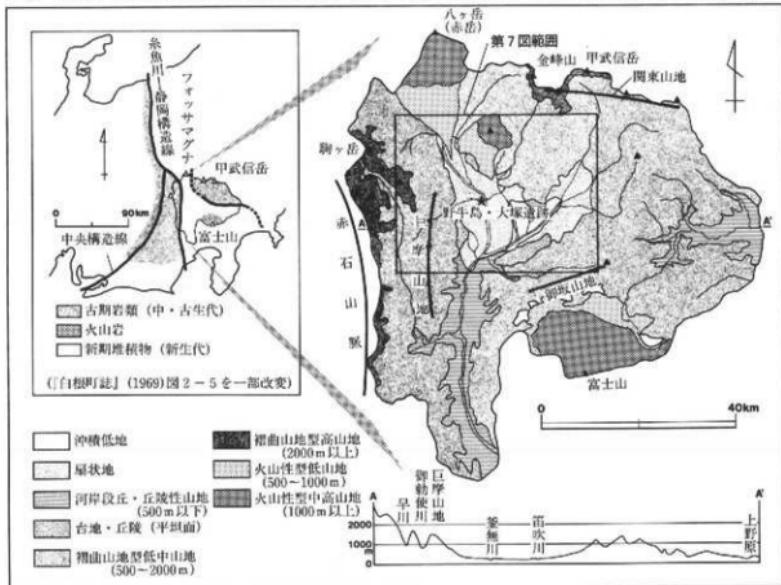
第1節 地理的環境

(1) 甲府盆地

日本の中央部にはフォッサマグナ (*Fossa Magna*) と呼ばれる地帯が南北に走り、日本列島を西南日本と東北日本に二分している。甲府盆地は長野県の松本盆地や諏訪盆地とともに、フォッサマグナの一画を占める。甲府盆地西部にはフォッサマグナの西縁である大断層、久慈川・鶴岡構造線が南北に走り、甲府盆地の西端を画している。巨摩山地や御坂山地、南アルプスなど盆地周囲の山々が褶曲し隆起したのに対して盆地地域は逆に沈降し、現在の甲府盆地が形成された（第6図）。

甲府盆地は山梨県のはば中央に位置し、周囲を複数の山系によって囲まれている。北から東は関東山地の主な山脈である秩父山地と大菩薩山地、南を御坂山地とその北側に隣接する曾根丘陵、西を南アルプスの前衛である巨摩山地に囲まれ、盆地床は韋崎きず、増穂たか、山中市を頂点としたやや歪んだ三角形となっている。盆地中央部で東西25km、南北15kmの広がりをもち、総面積は約350km²、標高は250~400mを数える。

地質の観点から周囲を囲む山地を外観すれば、南アルプスの主稜^{しゅりょう}赤石山地と盆地北側に連なる関東山地には、中生代(2億4500~6500万年前)および新生代古第3期(6500~2500万年前)に形成された古い地層が広く分布している。一方、南アルプスの前衛、巨摩山地や盆地の南を区画する御坂山地は、新生代新第3紀(2500~200万年前)に形成された御坂層群と呼ばれる複数の地層によって主に構成されている。富士山や八ヶ岳周辺の地質は最も新しく、第4紀(200万年前~)に入り活発となった火山活動に



第6図 山梨県地形図（1/100万）（山梨県地形区分図および土地分類図を基に作成）

よって形成された。

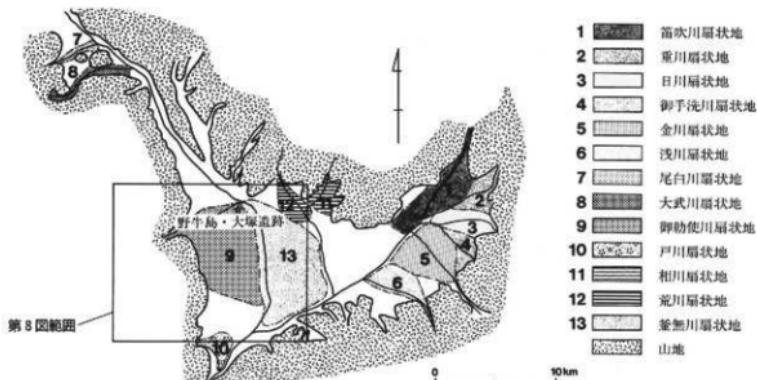
こうした山々に囲まれた盆地内部の地形は、盆地へ流れ込む諸河川によって作りだされていると言つてよい。なかでも釜無川と笛吹川は他河川と比べ規模が大きく、盆地内を流れる二大河川となっている。釜無川は、山梨県と長野県の県境に位置する巣^{のこ}岳を水源とし、八ヶ岳から流下しながら立場川や塩川を合わせて南流する。一方、笛吹川は秩父山地の甲武信岳に源を発し、山地を深く削りながら瀧^{たき}平で盆地に入り、西部から東南へ流れる。両河川は流域に広大な沖積平野を生みだすとともに、盆地西南部で合流して富士川と呼称を変え、最終^{まつとう}河口を南流し駿河湾にそそいでいる。

釜無・笛吹両河川のほか、山地から流れ下る多くの河川は、盆地山麓にそれぞれ扇状地を作り出している。盆地東部では、重川、日川、御手洗川、金川、浅川など多くの中小河川が盆地へ流れ込んでおり、複数の扇状地が重なり合う複合扇状地が形成されている(第7図)。盆地北部では、荒川が甲府北部の古期火山帯を解釈し、名勝地として名高い峡谷、昇仙峡を作りだすとともに、盆地床では小規模の扇状地を生み出している。一方、甲府盆地西部では巨摩山地から諸河川が釜無川へ流下し、それぞれ扇状地を作っている。なかでも御勅使川流域に形成された御勅使川扇状地は、日本でも有数の規模を誇る扇状地として広く知られている。八田村は、この御勅使川扇状地の北部に立地している。

(2) 御勅使川扇状地と八田村の地理的環境

八田村は甲府盆地の西端に位置し、甲府から西へ8kmの地点に所在する。村の東側には釜無川が南流し竜王町との境となる一方、北側には御勅使川が流れ韭崎市および双葉町との境界となっている。村の西側と南側は白根町に隣接し、さらに西へ進むと南アルプスの玄関口、芦安村に至る。総面積は8.3km²を数え、村の南西部に白根町が大きく入り込んでいるため、八田村の形は「匁」型となっている(第8図)。村役場の位置は北緯35°40'、東経138°29'、標高321mである。

八田村の地形・地質は、村の北と西を区画する御勅使川と釜無川によって形作られていると言つてよい。とりわけ村の大部分は、御勅使川が作り出す御勅使川扇状地に立地している。この御勅使川扇状地は以下のようないくつかの経過をたどり、形成されたと考えられている。



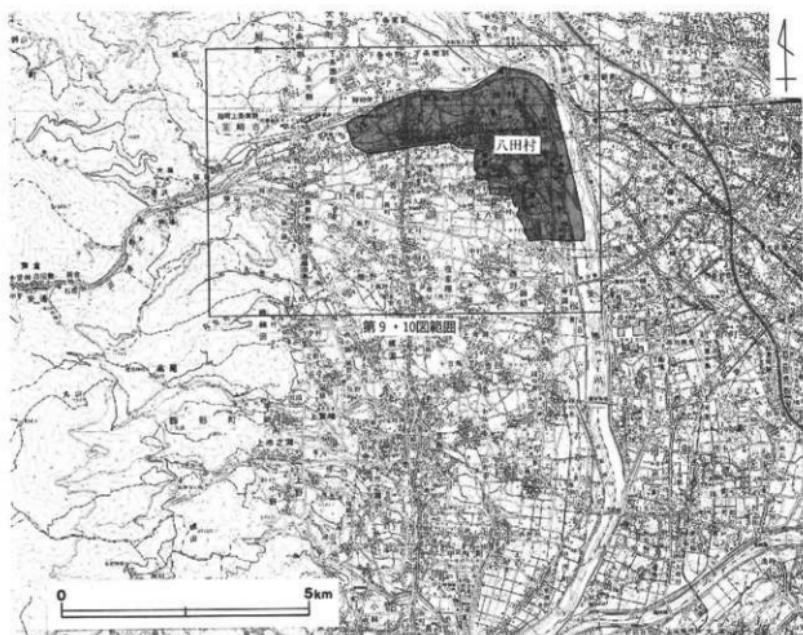
第7図 甲府盆地における扇状地 (1/40万) (高木・中山 [1987] による第1図に加筆修正)

唐松峠、ドノコヤ峠(1,700m)に源を発した御勅使川は、北流した後、芦倉付近で流れを東に変え、巨摩山地を急流する。巨摩山地の地質は、海底火山の噴出物である泥岩や岩が主体となる構造層が基盤となる、比較的軟弱な地層である。このため風雨による崩落が激しく、御勅使川による浸食も大きい。さらに御勅使川の河川勾配が急なため大量の土砂が平地に供給される。白根町有野付近で平野に入ると、河川勾配がゆるやかになりまた川幅が広がるため、水深は浅くなつて流速も弱まる。このため運搬しきれない土砂の堆積が進み、河床が高くなる。こうした河床面の上界とその結果起こる河道の転流が繰り返された結果、白根町塩前付近を扇の要とし半円錐形に広がる御勅使川扇状地が形成された。海抜は約250~500mを数え、総面積約40km²の広がりをもつ。

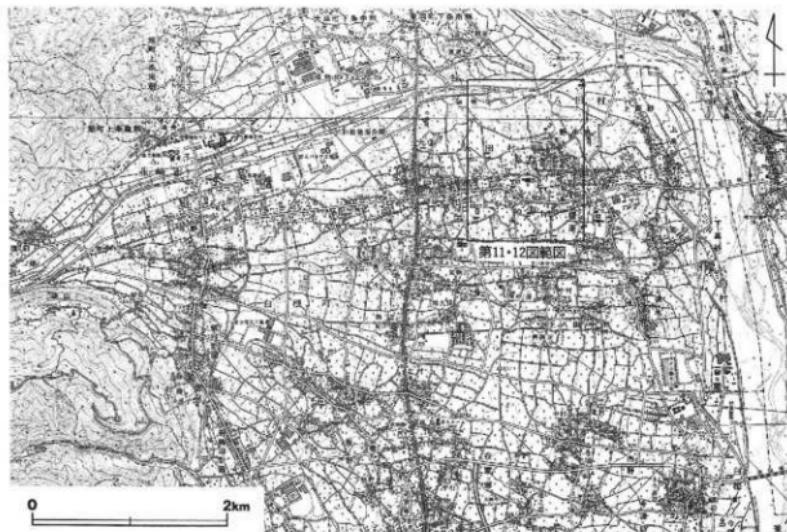
甲府盆地西部地域の地形をくわしく分析している高木勇夫、中山正民両氏によれば、御勅使川扇状地は扇頂付近を中心として新期扇状地で構成されている。高木・中山氏の言う新期扇状地とは完新世に形成された扇状地を意味する。御勅使川上流部には、堤防状に続く微高地すなわち泥流堤が多数確認できる。こうした泥流堤は御勅使川の土石流や泥流によって作られたと考えられている(第9・10図)。

御勅使川扇状地のほか、八田村を大きく形作るもう一つの地形は、釜無川の氾濫によって作り出された沖積平野である。村の西部は扇状地扇尖部から扇端部にあたるのに対し、村東部は、扇状地扇端部となるべき部分が釜無川によって削り取られ、沖積低地となっている。釜無川によって削り取られた部分には、高さ約10~20mの崖が形成され扇状地と沖積低地を画す境界線となっている。

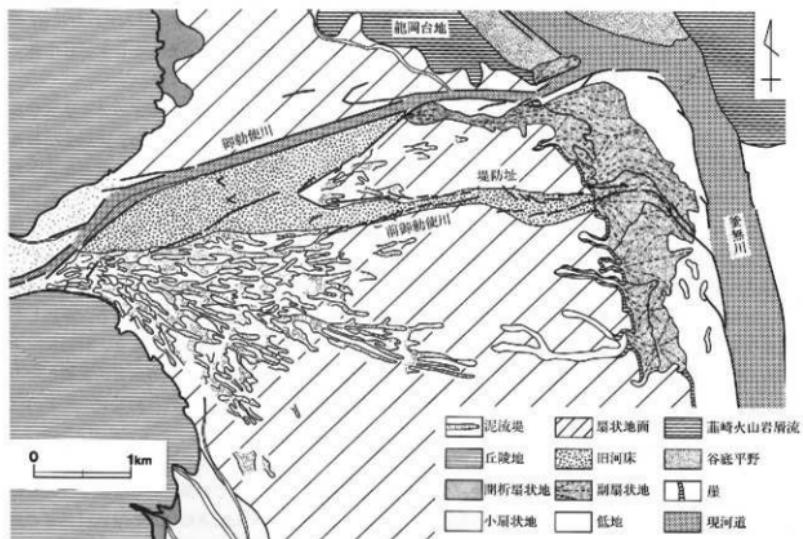
現在の御勅使川は村の北側を東流しているが、芦安と竜王を結ぶ県道芦安・竜王線が旧御勅使川の流



第8図 八田村位置図(1/10万)



第9図 八田村地形図 (1/50,000)



第10図 御勒使川扇状地地形分類図 (1/50,000)
(高木・中山 [1987] による第8図を基に、山梨県地形分類図・明治21年測量図を考慮し作成)

路であった。明治21年作成の2万分の1の地形図を紐解くと、はっきりと芦安・竜王線が河川として記載されている。また、明治時代に作成された地籍図でも、県道が御勅使川の流路として描かれている。一般にこの流路は「前御勅使」^{まへごせきし}と呼ばれ、大正時代魔河川となるまで機能していた。

この前御勅使川の流路上には扇状地と低地を画する崖線が見られない。それは前御勅使の運ぶ堆積物が崖線を埋積し、沖積低地に小規模の扇状地を形成しているからである。一方、崖線をV字に開折している小河谷の崖下にも小扇状地が見られる。御勅使川の支流などによって扇状地の崖が浸食されるのに對し、崖下は堆積物によって埋積されたと考えられる。沖積地上では、崖線に沿って複数の小扇状地が重なり合う複合扇状地が作り出されている。

河川の働きによって形成された御勅使川扇状地と沖積低地のほかに、八田村には小規模ながら火山起源の台地も存在する。垂崎から堀切橋を渡り八田村に入るとすぐ右手に、「赤山」と呼ばれる小高い丘が見える。今日では御勅使川によって二分されているが、この「赤山」は垂崎市に広がる龍岡台地と本来一続きの台地であり、龍岡台地の南端にはかならない。龍岡台地は八ヶ岳火山の崩壊による垂崎火山岩屑流を基盤としている。

(3) 遺跡の立地

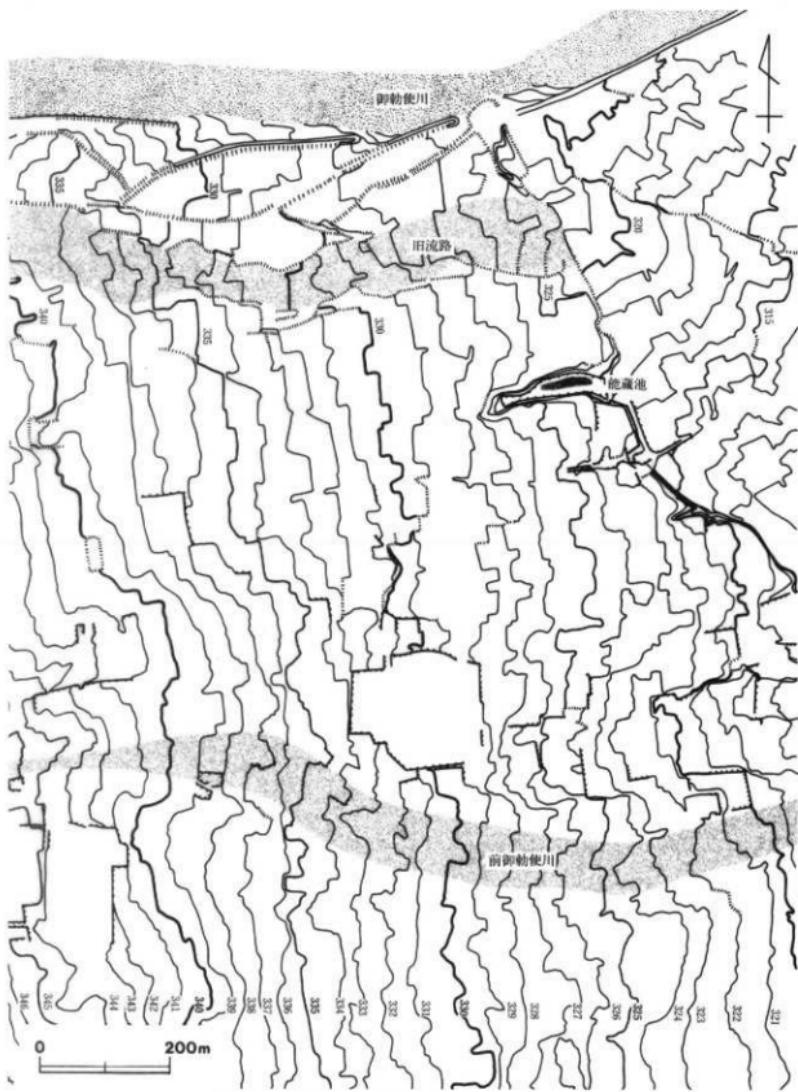
野牛島・大塚遺跡は、八田村の大字野牛島に位置している。東西に約400m延びる道路の拡幅部分が調査区域となるため、大塚、石橋、西ノ神、舞台など複数の字にわたって遺跡が広がっている。標高は西端で336m、東端で328mを数える。御勅使川扇状地の扇央部から扇端部にあたり、西から東へ緩やかに傾斜する平地に遺跡は立地している（第11・12図）。

調査区の東側には扇状地と沖積低地を区画する崖線が南北に走っている。調査区の東端から東へ70m行くと能藏池があり、この崖線を西側へ深く浸食している。能藏池は扇央部で地下に潜っていた伏流水が再び地上に湧き出てきた湧水池で、能藏池を源とする神明川を含めて、古くから今日まで野牛島、上高砂、下高砂、徳永の集落の重要な水源となっている。

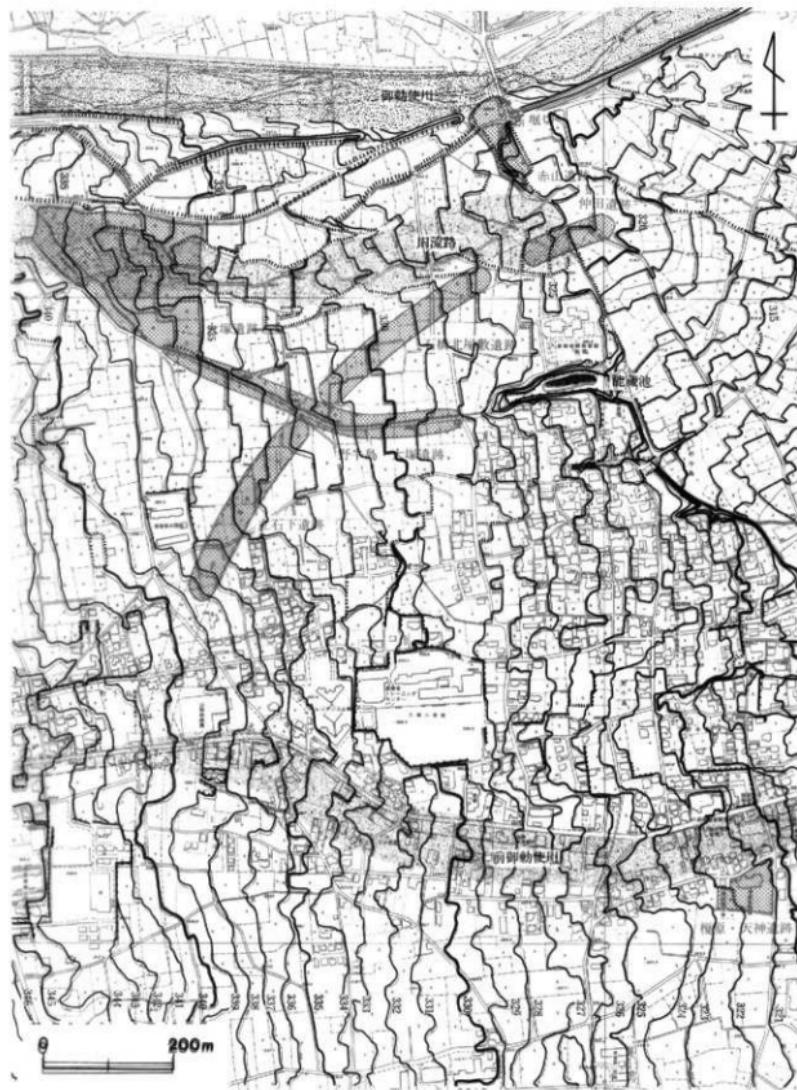
一方、調査区北側には遺跡と御勅使川の間に急な落ち込みが見られる。地図で確認すると、落ち込み部分で等高線はいたん途切れ、急に西へ飛びだした形となる。この落ち込んだ部分は、御勅使川あるいは割羽沢川の旧流路跡と考えられ、大塚遺跡の中央を流れていた流路と一致する。この流路を東へたどると、扇状地から沖積低地へ続く緩斜面となっており、明瞭な崖線が見られない。御勅使川の運ぶ堆積物によって崖が埋積され、沖積低地上に小扇状地が形成されている。等高線を追っていくと、扇状地上では西側に張り出した谷の形から沖積低地上に入ると東側へ張りだした形へ変化していることがわかる。

遺跡の西から南側にかけては、東から西へ傾斜する緩斜面が続き、比較的安定した土地を形成している。遺跡から約500m南側には、主要幹線道路となっている芦安・竜王線が東西に走っている。前述したとおり大正時代まで、この県道は前御勅使川の流路であった。『甲斐国志』の記述によると、御勅使川上流に「石積み出し」と「将頭頸」を設け、「堀切」を開削し、御勅使川の流路を現在の位置に変更したのは、武田信玄の治水事業とされている。しかし確実な証拠はなく、奈良・平安時代、御勅使川がどの位置を流れていたのかいまだに確定されていない。

野牛島・大塚遺跡の調査では部分的に砂礫層が見られたものの、大部分は明褐色土層を基盤として遺構が構築されていた。隣接する大塚遺跡や、立石下遺跡、石橋北屋敷遺跡でも部分的な砂礫層は見られるが、明褐色土を基盤としている点は変わりがない。つまり、野牛島・大塚遺跡周辺の地域は洪水の影響を受けにくく、明褐色粘土層が広がり比較的安定した地形を保持していたと考えられる。こうした現御勅使川と前御勅使川の間の微高地に野牛島・大塚遺跡や隣接する遺跡が営まれたと言えるだろう。



第11図 野牛島・大塚遺跡周辺地形図 (1/7,500)



第11図 獅子島・大根瀬諸島周辺地形図(1/7,500)



第12図 遺跡位置図 (1/7,500)

第2節 歴史環境

八田村は近年まで、遺跡が少ない地域と考えられてきた。実際に、昭和54年山梨県教育委員会が発行した『山梨県遺跡地名表』を見ると、八田村では赤山遺跡（2）だけが登録されているにすぎない。しかし、近年、八田村にも甲西バイパスや工場建設などの大規模開発が進むとともに、新たな遺跡が発見され本格調査が実施されている。また、開発行為から埋蔵文化財を保護するため八田村の遺跡を正確に把握する必要性が生じ、平成11年度には村内遺跡の分布調査が行われ多数の遺跡が発見された。以下、これらの新たな知見をもとに、野牛島・大塚遺跡周辺の遺跡環境を概観していく（第13図）。

野牛島・大塚遺跡（1）の立地する扇状地先端部は、八田村の中でも遺跡がとくに集中する地域である。北西に隣接する大塚遺跡（4）は、工場建設に伴い発掘調査が行われ、古墳時代前期および8～9世紀にあたる奈良・平安時代の集落址が発見された。また、甲西バイパス建設に伴い、野牛島・大塚遺跡の北側で石橋北屋敷遺跡（5）、南側で立石下遺跡（6）が発見され、山梨県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われている。調査の結果、立石下遺跡では9世紀の平安時代の集落跡を中心とした遺構が検出された。とくに注目すべき資料として、小型の住居から県内では2例目となる小壺片の奈良三彩が出土した。一方、石橋北屋敷遺跡では、掘立柱建物跡、鎌倉時代の道路跡や戦国時代の区画溝等、多数の遺構が発見された。とくに調査区の北東区域から中世の遺構が検出されている。「石橋北屋敷遺跡」の名が示すとおり、遺跡の東側は地元で「北屋敷」や「古屋敷」と呼ばれている。この地域は野牛島の集落発祥の地とも伝えられており、能蔵池北側周辺が中世において集落の中心であった可能性がある。

石橋北屋敷遺跡から甲西バイパスのルート上を北東へ進んだ地点では、仲田遺跡（3）が発見された。仲田遺跡の立地する地点は御勅使川によって浸食崖が堆積され、沖積低地へと広がる小扇状地が形成されている。そのため、遺跡は厚く砂礫層に覆われ、上述した遺跡とは基盤となる土壤が全く異なっている。山梨県埋蔵文化財センターによる調査の結果、中世から近世にわたる床土が複数確認された。床土からは米づくりにかかわった人々の足跡が検出されている。こうした水田層とそれを覆う砂礫層は何枚もついており、洪水の被害を受けてはまた水田を作り直した当時の人々の営みを読みとることができ。水田路のはか調査区南に参道と推測される遺構が発見されている。

仲田遺跡の北側には、赤山遺跡が位置している。前述したように遺跡が立地する「赤山」は、御勅使川によって寸断されてはいるが、蓮崎火山岩屑泥流を基盤とした龍岡台地の南端である。赤山遺跡では、绳文時代の土器片や石斧が採取されている。

一方、現在の県道つまり前御勅使川の南側では、情報センター建設に伴い榎原・天神遺跡（7）が発見され、調査が行われた。調査区の南側に、10世紀の住居跡2軒、古墳時代の遺物を伴う畠状造構や時期不明の溝などが検出された。榎原地区の西方、白根町百々地区には、百々遺跡（8）が発見され、山梨県埋蔵文化財センターによって現在調査が進められている。これまで10世紀を中心とする平安時代の住居跡が100軒以上発見されたほか、牧の存在を伺わせる牛や馬の骨等が多数出土している。また、金ばしや八稟鏡、石帶など一般集落では見られない遺物が検出されている。



- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 野牛島・大塚遺跡 | 6. 立石下遺跡 |
| 2. 赤山遺跡 | 7. 樅原・天神遺跡 |
| 3. 仲田遺跡 | 8. 百々遺跡 |
| 4. 大塚遺跡 | 9. 舞台遺跡 |
| 5. 石橋北屋敷遺跡 | 10. 徳永・御崎遺跡 |

第13図 八田村周辺の遺跡 (1/20,000)

(註1) フォッサマグナを和訳すれば「大きな溝」である。エドムンド・ナウマンによって名付けられ、今まで重要な地質区分の名称・概念として使用されている。しかしその東端は決定されておらず、その性格・成因についても未だに不明な点が多い。近年、糸魚川・静岡構造線を北アメリカプレートとユーラシアプレートの境界とみなして、二つのプレートの動きにフォッサマグナの成因を求める考え方があるが、なお問題が残されている。

(註2) 高木勇夫・中山正民 1987

引用・参考文献

- 経済企画庁 1973 「土地分類図－山梨県－」
- 河西 学 1999 「中部横断道試掘調査のテフラ分析」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 齊藤亨治 1998 「日本の扇状地」 古今書院
- 白根町誌編纂委員会 1969 「白根町誌」 白根町
- 高木勇夫・中山正民 1983 「甲府盆地西部地域の地形」『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』第18号
1987 「微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程」『東北地理』39
- 新津 健 1997 「大塚遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第137集 山梨県教育委員会他
- 畑 大介他 1998 「山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第152集 山梨県教育委員会
- 八田村誌編集委員会 1972 「八田村誌」 八田村
- 保坂康夫 1999 「御動使川扇状地の古地形と遺跡立地—中部横断道の試掘調査の成果から—」
『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 山下 畏他 1995 「フォッサマグナ」 東海大学出版会
- 山梨県 1984 「国土調査 土地分類基本調査 甲府」
- 山梨県 1985 「国土調査 土地分類基本調査 御岳昇仙峡」
- 山梨県 1986 「国土調査 土地分類基本調査 萩崎・市野瀬」
- 山梨県 1993 「国土調査 土地分類基本調査 大河原・鍊沢」
- 山梨県教育委員会 1979 「山梨県遺跡地名表」
- 雄山閣 1968 「甲斐国志」

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

第1節 I区の調査

(1) 住居址

1号住居址 (第14・15図、第5表、写真図版2・17・23)

位置 I a 区、J-10区に位置し、北東2mに2号住居址、南東3mに3号住居址が近接している。

遺存 耕作のための造成によって上部の大部分が失われている。遺存状態のよい竈周辺でも床面と確認面の比高差は約12cmしかない。とくに西側は床と確認面のレベル差がほとんどない状態であった。南西隅は用水路の工事によって削平されていた。

形状 圓角方形を呈す。

規模 東西2.8m、南北2.9mを測る。

床面 顕著な硬化面は確認できなかった。ほぼ平坦である。

柱穴 確認できなかった。

竈 東壁のやや南よりに構築されている。竈の上部は削平されており、崩れた袖と天井部だけが検出された。袖は明褐色粘土をベースにして造られている。心材として石等が使用された痕跡は確認できなかった。燃焼部には焼土が約12cmにわたって厚く堆積し、堆積した焼土はレンガのように硬くしまった状態で検出された。

竈内に堆積した焼土を微細部分析した結果、イネ科イネ属が1点検出され、また、コナラ属コナラ亜属クタギ節1点が同定された。

土坑 竈南側に隣接して土坑が掘り込まれている。円形で直径約28cm、深さ約15cmを数える。覆土は暗褐色土が主体で、焼土、炭化物がやや多く混入していた。

遺物 出土した遺物はそれほど多くない。1は土師器環、2・3は須恵器の环片である。4・5は土師器ロクロ甕、6は用途不明の鉄製品である。

出土状況 削平が激しく、遺構上部が削られているため、結果として床面付近だけの遺物が検出された。遺物の分布は住居址の南側にはば限られ、北側ではほとんど検出されていない。器種別にみると、土師器ロクロ甕片が竈から集中して発見されたのに対し、环片は南壁際からまとまって出土した。

時期 8世紀後半が考えられるが、良好な資料がなく判断しがたい。

2号住居址 (第16図、第5表、写真図版2・17)

位置 I a 区、I、J-11区に位置し、南東側1mに3号住居址、南西側2mに1号住居址が隣接している。

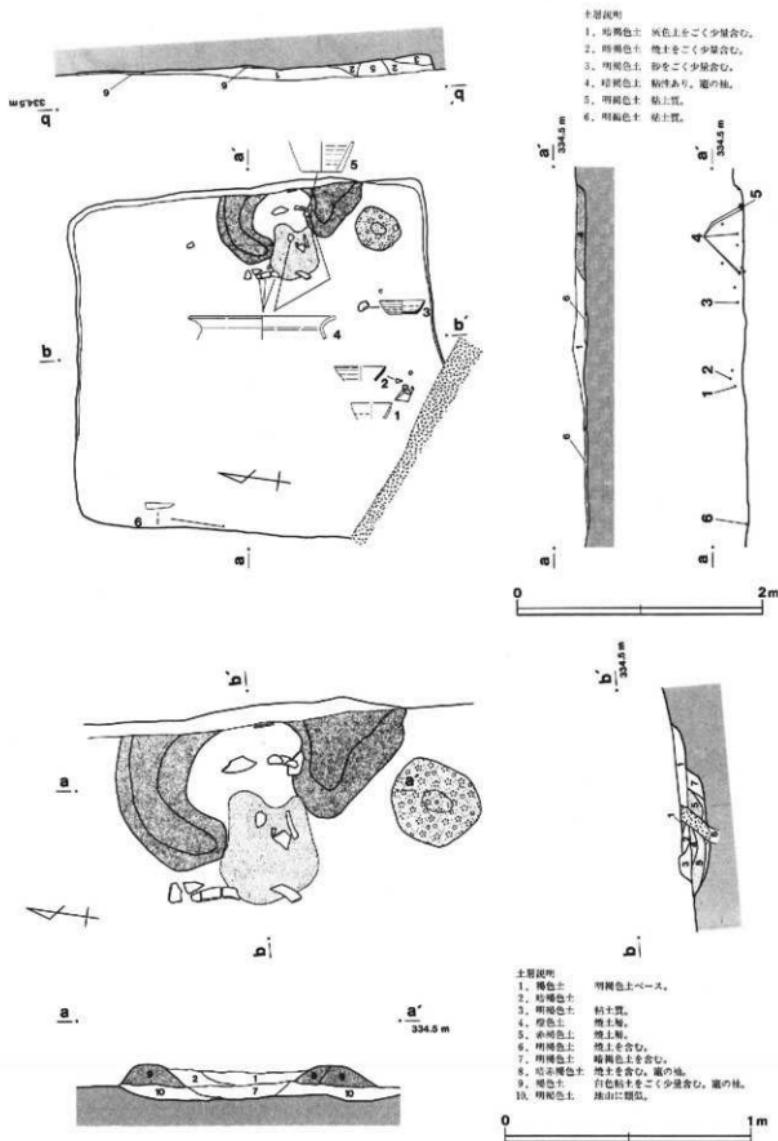
遺存／形状／規模 北側約半分が調査区外にのびているため、正確な規模、形状は不明である。南東角から推測すると、ほかと同じ圓角方形である可能性が高い。

床面 ほぼ平坦である。壁際を除いて床は硬化面となっていた。

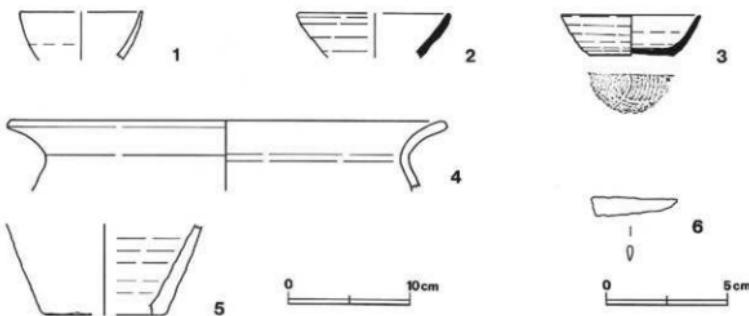
柱穴 確認できなかった。

竈／土坑 調査区内では発見されなかった。他住居址の例から推測すれば、調査区外の東壁に造られている可能性が高い。

遺物 住居の約1/2を調査したにもかかわらず、遺物の出土量は少ない。土師器の环片や甕片が数点



第14図 1号住居址および竪平・断面図 (1/20・1/40)



第15図 1号住居址出土遺物 (1/2+1/4)

と図示した遺物で全てである。1は須恵器甕の口縁部、2は土師器の壺である。1と2は覆土上層から出土した。3は須恵器甕の底部で、外面に格子文の叩きが施されている。4は須恵器壺の底部である。

出土状況 遺物は覆土上層からの出土が多い。遺物の総数が少ないため、顕著な遺物分布の偏りは把握できない。しかし住居址全体で見ると、少なくとも住居址南側の床面付近には遺物が分布していないことがわかる。

時期 出土遺物には完形土器がなく、いずれも覆土上層からの出土である。このため正確な使用時期を比定することは難しい。

3号住居址 (第17・18・19図、第5表、写真図版3・17・18・23)

位置 I a 区、J-11, 12に位置する。北西側1mに2号住居址が近接し、少し離れて南東側7.5mに4号住居址が築かれている。

遺存 遺存状態は良好で、確認面から床面までの深さは約33cmを数える。

形状 隅丸方形を呈す。

規模 東西3.3m、南北3.1mを測る。

床面 ほぼ平坦で、住居址の中央部から硬化面が検出された。

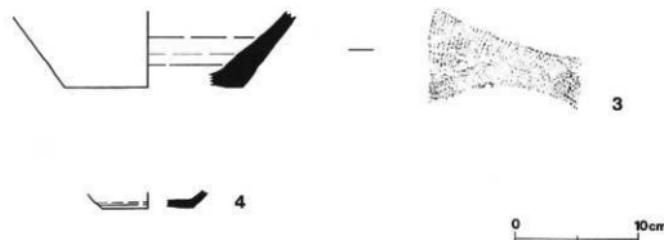
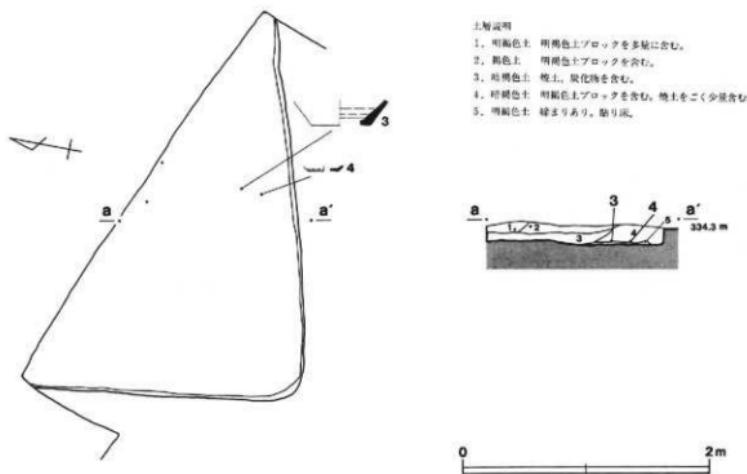
柱穴 確認できなかった。

竈 東壁のやや南よりに造られている。遺存状態がよく、両側の袖がほぼ完全な形で残存していた。土層断面から竈の構築手順を考えると、まず地山を少し掘りくぼめ、暗褐色土を盛って袖の基底部を作り、その上に明褐色土の粘土を貼って袖と天井部を構築したと推察される。

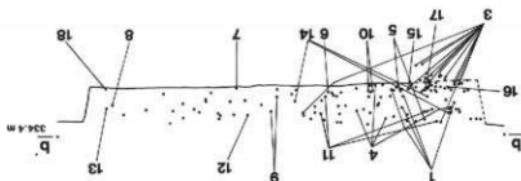
竈内には焼土や灰、炭化物を含んだ層が10cm前後堆積し、内壁もかなり赤く焼けていた。こうした遺存状況から竈が長期間使用された可能性が考えられる。また、竈内に堆積した焼土を微細物分析した結果、マメ類2点、イネ1点が同定され、そのほか焼けた骨片が検出された。

土坑 1号住居址と同様に、竈の南側に隣接して最大幅44cm、深さ約22cmを測る円形の土坑が検出された。覆土は暗褐色土を主体とし、焼土、炭化物および黄白色粘土を含んでいる。

遺物 鉄製品を含む多数の遺物が出土した。壺は土師器が極端に少なく須恵器が大多數を占める。一方、甕は須恵器に比べ土師器のロクロ甕が多い。

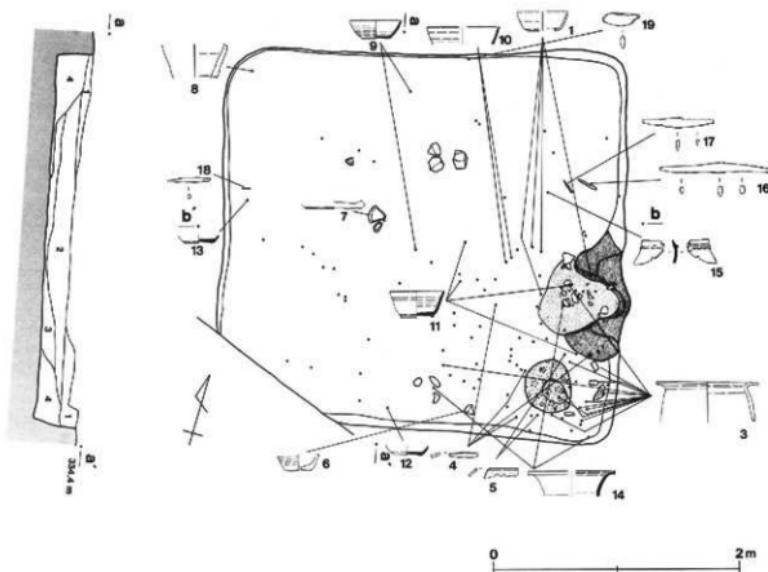
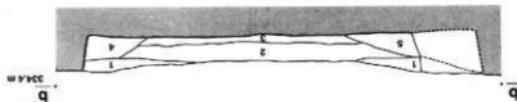


第16図 2号住居址平・断面図(1/40)・出土遺物(1/4)

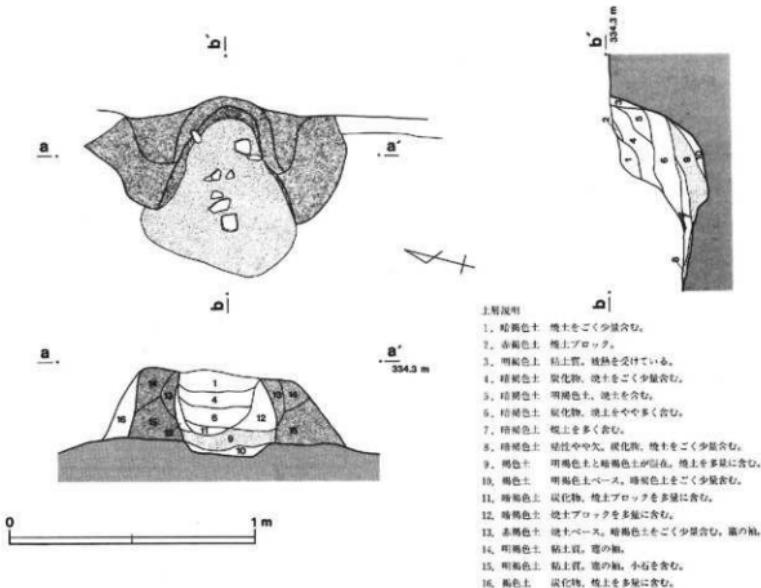


土層説明

1. 黄色土 硫化物、地土を多く少量含む。
2. 鮎褐色土 硫褐色土ブロックを含む。硫化物、地土を含む。
3. 鮎褐色土 硫化物、地土を多く少量含む。
4. 鮎褐色土 硫化物、地土を多く少量含む。小石を含む。
5. 鮎褐色土 硫褐色土を多く含む。硫化物、地土を含む。



第17図 3号住居址平・断面図 (1/40)



第18図 3号住居址竪平・断面図 (1/20)

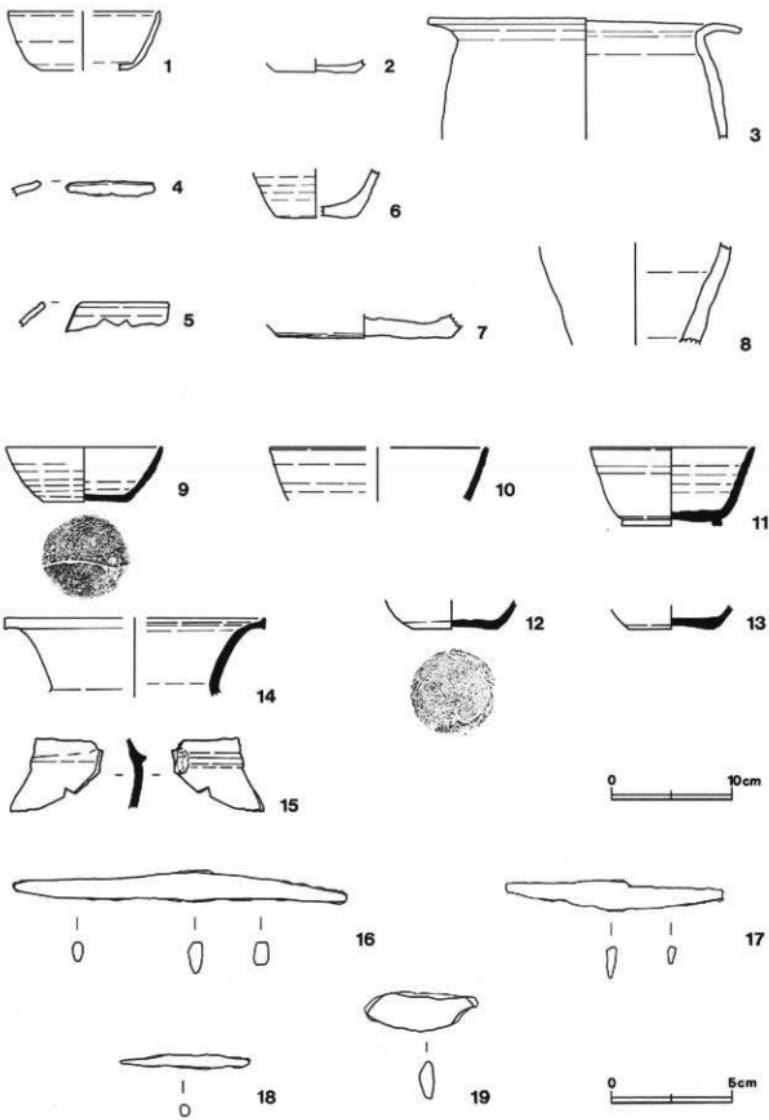
1・2は土師器片である。どちらもかなり摩滅している。3・5～8は土師器ロクロ甕。4は土師器甲斐型の甕である。9・10は須恵器の环。9は磨耗が激しい。11は高台環で、高台が底部外よりに付けられたタイプである。12・13は須恵器环の底部片であり、いずれも回転系切り痕が見られる。13はかなり摩滅している。14は須恵器の甕、15は凸凹四脚の肩部片である。16～19は鉄製品である。16・17は刀子と考えられる。18・19の用途は不明である。

出土状況 遺物の出土状況を平面でみると、住居址南側に遺物が多く分布しており、とりわけ竪周辺に集中する傾向がある。一方、住居址の北東部分からはほとんど遺物が出土していない。器種別にみてみると、竪から南側の土坑にかけては甕、とくにロクロ甕が多く、竪の北から西側にかけては須恵器の环が数多く分布している。

次に垂直方向から遺物の分布をみると、上層から下層まではば偏らずに遺物が出土している。なかでも床面近くで検出された遺物はほとんどが竪周辺に分布する。

なお、中央やや北よりの部分から、床面上に石が3個まとまって出土した。そのうち2個は一つの石が割れたものである。被熱を受けているが、加工された形跡はない。また、刀子(16・17)が2点並んで竪北側の床面上から出土した。

時期 床面上から出土した土器の中に時期決定の指標となる土器がないため、精度の高い時期を決定することは難しい。しかし、須恵器杯(9)を考慮すれば宮ノ前III～IV、8世紀後半の可能性がある。



第19図 3号住居址出土遺物 (1/2・1/4)

4号住居址（第20・21図、第6表、写真図版4・18）

位置 I a区、I、J-13、14区に位置する。北西側7.5mに3号住居址があり、住居址東側は5号住居址に切られている。

遺存／形状／規模 住居址北側の約1/3が調査区外にのびており、東側は5号住居址に壊され、南西隅は試掘坑で破壊されているので正確な規模は不明である。現存部で南北は3.1m、東西は少なくとも3.6mの規模を持つ。形状は隅丸方形を呈すものと考えられる。

床面 地山に礫が混入しており、やや凹凸が激しい。顕著な硬化面は確認できなかった。

柱穴 確認できなかった。

竈／土坑 調査区内では発見されなかった。他住居址の例から推測すれば、調査区外の東壁に造られている可能性が高く、5号住居址によって一部破壊されていると考えられる。また、南東隅に浅く掘り込まれている土坑は竈に伴う土坑の可能性が高い。

遺物 1・2は土師器のロクロ甕、3は甲斐型甕の底部である。4~10・12・13は須恵器の环である。12は色調が明褐色であるため土師器に見えるが、回転ヘラケズリなど須恵器の技法で作られている。15・16・17は須恵器环の底部片で、いずれも摩滅が進んでいる。18は須恵器高环の脚部透かし部分に当たる。後世の混入であろう。

出土状況 住居址北西隅と南東隅の土坑周辺から遺物が集中して出土した。垂直方向からみると北西部のはとんどの遺物が床付近に集中しているのに対し、南東部分では上層からも遺物が出土している。おそらく東壁に竈が敷設されていたため、上層から遺物が出土し、集中したものと考えられる。土師器のロクロ甕1・2はこの南東部から出土している。一方、北西部では床面付近から須恵器の环片が多数検出された。

時期 床面から出土した高台环（11）や須恵器杯（5・6）などを資料として判断すれば、宮ノ前IV期、8世紀の第4四半期に比定される。

5号住居址（第20・21図、第6表、写真図版4）

位置 I a区、I-14区に位置し、4号住居址の東側を掘り込んで造られている。

遺存／形状／規模 住居址北側の約3/4が調査区外の北にのびていることから、正確な規模、形状は不明である。4号住居址の東側を壊して造られていた。確認面から床面までの深さは約40cmを測る。

床面 ほぼ平坦である。顕著な硬化面は発見されなかった。

柱穴 確認できなかった。

竈／土坑 調査区外に造られている可能性が高い。

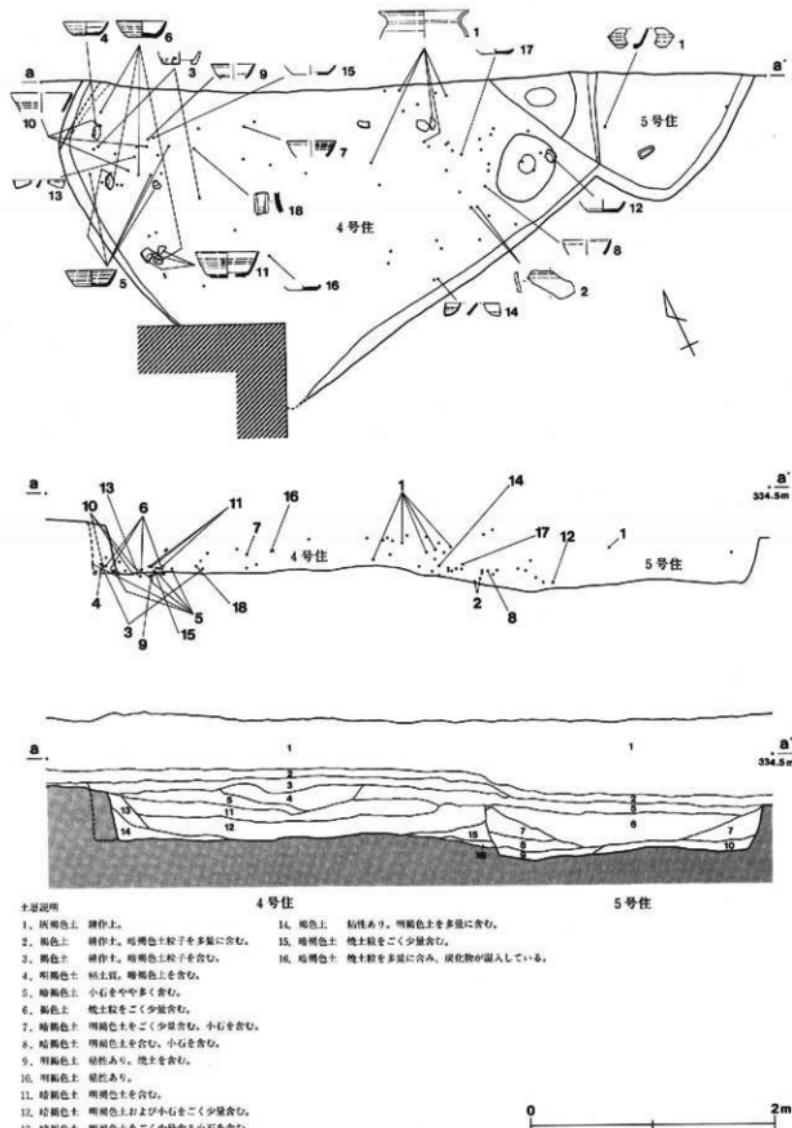
遺物 発掘した面積に対して、遺物の出土量は少なく、いずれも小片であった。1は須恵器の环、2は土師器の环である。

出土状況 ほとんどの遺物が上・中層から出土している。

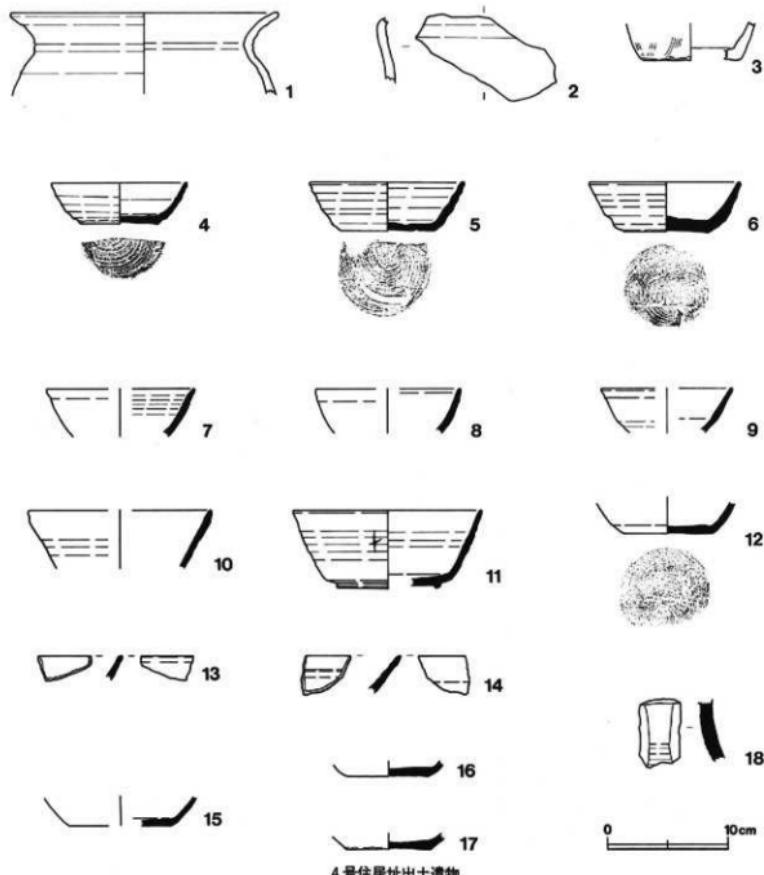
時期 出土遺物が少なく正確な時期を判断できる資料がない。4号住居址を切っていることと中層から出土した环片から考えて、9世紀の可能性がある。

6号住居址（第22・23・24図、第6・7表、写真図版4・5・19・23）

位置 I a区、J-30区に位置し、道路を挟んで西側約20mに8号住居址、南東側16mに8号溝がある。



第20図 4・5号住居址平・断面図 (1/40)



4号住居址出土遺物



5号住居址出土遺物

第21図 4・5号住居址出土遺物 (1/4)

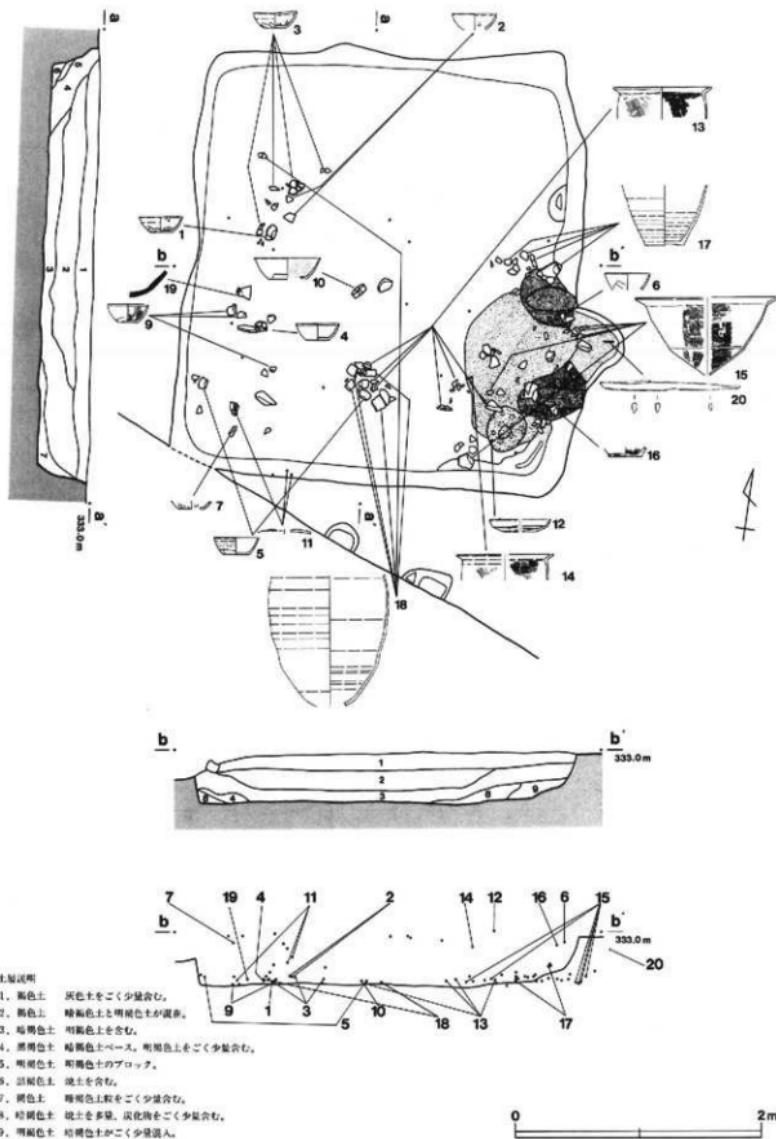
0 10cm

- 遺存** 全体的に残りがよく、確認面から床面までの深さは約45cmを測る。
- 形状** 隅丸方形を呈す。
- 規模** 東西3.2m、南北3.6mである。
- 床面** ほぼ平坦で、粘土質の地山を床面として利用している。
- 柱穴** 確認できなかった。
- 竈** 住居址の東壁やや南側に造られている。天井部は壊れていたが、袖の基底部が残存していた。袖の基底部には明褐色の粘土が利用されている。心材として石等が用いられた形跡は確認できなかった。竈内には焼土が10cm堆積し、竈の内壁も熱を受け真っ赤に変色していた。竈の長期間にわたる使用が推測される。
- 土坑** 竈南側に隣接して土坑が掘り込まれている。円形で直径35cm、深さ15cmを測る。覆土上層の一部分に明褐色の粘土と焼土ブロックが堆積していた。竈の構築材や焼土が流れ込んだものであろう。覆土の大部分は黒褐色土でしまりがなく、炭化物や焼土粒が多量に含まれていた。この覆土の微細物分析を行った結果、多数の炭化物が検出された。しかし、微細なため樹種を同定するに至らなかった。
- 遺物** 6号住居址の特徴は、須恵器がほとんど出土せず、検出した遺物の大多数は土師器である点にある。固化した中では、19の須恵器甕片のみである。一方、土師器のなかでも甲斐型环の出土数が多い。
- 1・7は甲斐型の环であり、内面に暗文が描かれ、外面にヘラケズリが施されている。いずれの环も摩耗しており、暗文やヘラケズリの特定が難しい。9は甲斐型内黒土器の环、8・10は内黒土器の环である。11は土師器の环蓋、12は土師器皿で底部にヘラケズリの痕が見られる。13・14・16は甲斐型の甕、15は甲斐型の鉢、17・18は土師器ロクロ甕である。20は鉄製の刀子である。
- 出土状況** 多くの遺物は竈周辺および住居址南から西側にかけて発見された。一方、住居址の北東部分からはほとんど遺物が出土していない。垂直方向から見ると、覆土上層（第1層）から若干の遺物が出土したが、ほとんどの遺物は床面に接して検出された。覆土中層にあたる2層ではほとんど遺物が検出されていない。また、覆土第1層出土土器と覆土下層になる第3・8・9層出土の遺物では接合する資料が見られなかった。以上の点から、第1層出土遺物と第3・8・9層出土遺物とはでは明確な時期差があると考えられる。次に器種別にみると、はっきりとした遺物の分布傾向がつかめる。竈周辺では煮炊き具である土師器の甲斐型甕やロクロ甕が出土し、住居址西側では供膳具である甲斐型环が多数出土した。
- また、刀子が1点、竈の奥壁に垂直にへりついて出土した。この出土状況を考えると、自然堆積によるものではなく、意図的に刀子が竈内に廃棄された可能性が考えられる。
- 時期** 甲斐型环から判断すれば、宮ノ前VI期、9世紀の第2四半期に比定される。

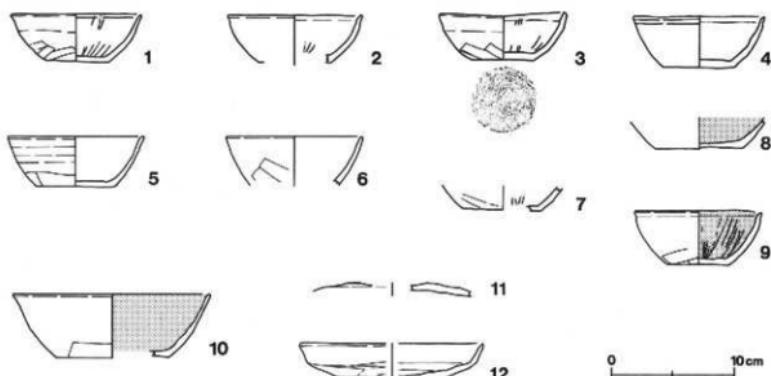
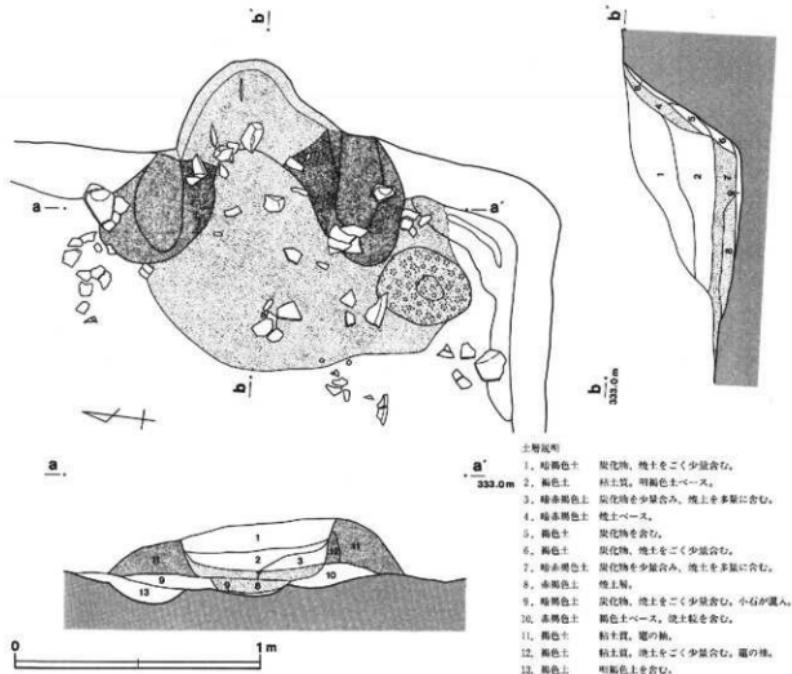
7号住居址（第25・26図、第7表、写真図版6・20）

位置 I b区、L-13区に位置する。道路を挟んで北側8mに4号住居址があり、南東側5mに3号溝、北西側6.5mに1号溝が掘り込まれている。

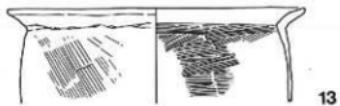
遺存／形状／規模 南側が2号溝に削られ、住居址が調査区外の北側にのびていているため、正確な形状や南北の規模は不明である。わずかに現存している東壁から推定すれば、東西軸長は約4mである。



第22図 6号住居址平・断面図 (1/40)



第23図 6号住居址竪坑・断面図(1/20)・出土遺物(1/4)



13



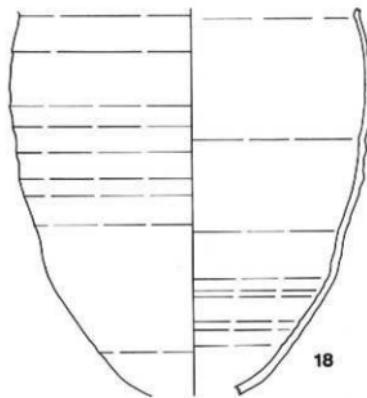
14



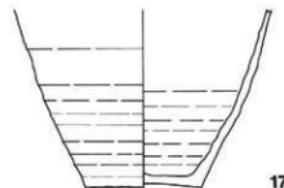
15



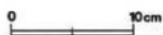
16



18



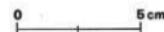
17



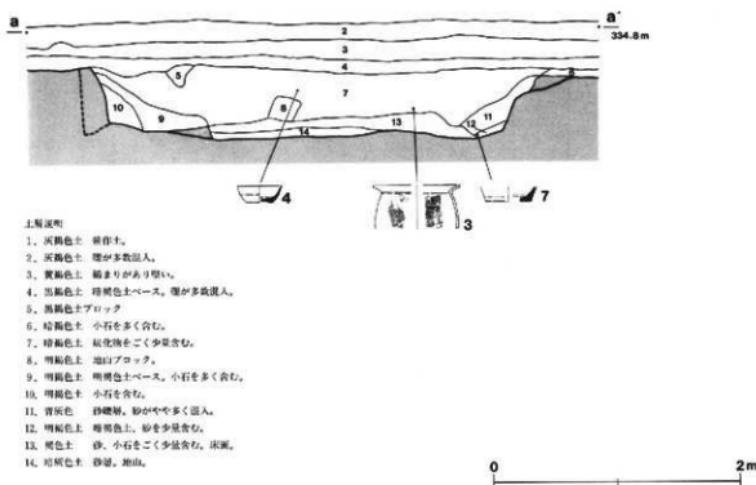
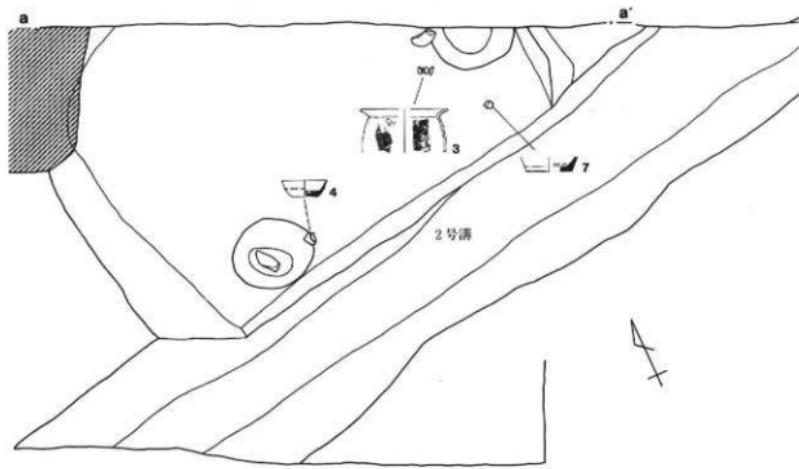
19



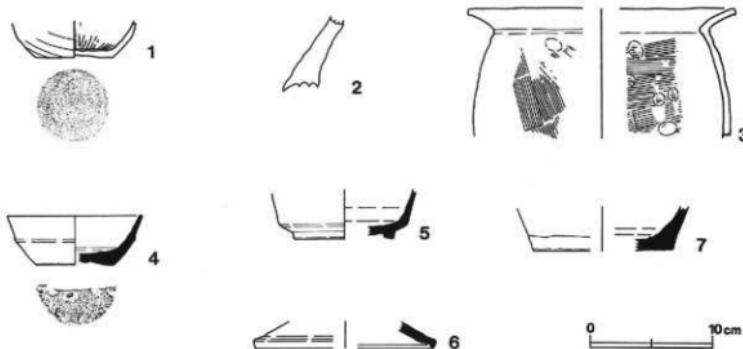
20



第24図 6号住居址出土遺物 (1/2・1/4)



第25図 7号住居址平・断面図 (1/40)



第26図 7号住居址出土遺物 (1/4)

床面 地山に礫や砂が多く混入し、はっきりとした硬化面がなく床面と地山の区別が困難であった。床は凹凸があり、平らな床面は検出できなかった。

柱穴 確認できなかった。

竈／土坑 調査区内では発見されなかった。2号溝によって削平されているか、調査区外に構築されている可能性が高い。

遺物 出土した遺物が多いが、いずれも小片で完存、接合する土器はほとんどない。その中で固化に耐えうる遺物を7点実測した。1～3は土師器で、1は甲斐型壺、2はロクロ甕、3は甲斐型の甕である。4～7は須恵器で4は壺、5は高台壺、6は壺蓋、7は甕である。

出土状況 覆土上層から下層まで多数の遺物が出土した。しかし、床面上から検出された遺物は少ない。出土した遺物はほとんどが小片で摩耗が進んでおり、接合する土器は少なかった。また、7号住居址の覆土はほかの住居址と異なり、全体的に砂礫が多く混入し硬く締まっていた。以上の点から、住居廃絶後、住居址がなんらかの水の影響を受けた可能性が考えられる。

なお、上述したように7号住居址では覆土が小型の鍬を弾くほど硬く、また遺物のほとんどが小片であったため遺物全点の出土位置は記録化していない。

時期 1の甲斐型壺から判断すれば宮ノ前V～VI期、9世紀の第1～2四半期に比定される。しかし、時期決定できる資料はいずれも上中層からの出土であり、完形土器がない。そのため住居の使用時期は確定しがたい。

8号住居址（第27・28・29図、第7・8表、写真図版6・20）

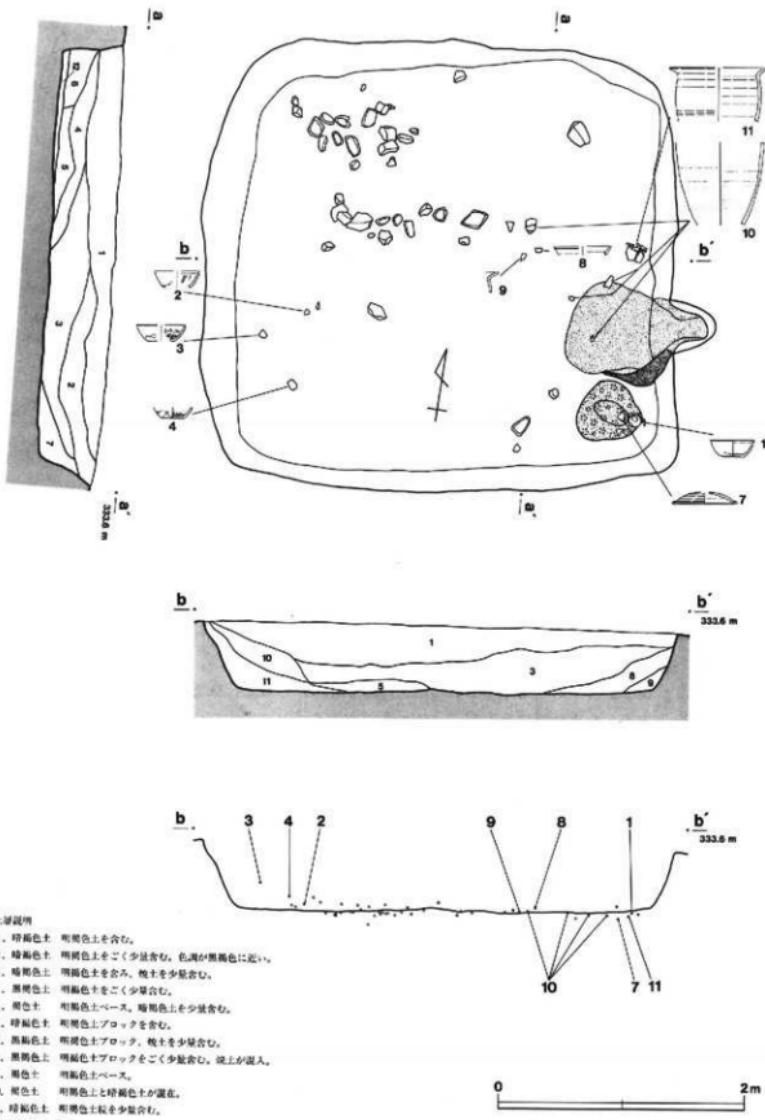
位置 I b区、L、M-26、27区に位置し、北西側4.5mに5、6号溝、東側7mに7号溝が立地する。

遺存 遺存状態は良好で床面から確認面までの深さは50cmである。

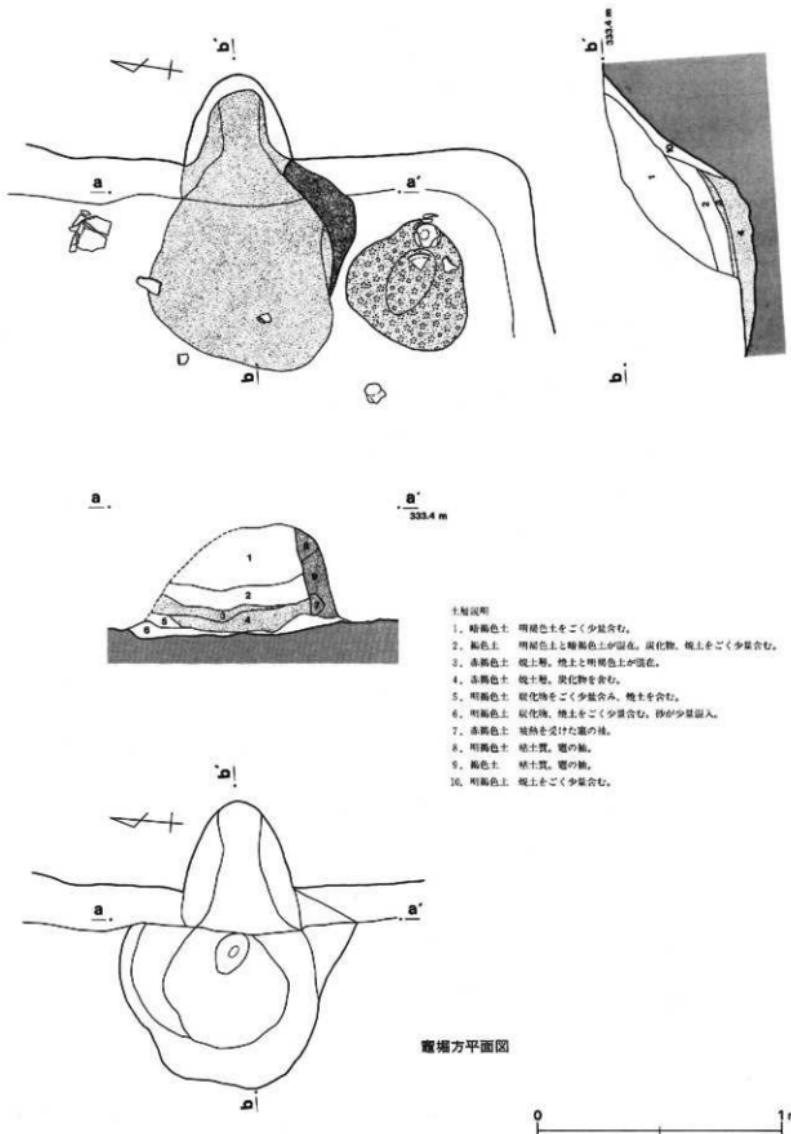
形状 四角形を呈す。

規模 東西3.8m、南北3.7mを測る。

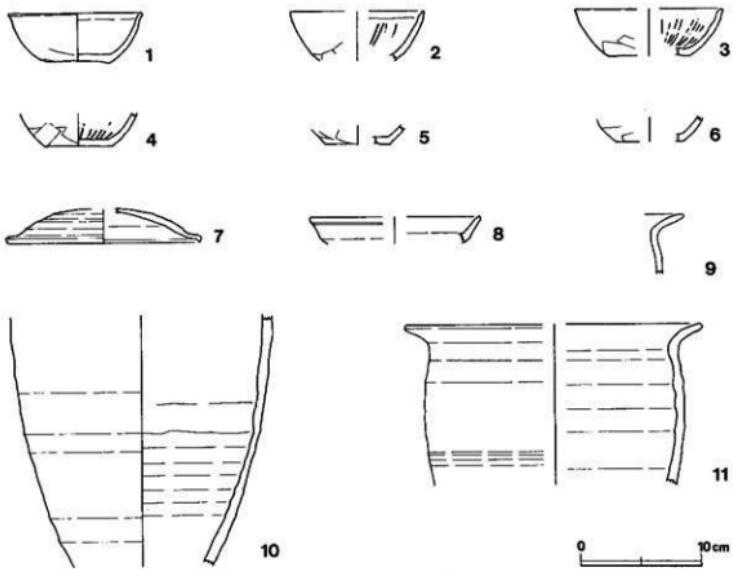
床面 一部に硬化面が見られる。



第27図 8号住居址平・断面図 (1/40)



第28図 8号住居址竪平・断面図 (1/20)



第29図 8号住居址出土遺物 (1/4)

柱穴 確認できなかった。

窓 中心軸からやや南よりの東壁に造られている。明褐色土で造られた南側の袖がわずかに残存していた。確認した範囲では心材として石等を利用していた痕跡は見られなかった。窓内には焼土が10cm堆積し、内壁も熱を受け真っ赤に変色していた。窓の長期間にわたる使用が推測される。

窓の南側に堆積した覆土の微細物分析を行った結果、多数の炭化物片が検出された。しかし、いずれも微細なため樹種を同定できなかった。

土坑 窓の南側に隣接して土坑が掘り込まれている。最大幅52cm、深さ7cmを測り、不整形な円形の土坑である。覆土は暗褐色土と焼土が混在しており、炭化物がやや多く含まれていた。

遺物 8号住居址の特徴は、6号住居址と同様に須恵器がほとんど出土せず、検出した遺物の大部分は土師器である点にある。1~6は甲斐型环で、外面底部にヘラケズリが施されている。いずれの环も摩耗していたが、2・3・4で内面に消えかけた暗文を確認できた。7は土師器の环蓋、8は土師器の皿である。9・10・11は土師器ロクロ甕である。

出土状況 遺物の総量は少ないが、遺物分布に顕著な傾向が見られる。覆土上中層での遺物は少なく、ほとんどの遺物が床面付近で出土した。平面で遺物の分布をみると、住居址の北側からは全く遺物が出土せず、窓周辺と住居址南西から遺物が検出された。窓周辺では、窓の正面からロクロ甕片、窓の南に隣接する土坑周辺からは环や环蓋が出土した。住居址の南西側では、环片のみが出土した。一方、土器片が出土していない住居址北西側には5~15cmの石が集中して

検出された。床面付近の石のみ記録し図化したが、石は覆土上層からも出土している。こうした堆積状況から、北西方向からの石の人の為的投げこみ、あるいは屋根上におかれた石の崩落などの可能性が考えられる。

時期 甲斐型環や皿から判断すれば、宮ノ前VI期、9世紀の第2四半期に比定される。

9号住居址（第30～33図、第8表、写真図版7・8・21・22・23）

位置 I b区、K、L-7、8区に位置し、北西側1.5mに17号溝、南東13mに1号溝がある。

遺存 道路用壁工事によって住居址北東部分が壊されている。それ以外の区域は遺存状態が良好で、床から確認面まで約50cmの深さがある。

形状 四角形を呈す。

規模 東西3.6m、南北3.5mである。

床面 硬化面は、住居址の南東部分、竈のほぼ正面を中心に確認できた。硬化面の広がりから判断して、住居の入り口は南壁の中央付近である可能性がある。また、この部分の壁際には小さな土坑が掘り込まれており、この土坑が梯子などの入り口施設と関係している可能性も考慮する必要があろう。

壁溝 北東の擾乱部分を除く北・東・南壁際に壁溝が掘り込まれている。掘込みは約5cmと浅く、南壁では一部とぎれていた。この壁溝がとぎれる部分は、推定した出入り口部分と一致している。

柱穴 確認できなかった。

竈 中心軸からやや南よりの東壁に造られている。両側に袖石として河原石が埋め込まれ、その上に長さ約44cm、幅約17cmの大振りな石が天井石として乗せられている。天井石が南側の袖石にほとんど接していないことを考えると、原位置から西側へややずり落ちたものと推測される。竈のほぼ中央には、支脚として利用されていたと考えられる楕円形の河原石が埋め込まれていた。

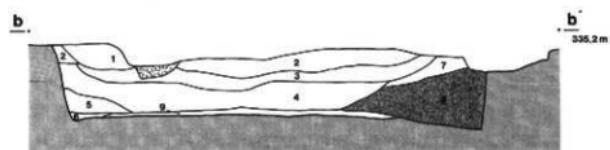
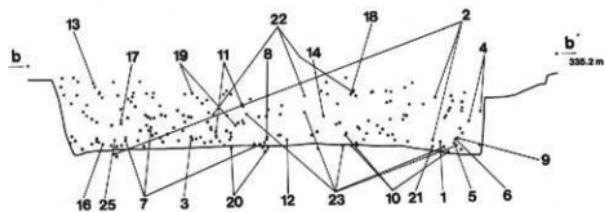
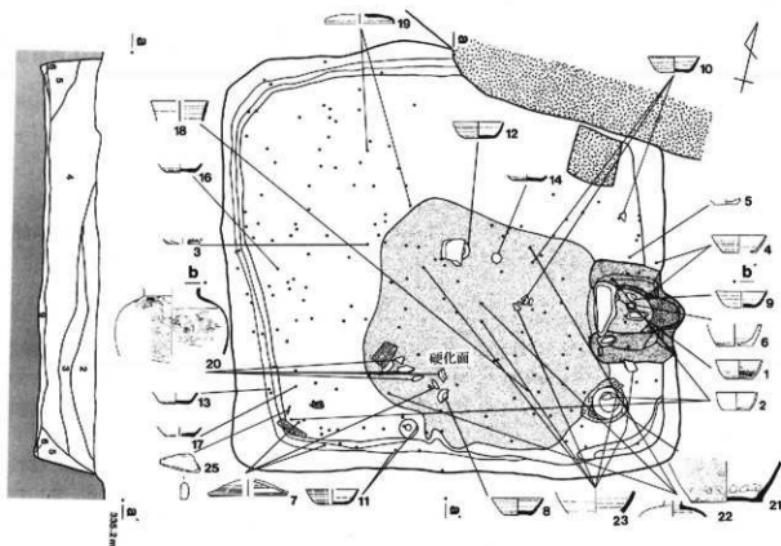
竈内は床、壁とともに赤く変色し、焼土が約6cmと厚く堆積している。竈の長期間にわたる使用が推測される。

また、住居址南東隅には竈のものと思われる焼土が炭化物とともに集中して検出された。

土坑 竈の南側に隣接して土坑が掘り込まれている。最大径20cm、深さ7cmのゆがんだ円形である。覆土は暗褐色土と明褐色土がベースで、炭化物を多量に含んでいた。

遺物 出土した土器片の総量は、ほかの住居址と比較するとかなり多い。出土地点を記録しただけでも214点に及ぶ。とりわけ須恵器の环片が非常に多く、逆に土師器の残片は少ない。

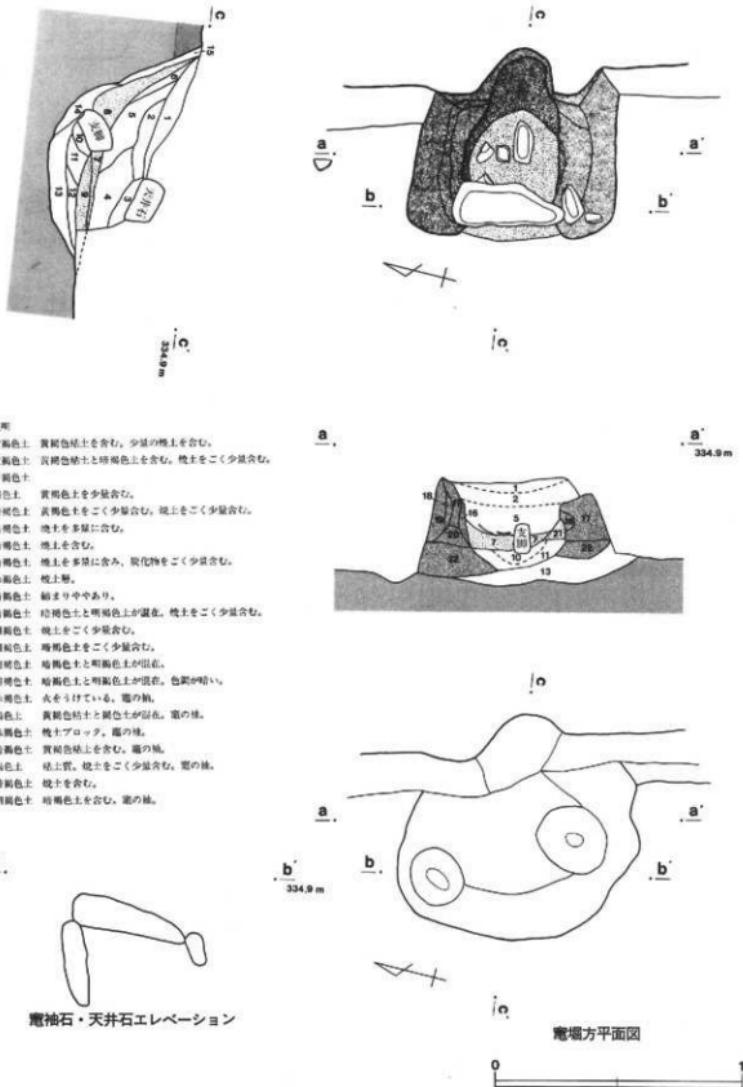
1～4は土師器の环である。1と3は典型的な甲斐型環で、外面底部にヘラケズリが施され、内面には暗文が見られる。2は摩耗が激しく、暗文やヘラケズリを確認できなかった。5・6は土師器のロクロ甕、7は土師器の环蓋である。8～17は須恵器の环で、ほとんどのものに回転糸切り痕が見られた。その中で12はヘラ状の工具で回転糸切り痕が消されている。16は胎土も粗雑で、黄褐色を呈しており、ほかの須恵器の环とは明らかに異なる印象を受ける。18は須恵器の高台环、19は环蓋である。20は須恵器の甕で、外面の肩部から胴部に格子文の叩きが施され、内面には当然具痕が見られる。同じく21は須恵器の平底の甕である。色調は赤褐色で、一見すると土師器に見える。外面の肩部から胴部に格子文の叩きが施され、内面には指頭痕が一列に並び、底部を一周している。竈に隣接して掘られた土坑の上に、底部を上にしてふせら



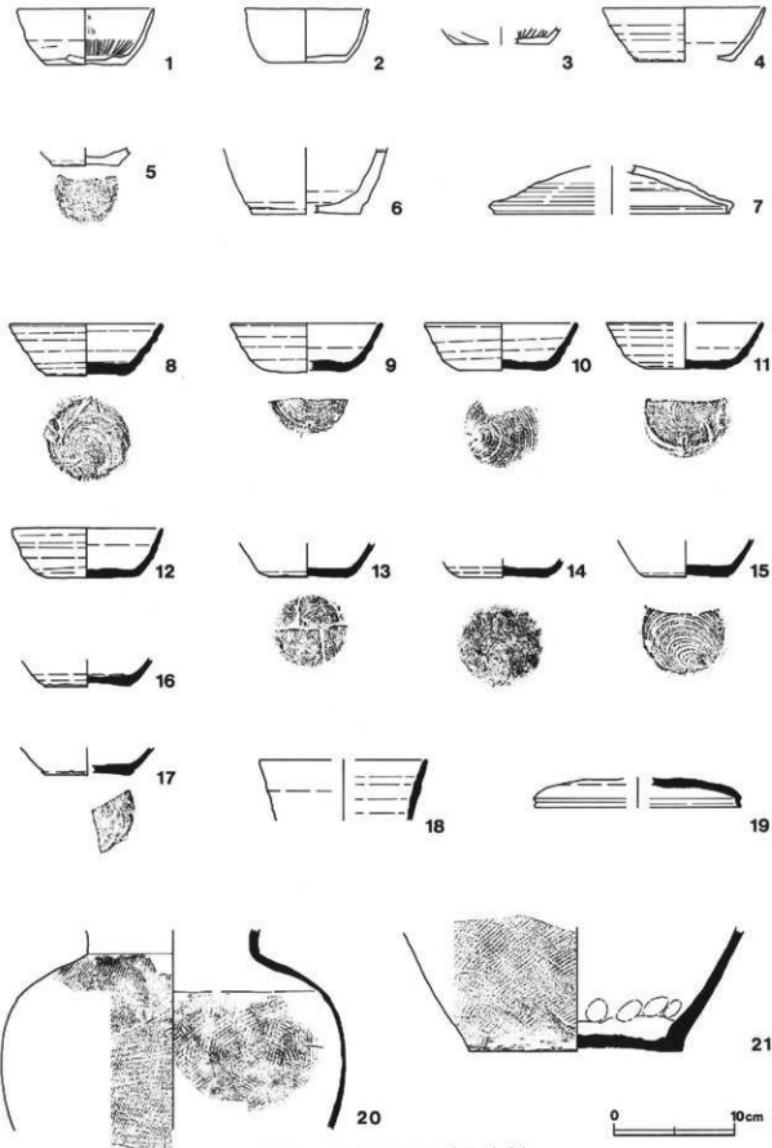
土層説明

1. 緑褐色土 小石を多く含む。
2. 細褐色土 黒褐色土をごく少含み、炭化物を少含む。
3. 細褐色土 黒褐色土を少含み、炭化物、焼土をごく少含む。
4. 細褐色土 黒褐色土を少量含む、炭化物を含む。
5. 細褐色土 炭化物、焼土をごく少含む。
6. 灰褐色土 焼土の埋土。
7. 細褐色土 炭化物をごく少含む。少量の焼土が混入。
8. 褐色土 磨・磨の鉢。
9. 鮎褐色土 炭化物を含む。

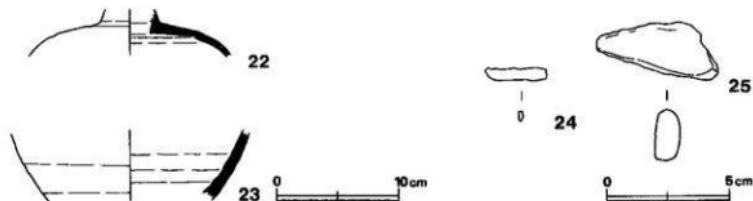
第30図 9号住居址平・断面図 (1/40)



第31図 9号住居址竪平・断面図 (1/20)



第32図 9号住居址出土遺物 (1/4)



第33図 9号住居址出土遺物 (1/2+1/4)

れた状態で出土した。なお、この甕の内側の覆土を微細物分析した結果、マメ類が2点検出された。22と23は須恵器の甕で、おそらく同一個体の可能性が高い。いずれも外面が薄く剥がれ落ちている。24・25は用途不明の鉄製品である。

出土状況 水平レベルで遺物の分布状況をみると、住居址北東側からの遺物の出土が極端に少ない。北東部以外ではある程度均一に土器片が出土しているが、特に推定した入り口部分から須恵器の甕、壺がまとまって検出された。一方、垂直レベルで考えると、覆土上層から下層までいずれの層にも土器片が多数分布している。なかでも住居址西側では、上層から下層にかけてほぼ均一に遺物が分布しているのに対し、竈周辺の遺物は上層に少なく、床面あるいは竈付近から検出された。

土器片のほか、鉄製品が2点、住居址西側から出土した。住居のほぼ中央では焼けた石の下から須恵器の壺(12)が出土した。

住居址の南側では中層から下層にかけて炭化物が多量に検出された。また、南西隅からは床面近くで明褐色土の地山ブロックが検出された。長さは約20cmで、その周囲から多くの炭化物が出土している。

時期 竈内から出土した1や、竈の天井石の上と須恵器甕(21)の上から出土した2などの甲斐型壺をもとに時期を推定すれば、宮ノ前V期、9世紀の第1四半期に比定される。

(2) 柱穴列

本遺跡では、一定の間隔をおいて土坑が矩形に並ぶ遺構、いわゆる^{はりつけ}柱^{はしら}建物址は検出されなかった。しかし、複数の土坑が同じレベルで同一直線上に並ぶ遺構が認められ、その遺構を本報告書では仮に柱穴列とした。

1号柱穴列 (第34図、第1表、写真図版10)

位置 I a区、I、J-34、35区に位置し、西側1.5mには8号溝が検出された。

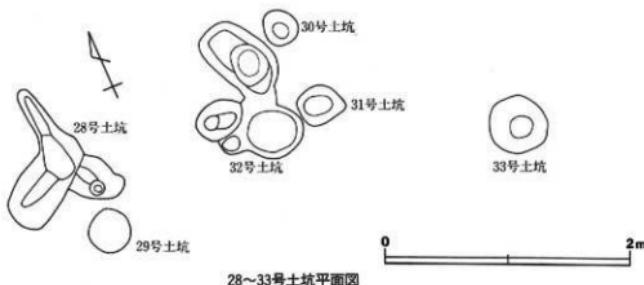
特徴 4基の円形土坑、42-45号土坑が直線上に並んで検出された。土坑は直径30-40cm、深さ15-30cmを測る。45号土坑は調査区の南端に位置しており、土坑が調査区外まで続く可能性がある。

柱間距離 42号と43号土坑の距離は約0.9m、43号と44号土坑の距離は1.1m、44号と45号土坑の距離は1.45mを測る。

遺物 出土していない。

第1表 I区土坑計測表（第4 - 34図）

番号	グリッド	形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
1	K・L-5	円形	31	—	32.5	334.84	甲斐型甕片出土
2	K・L-5	楕円形	87	—	40	334.72	
3	K・L-6	楕円形	98	—	34.5	334.81	
4	L-9・10	円形	45	37	15.5	334.62	
5	L-11	円形	28	27	12.8	334.58	
6	L-15・16	円形	35	35	13.5	334.27	
7	L-16	円形	46	37	10	334.30	
8	L-27	楕円形	112	100	13.1	333.20	
9	L-28	楕円形	61	40	24	333.10	
10	L-29	楕円形	78	53	7	333.25	
11	L-29	円形	28	23	10	333.16	
12	L-29	円形	20	15	6	333.17	
13	L-30	円形	20	14	4.5	333.15	
14	L-33	不整形	91	55	11	332.09	
15	L-33	楕円形	30	23	6.5	332.13	
16	M-33	円形	29	24	22	331.92	
17	M-33	円形	31	26	14	331.99	
18	L-33・34	円形	20	16	—	—	
19	L-34	円形	30	28	13.5	332.04	
20	M-33・34	不整形	43	40	11	332.05	
21	M-34	不整形	55	46	15.5	332.02	
22	M-34	円形	30	23	11.5	332.06	
23	M-34	不整形	26	21	7.5	332.10	
24	M-34	不整形	33	26	7.5	332.08	
25	M-33	円形	30	30	32	331.80	
26	M-33・34	円形	29	29	23	331.89	
27	L-35	円形	47	37	10	332.97	
28	J-15	不整形	118	85	47.5	333.53	炭化物出土、土坑内面に硬化面検出。被熱箇所あり。
29	J-15	円形	37	33	15.5	333.89	
30	J-15	円形	33	27	12	333.94	
31	J-15	円形	42	33	14.5	333.90	
32	J-15	不整形	121	44	26.5	333.81	炭化物出土、土坑内面に硬化面検出。被熱箇所あり。
33	J-15・16	円形	50	49	17	333.90	
34	J-17	不整形	93	67	20	333.75	
35	J-29	円形	40	39	25	332.76	
36	J-29	円形	41	40	22.5	332.77	
37	J-29	円形	23	22	7	332.93	
38	J-30	円形	27	—	33	332.68	
39	J-30	不整形	40	—	21.5	332.76	
40	I・J-32	円形	43	36	11.5	332.89	
41	J-32	円形	37	30	7	332.93	
42	I-35	円形	32	32	15	332.47	1号柱穴列
43	J-35	円形	33	31	22	332.41	1号柱穴列
44	J-35	円形	32	27	34	332.39	1号柱穴列
45	J-34	円形	35	34	14.6	332.67	1号柱穴列
46	J-35	円形	26	25	17	332.50	



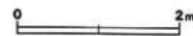
土壤説明

1. 暗褐色土 明褐色土を含む。
2. 暗褐色土 明褐色土をごく少量含む。
3. 暗褐色土 明褐色土をやや多く含む。
4. 明褐色土 地山。

1号柱穴列平・断面図



14~26号土坑平面図



第34図 I区28~33号土坑 (1/40)・1号柱穴列・14~26号土坑平・断面図 (1/60)

(3) 土坑（第34図、第1表）

I 区の調査では多数の土坑が発見された。とくに I 区では L, M-33, 34区に土坑が集中している。出土遺物が少ないため、時期、用途は不明である。しかし、全体的に遺構の配置をみると、L, M-33, 34区に見られるように住居址や溝と重複せずに土坑のみ集中する傾向がある。個々の土坑については計測表を参照されたい。

(4) 溝状遺構

I 区の調査では溝状遺構が合計21条発見された。

1号溝（第35図）

位置 I b 区、K, L-10, 11区に位置する。

形状／規模 幅30cm前後、深さ 7~12cmを数える。南東から北西方向へのび、東西グリッド線と平行して検出された。西端は削平を受け消滅し、東は調査区外へのびている。底面標高は東端で 334.59m、西端で 334.63m を測る。東端の床のレベルに比べ西端の方が約 4cm 高く、わずかに東へ傾斜している。

遺物 土器器口クロ妻の底部片や内面に暗文のある甲斐型环の小片が出土した。

2号溝（第35・40図、写真図版9）

位置 I a 区、I, J-15, 16区・I b 区、K, L-13, 14区に位置する。

形状／規模 村道を挟んで I a 区と I b 区で同一方向へのびる溝が確認された。溝の形および東から西へのびる方向から考えて、2条を同じものと見なし同一番号とした。溝幅は I a 区で約 1m、I b 区で約 1.5m を数える。底面標高は I a 区の北端が 333.70m、南端が 333.58m を数え、I b 区の南・北端とも約 334m を測る。I a 区が I b 区より標高が低く、2号溝が南西から北東へゆるやかに傾斜していることがわかる。深さは I a 区で 40cm 前後、I b 区では 50cm 前後を測る。2号溝の方向は、I-21区から A-32区にのびる調査区トレンチとはほぼ同じ方向である。この調査区には水路が流れており、調査以前は畑を区画していた。つまり 2号溝は水路の地割り方向とほぼ同じ方角を示している。なお、I b 区の溝は 7号住居址を切って造られている。

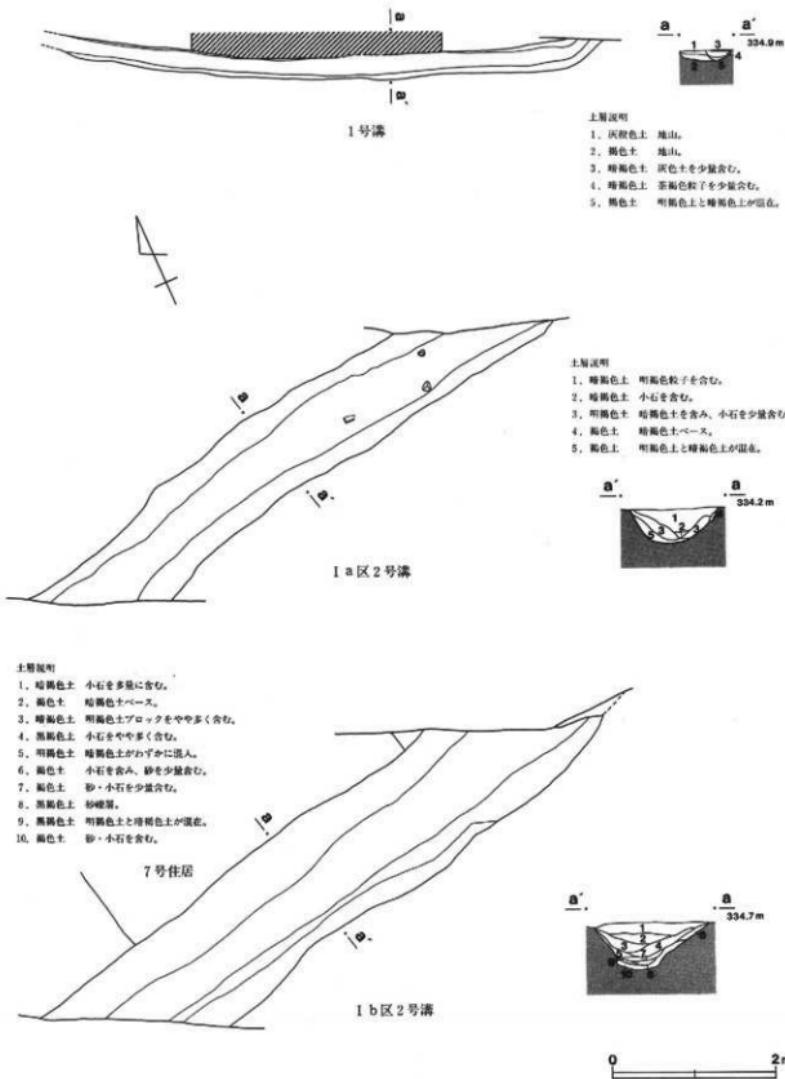
遺物 I a 区ではほとんど遺物が出土しなかったのに対し、I b 区では羽釜の取手片や环片、須恵器の环片など多数の土器片が出土した。しかし、ほとんどの遺物が小片で接合せず摩耗していることを考えた場合、これらの遺物は 2号溝に伴うものではなく、水の影響を受けた 7号住居址からの流れ込みと考えられる。

3号溝（第36図、写真図版9）

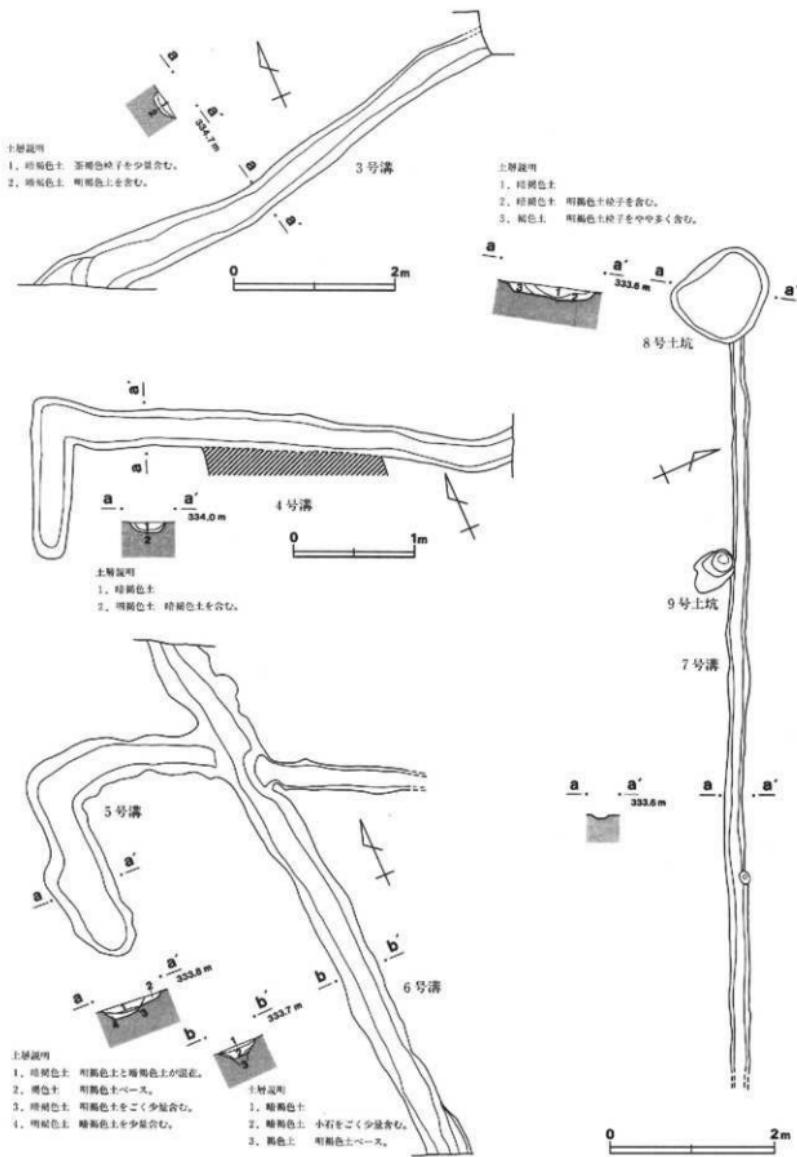
位置 I b 区、K, L-15区に位置する。

形状／規模 幅30~60cm、深さ 12~20cm 前後を数える。2号溝とは並行し、東から西へのびている。床面は凹凸が激しい。底面標高は北端で 334.24m、南端で 334.26m を測る。周囲の地形を考えると北東方向へ傾斜していると推測される。

遺物 土器器口クロ妻の小片が数点出土した。



第35図 I区1・2号溝平・断面図(1/60)



第36図 I区3～7号溝平・断面図(1/40・1/60)

4号溝（第36図、写真図版9）

位置 I b区、L-21区に位置する。

形状／規模 幅30cm前後、深さ4~14cmを数える。東西グリッド線と平行し、西側で南へ向けて90度方角を変えている。南端は調査区外壁手前で途切れている。

遺物 土師器坏の小片が出土した。

5号溝（第36図、写真図版9）

位置 I b区、L-23、24区に位置する。

形状／規模 幅30~80cm、深さ5~10cmを数える。床は多少の凹凸はあるが、比較的平坦であった。南東から北西方向へのび、さらに西側で方角を90度南へ変える。西、南端は調査区途中で途切れ、溝中央部で6号溝と直交している。底面標高は南端、東端とも333.48mを測る。

遺物 出土していない。

6号溝（第36図、写真図版9）

位置 I b区、K、L、M-24区に位置する。

形状／規模 幅40~65cm、深さは16cm前後を数える。方向はほぼ南北にのびている。床は全体的に平坦で、底面標高は北端で333.55m、南端で333.40mを測る。

遺物 出土していない。

7号溝（第36図、写真図版10）

位置 I b区、L-27、28、29区に位置する。

形状／規模 幅25cm前後、深さ約4cmの浅く細長い溝で、東西グリッド線と平行して検出された。西端は8号土坑と接している。8号土坑との覆土の差は見られないことから同時期の所産と考えられる。8号土坑と接する西端の底面標高は333.30m、東端は333.28mを数え、差がほとんど見られない。

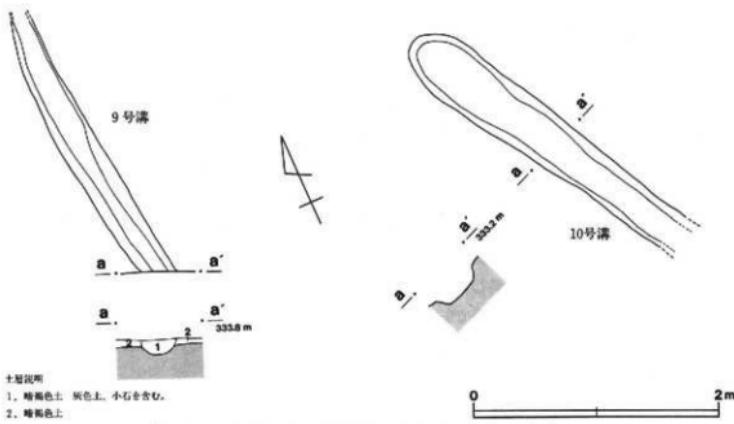
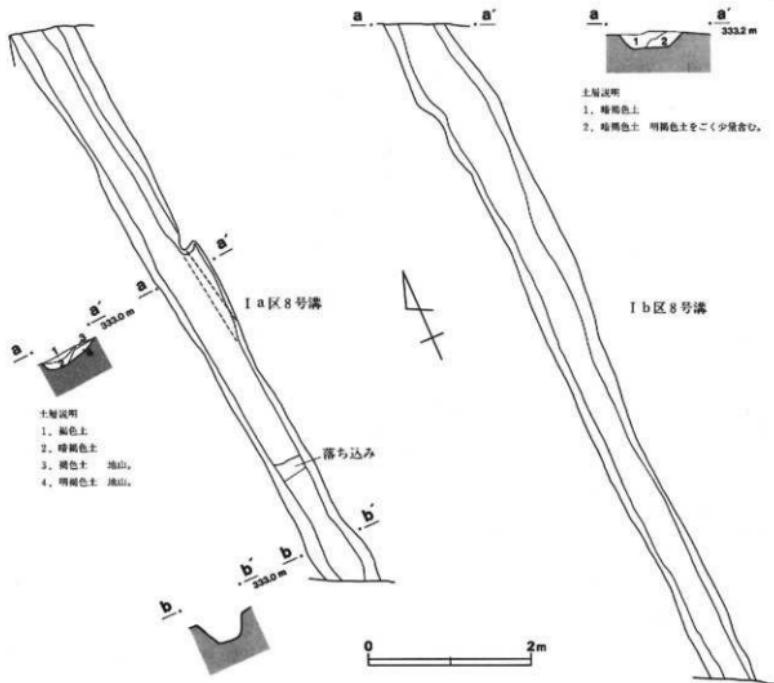
遺物 出土していない。

8号溝（第37図、写真図版10）

位置 I a区、I、J-33、34区・I b区、L、M-35、36区に位置する。

形状／規模 村道を挟んでI a区とI b区で同一方向へのびる溝が検出された。幅50~75cm、深さ12cm、南側で27cmを数える。溝の形や南北へのびる方向から考えて2条を同じ溝と見なし同一番号とした。I a区の溝は、南端から北へ1.7mの地点で南側へ約14cm急に落ち込んでいる。そのため底面標高は北端で332.68m、南端で332.52mとなり南端が低くなる。しかし、落ち込んだ部分から南側は北へ傾斜し、同様に落ち込み部分の北側もわずかに北へ傾斜している。つまりI a区の溝は北へ傾斜していると言える。一方、I b区の溝は幅50~85cm、深さ約9~20cmを数える。底面標高は北端で332.88m、南端で332.99mを数え、I a区と同じように北へ傾斜している。また、I a区北端よりI b区南端の底面標高が低い。このため溝全体が南から北へ緩やかに傾斜していることがわかる。

遺物 摩耗した土師器の坏および壺の小片が出土した。



第37図 I区 8・9・10号溝平・断面図 (1/40・1/60)

9号溝（第37図）

位置 I a 区、J - 23区に位置する。

形状／規模 幅約35cm、深さ3～9cmを数える浅く幅の狭い溝である。確認した範囲では南北方向へのびている。後世の削平が深いため、北側で溝が消滅している。位置、方角を考えるとI b 区の6号溝と同一の溝である可能性がある。

遺物 出土しなかった。

10号溝（第37図）

位置 I a 区、I, J - 32区に位置する。

形状／規模 幅40～50cm、深さ約10cmを数える。溝というよりむしろ不整形な土坑と言える。

遺物 出土しなかった。

11号溝（第38図、写真図版10）

位置 I a 区、I, J - 17区に位置する。

形状／規模 幅40～170cm、深さ約5cmを数える。12号溝とほぼ並行して検出された。おおむね溝は南北の方向にのびており、北側は幅が広がって浅くなる。北東部分を2号溝に切られている。

遺物 摩耗した土器片が多数出土した。いずれも小片で、接合する資料も少ない。内面に暗文のある甲斐型坏片や須恵器の叩きが施された壺片等が出土した。

12号溝（第38図、写真図版10）

位置 I a 区、I, J - 17, 18区に位置する。

形状／規模 幅1m前後、深さ3～7.5cmを数える。北側を2号溝に切られている。11号溝と同様に幅が広いわりに掘り込みが浅く、形状がはっきりしない。

遺物 土師器、須恵器の小片がわずかに出土した。

13号溝（第38図）

位置 I b 区、L - 6 区に位置する。

形状／規模 溝の一部のみ確認しただけなので、正確な幅は不明である。深さは現存部で約3cmと非常に浅い。土坑である可能性も考えられる。溝の東側を16号溝によって切られている。

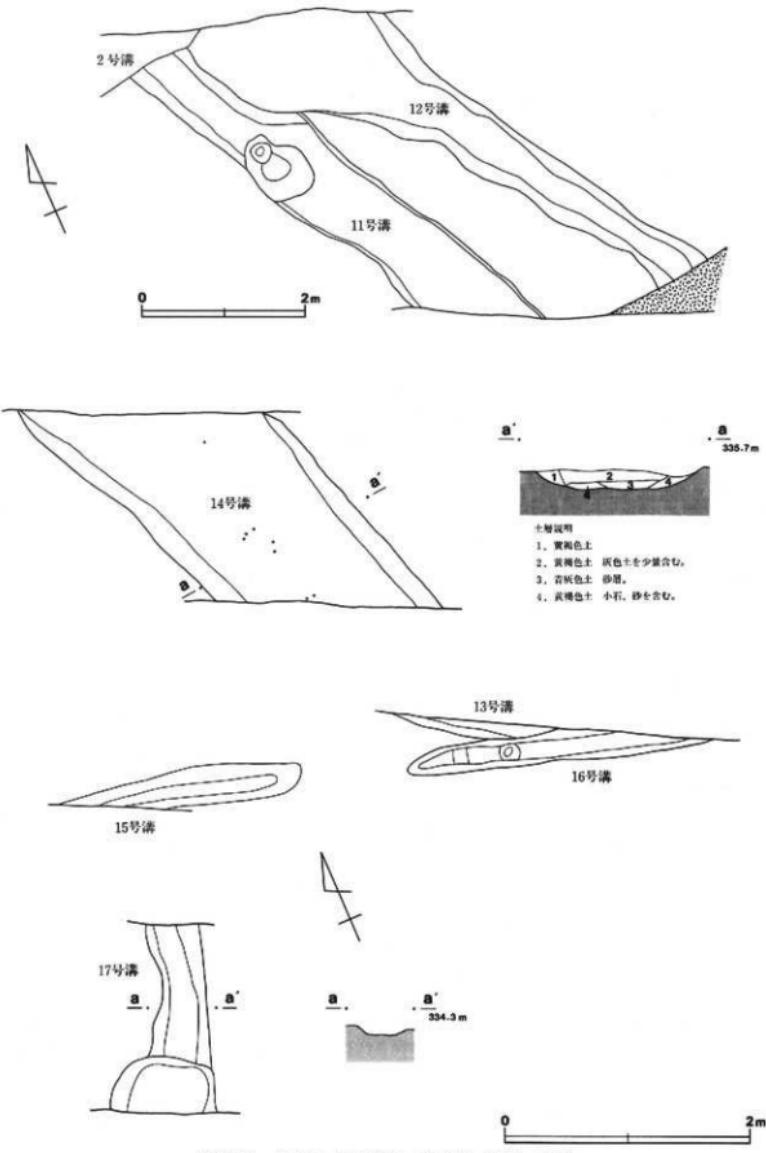
遺物 出土していない。

14号溝（第38・40図、写真図版11）

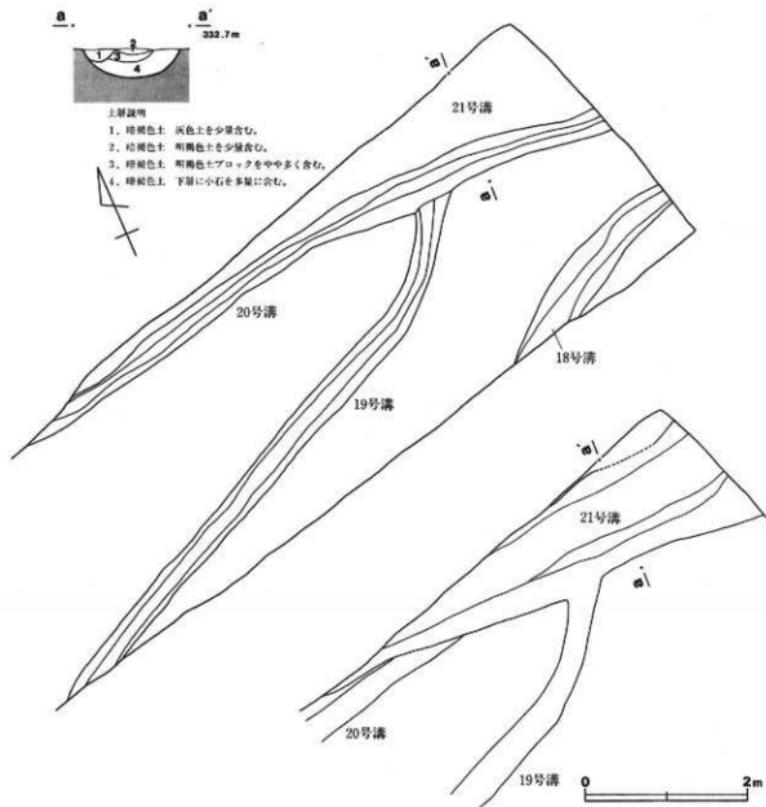
位置 I b 区、K, L - 2, 3 区に位置する。

形状／規模 幅約1.9m、深さ約17cmを数える。確認した範囲では、南北方向にのびている。溝床の上には砂層が堆積し、床面は酸化して橙色から赤褐色を呈していた。こうした検出状況からおそらく水路として利用されていたと推測される。底面標高の北端は335.26m、南端は335.27mを数え、ほぼ平坦な床面が検出された。

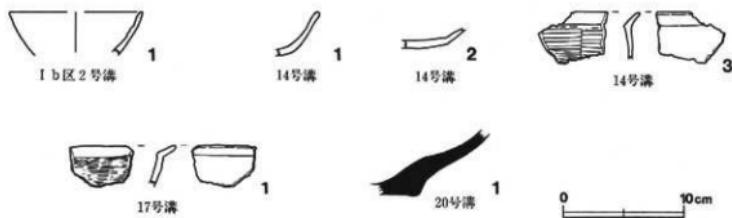
遺物 土師器坏、皿、壺片等が出土した。



第38図 I区11~17号溝平・断面図 (1/40+1/60)



第39図 I区18~21号溝平・断面図 (1/60)



第40図 I区溝状造構出土遺物 (1/4)

15号溝（第38図）

位置 I b 区、L-3 区に位置し、14号溝の東側に隣接している。

形状／規模 幅約15cm、深さ約4cmを数える。非常に浅い溝で、調査区の中央で途切れている。底面標高は南端で335.41mを測る。

遺物 出土していない。

16号溝（第38図）

位置 I b 区、L-6 区に位置する。

形状／規模 幅20cm前後、深さ約7cmを数える。全体的に浅く南西側は途切れている。

遺物 土師器のロクロ甕片、須恵器の甕片が出土した。

17号溝（第38・40図）

位置 I b 区、L-7 区に位置する。

形状／規模 幅約40cm前後、深さ約5～9cmを数える。溝の南側を土坑によって切られている。北東から南西方向にのび、東西グリッド線と直交して検出された。現在の畠の地割りとはほぼ一致する。底面標高は北端で334.99m、土坑内の南端で同じく334.99mを測る。

遺物 甲斐型の甕片や須恵器の坏蓋片が出土した。

18号溝（第39図、写真図版11）

位置 I a 区、A-31, 32区、19、20、21号溝の南に隣接する。

形状／規模 幅35～55cm、深さ10～17cmを数える。西から東へ走り、20号溝とほぼ並行して検出された。東西端とも調査区外にのびている。底面標高は東端で332.30m、西端で332.24mを測る。

遺物 出土していない。

19号溝（第39図、写真図版11）

位置 I a 区、A、B-30, 31区に位置する。

形状／規模 幅30～40cm、深さ5～8cmを数える浅く細長い溝で、西から東へのび、20号溝に繋がっている。20号溝との覆土の差がないことから、同時期の所産と考えられる。底面標高は東端で332.31m、西端で332.47mを測り、西から東へ傾斜している。

遺物 出土していない。

20号溝（第39・40図、写真図版11）

位置 I a 区、A、B-30, 31, 32区に位置する。

形状／規模 幅25～30cm、深さ6～20cmを数える。西から東へのびており、19号溝と接続する。土層断面を見ると21号溝が埋まった後、20号溝が作られている。底面標高は東端で332.26m、西端で332.47mを測り、19号溝と同じく西から東へ傾斜している。

遺物 須恵器の甕底部片が出土した。

21号溝（第39図、写真図版11）

位置 I a 区、A-31, 32区に位置する。

形状／規模 調査区の北東に一部分発見された。20号溝によって南側が切られており正確な幅は不明である。現存幅は約1m、深さ約30cmを数える。床面には3~4cmの小石が多數みられた。床面を掘り下げるも石が出土することから、地山の石と考えられる。底面標高は東端で331.99m、西端で332.14mを測る。地形から判断して東へ傾斜しているものと推測される。

遺物 出土していない。

第2節 II区の調査

(1) 柱穴列

1号柱穴列（第41・42図、第3表、写真図版12）

位置 II b 区、F-13区に位置する。

特徴 67・68・72号土坑の3基の円形土坑が直線上に並んで検出された。土坑は直径45~50cm、深さ8~18cmを測る。土坑の底面標高は67号と72号土坑では17cmの差がある。

柱間距離 67号と68号土坑の距離は約1.15m、68号と72号土坑の距離は1.4mを測る。

遺物 出土していない。

2号柱穴列（第41・42図、第3表）

位置 II b 区、F-15、16区に位置する。

特徴 84・85・86号土坑の3基の円形土坑が直線上に並んで検出された。土坑は直径60~100cm、深さ15~28cmを測る。調査区外の土坑の配列によっては、掘立柱建物址になる可能性も考えられる。

柱間距離 84号と85号土坑の距離は1.35m、85号と86号土坑の距離は1.5mを数える。

遺物 出土していない。

3号柱穴列（第41図、第3表、写真図版14）

位置 II b 区、F-24区に位置する。

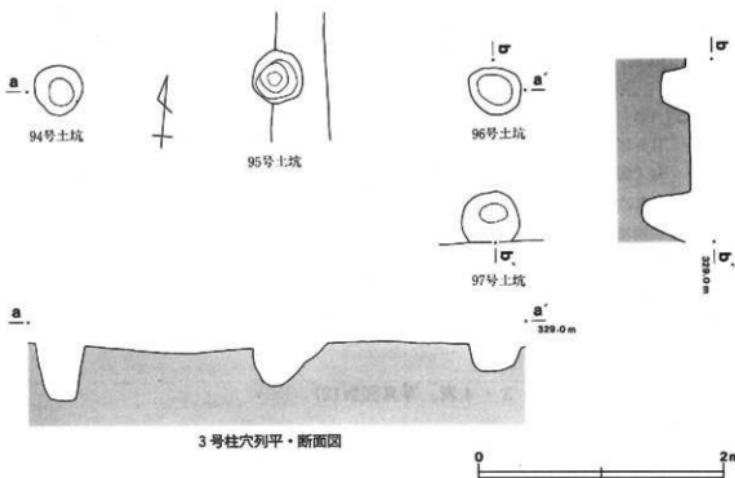
特徴 94・95・96号土坑の3基の円形土坑が直線上に並び、その線上と直角の位置に97号土坑が検出された。土坑は直径40cm前後、深さ22~45cmを測る。調査区外の土坑の配列によって、掘立柱建物址になる可能性がある。

柱間距離 94号と95号および95号と96号土坑の距離は約1.4mを測る。96号と97号土坑の距離は0.6mを数える。

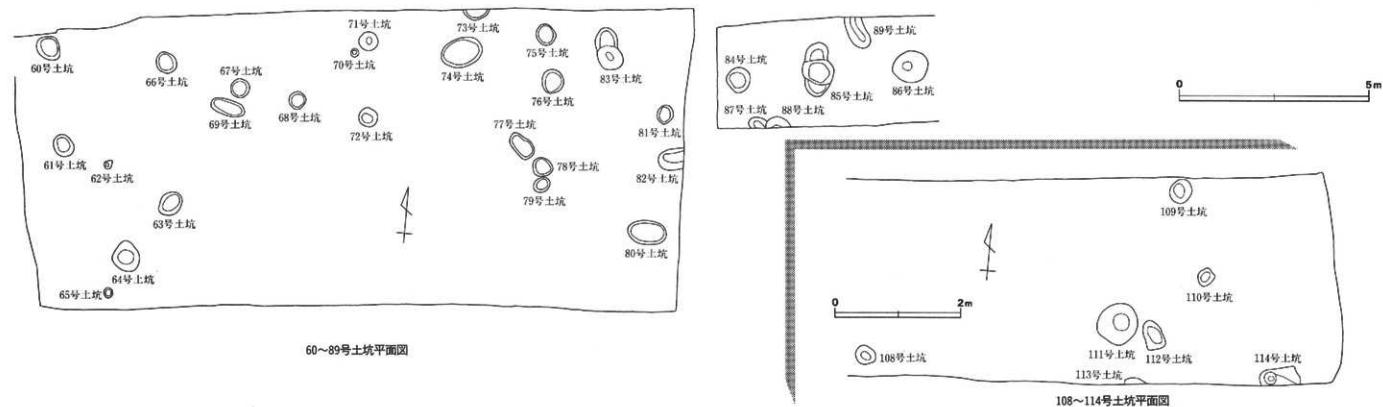
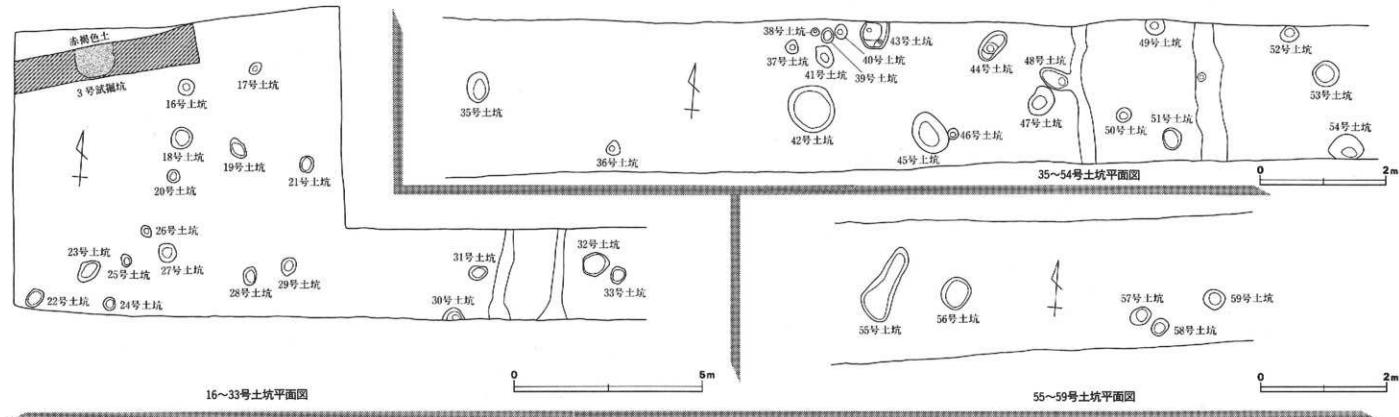
遺物 出土していない。

(2) 土坑（第42図、第2・3・4表、写真図版12）

II区の調査では多数の土坑が発見された。とくにII a 区のC, D-14, 15区からII b 区のF, G-11~15区にわたる区域とII a 区のD-25~31区とに土坑が集中している。I区と同様に、溝や烟状造構などほかの遺構と重複せずに土坑のみ集中する傾向がある。出土遺物が少なく、土坑の時期、用途は不明である。



第41図 II区 1・2・3号柱穴列平・断面図 (1/40)



第42图 II区土坑群平面图 (1/60·1/100)

第2表 II区土坑計測表(第5・41・42図)

番号	グリッド	形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
1	B-6	円形	35	30	8	330.52	
2	B-6・7	楕円形	55	32	9	330.50	
3	B-6	円形	22	20	7	330.53	
4	B-6	楕円形	38	25	7.5	330.53	
5	B-6・7	楕円形	50	33	10.5	330.48	
6	C-6	楕円形	42	25	5	330.56	
7	C-6	円形	30	25	5.5	330.55	
8	C-6・7	不整形	35	32	6	330.52	
9	C-6・7	楕円形	—	25	7	330.56	
10	C-7	楕円形	35	25	5.5	330.61	
11	C-7	楕円形	40	27	10	330.51	
12	D-6	楕円形	—	17	7.5	330.56	
13	C-10	円形	26	26	11.5	329.96	
14	D-10	円形	38	35	13	329.92	
15	D-11	円形	40	36	7	329.91	
16	C-15	円形	45	43	11.5	329.65	
17	C-15	楕円形	38	25	7.5	329.64	
18	C-15	円形	58	58	10.5	329.66	
19	C・D-15	楕円形	58	34	7.5	329.67	
20	D-15	円形	35	33	6	329.69	
21	D-15	円形	45	37	4	329.66	
22	D-14	楕円形	53	40	7.5	329.61	
23	D-14	楕円形	70	48	11.5	329.61	
24	D-14	円形	37	33	4	329.66	
25	D-14	楕円形	33	25	14.5	329.57	
26	D-14	楕円形	35	25	6	329.68	
27	D-14・15	円形	50	48	20	329.51	
28	D-15	楕円形	51	33	6	329.60	
29	D-15	楕円形	52	40	10	329.55	
30	D-16	円形	55	—	20	329.36	
31	D-16	楕円形	52	36	8.5	329.48	
32	D-17	円形	72	60	12.5	329.41	
33	D-17	円形	45	40	7	329.44	
34	D-21	円形	29	—	5	329.17	
35	D-25	円形	49	36	14	328.73	
36	D-26	円形	25	23	7	328.77	
37	D-26	円形	23	21	6.5	328.72	
38	D-26	円形	15	14	4.5	328.73	
39	D-26	円形	25	21	6	328.71	
40	D-26	円形	24	22	7	328.77	
41	D-26	楕円形	36	27	9.5	328.68	
42	D-26	円形	75	74	11	328.68	
43	D-26	円形	45	—	11	328.65	
44	D-27	楕円形	56	30	15	328.73	
45	D-26・27	楕円形	68	50	14.5	328.60	
46	D-27	円形	18	17	6.5	328.66	
47	D-27	楕円形	50	37	10	328.62	
48	D-27	楕円形	53	32	12	328.59	
49	D-27	円形	32	—	21.5	328.43	
50	D-27	円形	25	23	7	328.58	

第3表 II区土坑計測表 (第5・41・42図)

番号	グリッド	形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
51	D-27	円形	35	30	11.5	328.53	
52	D-28	円形	30	25	13	328.47	
53	D-28	円形	43	42	13	328.46	
54	D-28	楕円形	56	—	19	328.39	
55	D-30	不整形	120	50	11	328.36	
56	D-30	円形	50	49	6	328.40	
57	D-30	円形	36	27	9	328.38	
58	D-30・31	円形	30	28	5.5	328.40	
59	D-31	円形	36	33	29.5	328.15	
60	F-12	円形	73	62	14	329.72	
61	F・G-12	円形	60	50	13	329.76	
62	G-12	楕円形	28	22	—	—	
63	G-12	楕円形	71	55	17	329.66	
64	G-12	楕円形	83	74	20	329.69	
65	G-12	円形	28	25	—	—	
66	F-12	円形	58	52	13	329.66	
67	F-13	円形	50	49	—	—	1号柱穴列
68	F-13	円形	46	46	17	329.51	1号柱穴列
69	F-12・13	楕円形	90	43	9	329.65	
70	F-13	円形	25	23	—	—	
71	F-13	円形	53	52	—	—	
72	F-13	円形	52	52	18	329.46	1号柱穴列
73	F-14	楕円形	80	—	6.5	329.52	
74	F-14	楕円形	113	75	16	329.44	
75	F-14	円形	58	51	9.5	329.47	
76	F-14	円形	64	56	12	329.44	
77	F・G-14	楕円形	80	48	10	329.47	
78	G-14	円形	51	50	9.5	329.45	
79	G-14	楕円形	48	38	8	329.48	
80	G-15	楕円形	105	65	17	329.37	
81	F-15	円形	52	44	11.5	329.38	
82	G-15	楕円形	—	55	17	329.35	
83	F-15	不整形	115	68	21	329.32	
84	F-15	円形	65	63	17.5	329.34	2号柱穴列
85	F-16	不整形	143	87	25.5	329.25	2号柱穴列
86	F-16	円形	100	85	27.5	329.24	2号柱穴列
87	F-15	楕円形	—	45	11.5	329.40	
88	F-15・16	円形	—	68	25.5	329.27	
89	F-16	楕円形	—	48	14	329.41	
90	F-17	楕円形	70	—	17.5	329.28	
91	F-20	円形	32	31	12.5	329.05	
92	F-20	不整形	50	—	22	328.92	
93	F-23	円形	62	59	15	328.81	
94	F-24	円形	41	40	47	328.36	3号柱穴列
95	F-24	円形	44	43	36.5	328.42	3号柱穴列
96	F-24	円形	43	40	22	328.59	3号柱穴列
97	F-24	円形	—	47	38.5	328.43	3号柱穴列
98	F-25	円形	37	35	5	328.69	
99	F-25	円形	—	33	7.5	328.64	
100	F-27	楕円形	70	44	7.5	328.53	

第4表 II区土坑計測表（第5・41・42図）

番号	グリッド	形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
101	F-27	楕円形	105	56	9.5	328.50	
102	F-27・28	円形	55	45	13	328.49	
103	F-29	円形	40	37	30	328.08	
104	E-31	楕円形	33	25	5	328.22	
105	E-31	円形	34	31	11.5	328.15	
106	E-32	楕円形	46	34	11.5	328.14	
107	F-34	円形	23	18	15.5	327.77	
108	F-36	円形	33	27	30	327.45	
109	E-37	円形	—	35	15	327.48	
110	F-37	円形	30	26	10.5	327.49	
111	F-36	円形	68	66	13.5	327.51	
112	F-36・37	楕円形	50	30	14	327.47	
113	F-36	円形	—	30	8.5	327.57	
114	F-37	不整形	65	—	21.5	327.40	

る。個々の土坑については計測表を参照されたい。

(3) 溝状造構

II区の調査では溝状造構が合計30条発見された。なお、II b区F-23・24・25区にかけて、浅く幅の狭い溝、11・12・13・14・15号溝がほぼ並行して検出された。煙跡の可能性を考え、覆土の植物珪酸体分析を行ったが、イネ属が12・13号溝からわずかに検出されただけで、植物栽培を示す積極的な証拠は得られなかった。植物珪酸体分析についての詳細は第4章の分析結果をみていただきたい。

1号溝（第43図、写真図版12）

位置 II a区、A、B、C-1区、II区の西端に位置する。

形状／規模 幅20~51cm、深さ10cm前後を数える浅く細長い溝である。方向はほぼ南北にのび、現在の烟の地割りと一致する。底面標高は北端で331.18m、南端で331.25mを測り、北へわずかに傾斜している。

遺物 出土していない。

2号溝（第43図、写真図版12）

位置 II a区、B、C、D-6、7区に位置する。

形状／規模 幅36~54cm、深さ20cm前後を数える浅く細長い溝である。1号溝と同じように方向はほぼ南北にのび、現在の烟の地割りと一致する。底面標高は北端で330.44m、南端で330.41mを測る。

遺物 出土していない。

3号溝（第43図、写真図版13）

位置 II a区、C、D-12区に位置する。

形状／規模 幅37~56cm、深さは北端で2cm、南端で16cmを数える。北側は削平を受け掘り込みが浅くなっている。方向はほぼ南北にのび、現在の烟の地割りと一致する。底面標高は北端で329.80m、南端で329.86mを測り、床面はほぼ平坦である。

遺物 出土していない。

4号溝（第43図、写真図版13）

位置 II a 区、C、D-11区に位置する。

形状／規模 幅28~50cm、深さは北端で2cm、南端で11cmを数える。方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致する。3号溝と並行して検出された。底面標高は北端で329.97m、南端で329.88mを測る。

遺物 出土していない。

5号溝（第43図、写真図版13）

位置 II a 区、D-22、23区・II b 区、F-22、23区に位置する。

形状／規模 村道を挟んでII a 区とII b 区で南北方向へのびる溝が確認された。溝の形や方向から考えて2条を同じものと見なし同一番号とした。II a 区の溝は幅50cm前後、深さ12cmを数え、一方II b 区の溝は幅34~55cm、深さ25cmである。底面標高は、II a 区の北端で329.04m、II b 区の南端で328.71mを測る。全体的に北から南へ傾斜している。

遺物 出土していない。

6号溝（第43図、写真図版13）

位置 II a 区、D-21区に位置する。

形状／規模 幅34~42cm、深さ7cm前後を数える。北東から南西へのびる浅く幅の狭い溝である。底面標高は北端で329.19m、南端で329.16mを測る。傾斜はほとんどない。

遺物 出土していない。

7号溝（第43図、写真図版13）

位置 II a 区、D-17区・II b 区、F-17区に位置する。

形状／規模 村道を挟んでII a 区とII b 区で南北へのびる溝が確認された。溝の形や方向から考えて2条を同じものとみなしことに同一番号とした。II a 区の溝は幅65cm前後、深さ約30cmを数える。一方II b 区の溝は幅72~97cm、深さ37~55cmを数え、南端の西側が土坑によって切られている。底面標高は、II a 区の北端で329.19m、II b 区の南端で328.89mを数え、北から南へ傾斜している。

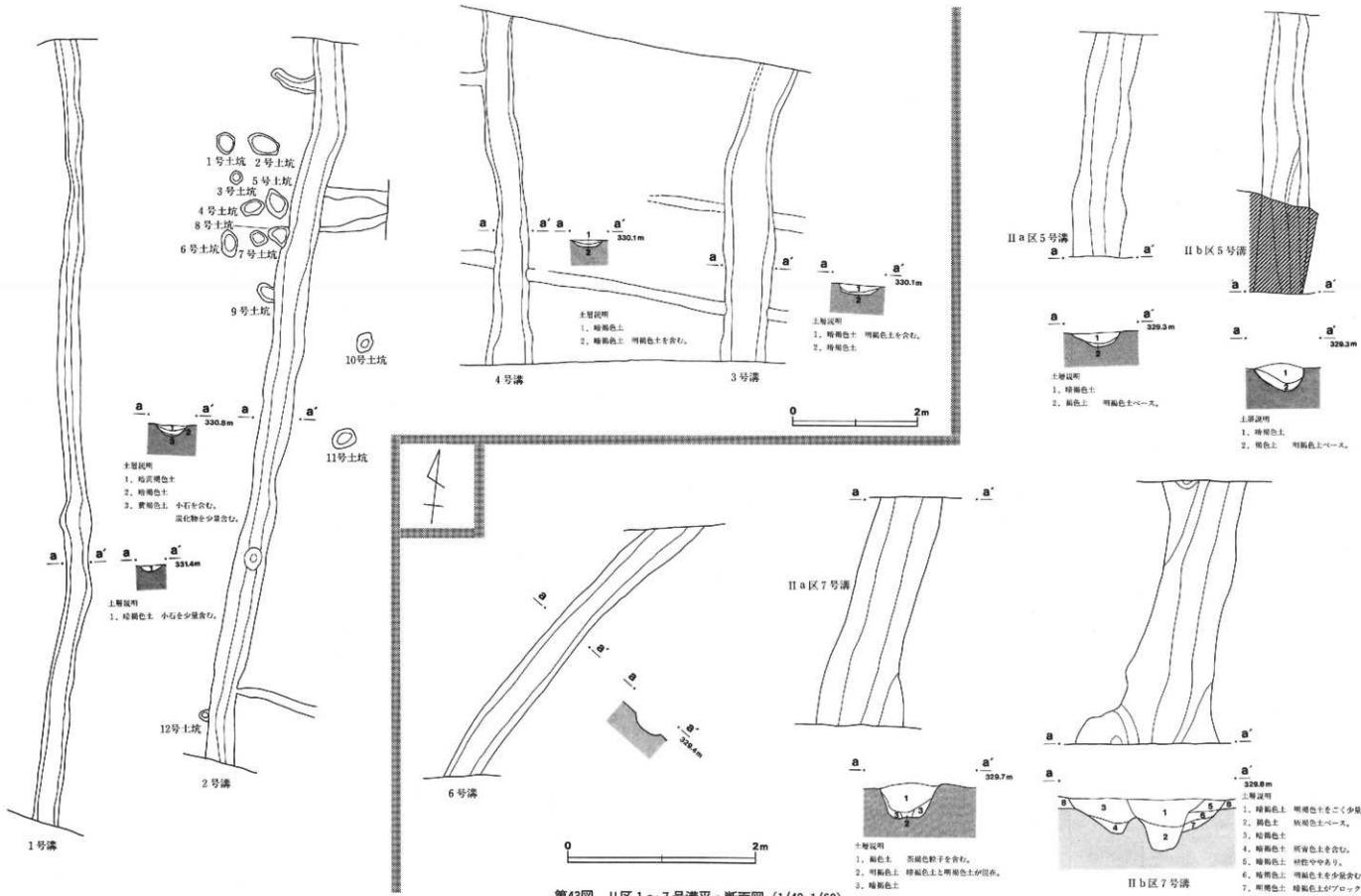
遺物 出土していない。

8号溝（第44図、写真図版13）

位置 II a 区、D-17区に位置する。

形状／規模 幅20~30cm、深さ7cmを数える。浅く幅の狭い溝で、方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致する。約1m西に位置する9号溝と並行して検出された。南端は土坑状に広がりをみせる。底面標高は北端で329.82m、南端の土坑底面で329.32mを測る。

遺物 出土していない。



第43図 II区 1~7号溝平・断面図 (1/40・1/60)

9号溝（第44図、写真図版13）

位置 II a 区、D-16区に位置する。

形状／規模 幅約30cm、深さ13cm前後を数える。浅く幅の狭い溝で、方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致する。南端は土坑状に広がりをみせる。底面標高は北端で329.46m、南端の土坑底面で329.43mを測る。

遺物 出土していない。

10号溝（第44図、写真図版13）

位置 II b 区、F-20区に位置する。

形状／規模 幅50~60cm、深さ約26cmを数え、北西から南東へのびている。底面標高は北端で約328.96m、南端で328.94mを測る。顕著な傾斜は見られない。調査区中央で11号溝と重複する。覆土からみると11号溝より新しく、11号溝を切って造られている。

遺物 出土していない。

11号溝（第44図、写真図版13）

位置 II b 区、F-20区に位置する。

形状／規模 幅21~27cm、深さ8cmを数える浅く細長い溝である。底面標高は北端で329.08m、南端で329.10mを測る。南北にのび、現在の畑の地割りと方向がほぼ一致する。調査区中央で10号溝に切られている。

遺物 出土していない。

12号溝（第44図）

位置 II b 区、F-23区に位置する。

形状／規模 幅約20cm、深さ10cmを数える浅く細長い溝である。方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致し、13・14号溝と並行して検出された。北端は直径約1.4mの土坑に切られている。底面標高は北端、南端とも328.82mを測り、顕著な傾斜は見られない。

遺物 出土していない。

13号溝（第44図、写真図版14）

位置 II b 区、F-23区に位置する。

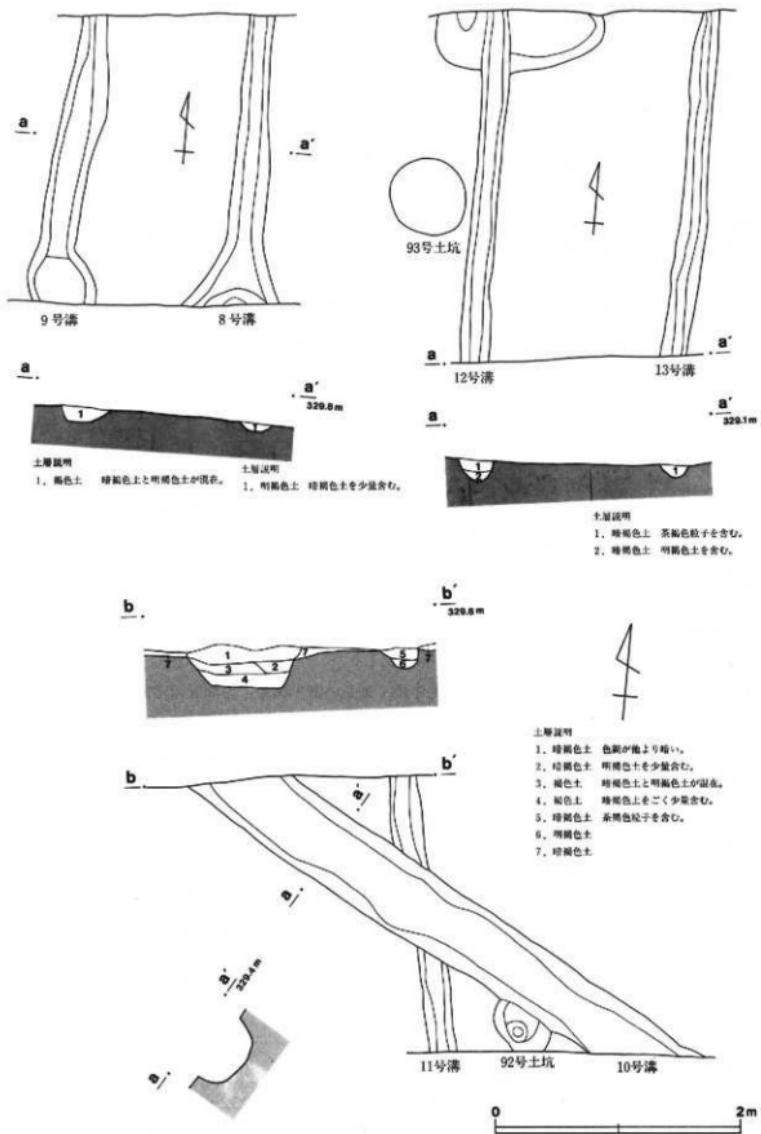
形状／規模 幅約25cm、深さ3~9cmを数える浅く細長い溝である。方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致し、12・14号溝と並行して検出された。底面標高は北端で328.80m、南端で328.78mを測り、顕著な傾斜は見られない。

遺物 出土していない。

14号溝（第45図、写真図版14）

位置 II b 区、F-24区に位置する。

形状／規模 幅約45cm、深さ16cmを数える。並行して検出された12・13号溝よりやや幅が広い。方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致する。北端は幅を1.1mまで広げるが、床面の高さはほとんど変化がない。底面標高は北端で328.63m、南端で328.64mを測り、顕著な傾斜は



第44図 II区 8~13号溝平・断面図 (1/40)

見られない。3号柱穴列のひとつである95号土坑によって切られている。

遺物 出土していない。

15号溝（第45図）

位置 II b 区、F-25区に位置する。

形状／規模 幅27~36cm、深さ7cmを数える浅く細長い溝である。ほぼ南北にのびているが、12・13・14号溝や16・17号溝の走る方向と若干異なり、南北を軸としてやや東よりに走っている。底面標高は北端で328.68mを測る。

遺物 出土していない。

16号溝（第45図、写真図版14）

位置 II b 区、E、F-27区に位置する。

形状／規模 幅23~31cm、深さ8cm前後を数える浅く細長い溝である。方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致し、17号溝と並行して検出された。南端は直径約70cmの土坑状に広がりをみせる。底面標高は北端で328.55m、南端で328.54mを数える。顯著な傾斜は見られない。

遺物 出土していない。

17号溝（第45図、写真図版14）

位置 II b 区、E、F-27区に位置する。

形状／規模 幅16~30cm、深さ6cm前後を数える浅く細長い溝である。方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致し、16号溝と並行して検出された。南側は直径約1m、深さ7cmの浅い土坑に切られている。底面標高は北端で328.52m、南端で328.51mを数える。顯著な傾斜は見られない。

遺物 出土していない。

18号溝（第45図、写真図版14）

位置 II a 区、D-27区に位置する。

形状／規模 幅15~26cm、深さ3cm前後を数える浅く幅の狭い溝である。方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致する。東側1.5mには18号溝に並行して19号溝が検出された。底面標高は北端で328.63m、南端で328.64mを測る。

遺物 出土していない。

19号溝（第45図、写真図版14）

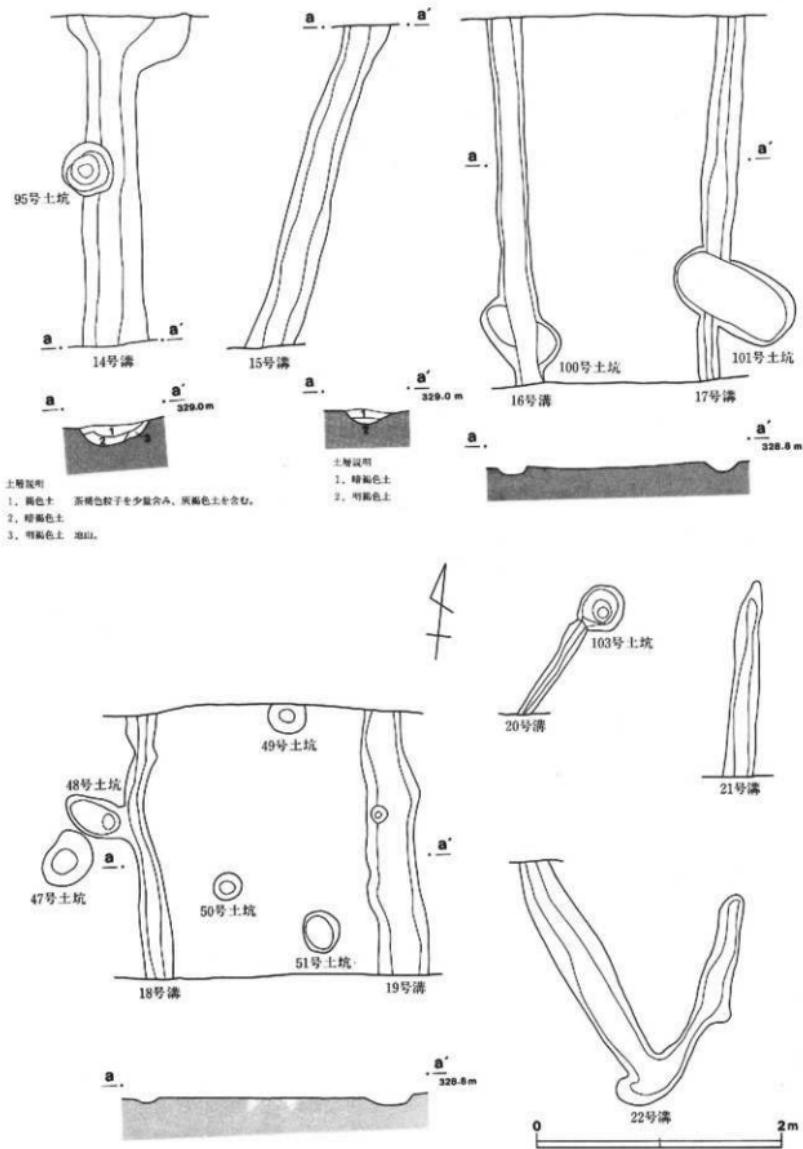
位置 II a 区、D-27、28区に位置する。

形状／規模 幅29~44cm、深さ3cm前後を数える浅く幅の狭い溝である。方向はほぼ南北に延び、現在の畑の地割りと一致する。底面標高は北端で328.59m、南端で328.57mを測る。

遺物 出土していない。

20号溝（第45図）

位置 II b 区、F-29区に位置する。



第45図 II区14~22号溝平・断面図 (1/40)

形状／規模 幅12cm前後、深さ3cmを数える浅い溝である。北東方向にのびており、北端は103号土坑に繋がっている。覆土に差が見られなかったことから、同時期の所産と考えられる。底面標高は南端で328.25mを測る。

遺物 出土していない。

21号溝（第45図）

位置 II b 区、F-34区に位置する。

形状／規模 幅18~25cm、深さ7cmの浅い溝である。南北方向にのびているが、南端は調査区中で途切れている。底面標高は北端で327.87mを測る。

遺物 出土していない。

22号溝（第45図）

位置 II b 区、E、F-35区に位置する。

形状／規模 幅13~41cm、深さ2cm前後の浅い溝である。南東方向へのび、一転して北東方向へ向かうをえ、V字型の不整形な形状を呈している。底面標高は327.82m前後を測る。

遺物 出土していない。

23号溝（第46図、写真図版14）

位置 II b 区、E、F-2区に位置する。

形状／規模 幅28~58cm、深さ12~20cmを数える浅く細長い溝である。方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致する。東へ約2mの地点に位置する23号溝と並行して検出された。底面標高は北端で331.06m、南端で331.16mを測り、北へわずかに傾斜している。

遺物 出土していない。

24号溝（第46図、写真図版14）

位置 II b 区、E、F-3区に位置する。

形状／規模 幅20~31cm、深さ5cmを数える浅く細長い溝である。方向はほぼ南北にのび、現在の畑の地割りと一致する。底面標高は北端で331.14mを測る。南端は削平のためか消失している。

遺物 出土していない。

25号溝（第46図）

位置 II b 区、F-4区に位置する。

形状／規模 幅30cm、深さ2cmを数える狭く浅い溝である。確認した範囲では南北にのび、調査区中で途切れている。底面標高は329.44mを測る。

遺物 出土していない。

26号溝（第46図、写真図版14）

位置 II b 区、F-17区に位置する。

形状／規模 幅27~34cm、深さ4cm前後を数える浅い溝である。確認した範囲では南北にのび、調査区中で途切れている。底面標高は北端で329.44mを測る。

遺物 出土していない。

27号溝（第46図、写真図版14）

位置 II b 区、F-18区に位置する。

形状／規模 幅19~28cm、深さ 6 cmを数える浅い溝である。確認した範囲では南北にのび、調査区中で途切れている。底面標高は北端で329.34mを測る。

遺物 出土していない。

28号溝（第46図、写真図版14）

位置 II b 区、F-18区に位置する。

形状／規模 南北にのびる 2 条の溝が調査区南端で接している。東西の両溝幅は26cm前後、南端での溝幅は66cmを数える。底面標高は南端で329.17mを測る。

遺物 出土していない。

29号溝（第46図、写真図版14）

位置 II b 区、F-18, 19区に位置する。

形状／規模 28号溝と同様に南北にのびる 2 条の溝が調査区南端で接している。東西の両溝幅は30cm前後、南端での溝幅は69cmを数える。底面標高は南端で329.09mを測る。

遺物 出土していない。

30号溝（第46図）

位置 II b 区、F-19区に位置する。

形状／規模 幅23~39cm、深さ 6 cmを数える不整形な形状で、北端は調査区中で途切れている。底面標高は南端で329.16mを測る。

遺物 出土していない。

(4) 烟状遺構

浅く細長い溝が連続して検出された。烟と類似した形状を呈するため、この遺構に対し烟状遺構の名称を用いた。検出された烟状遺構はII a 区とII b 区で次のように形態が異なっている。

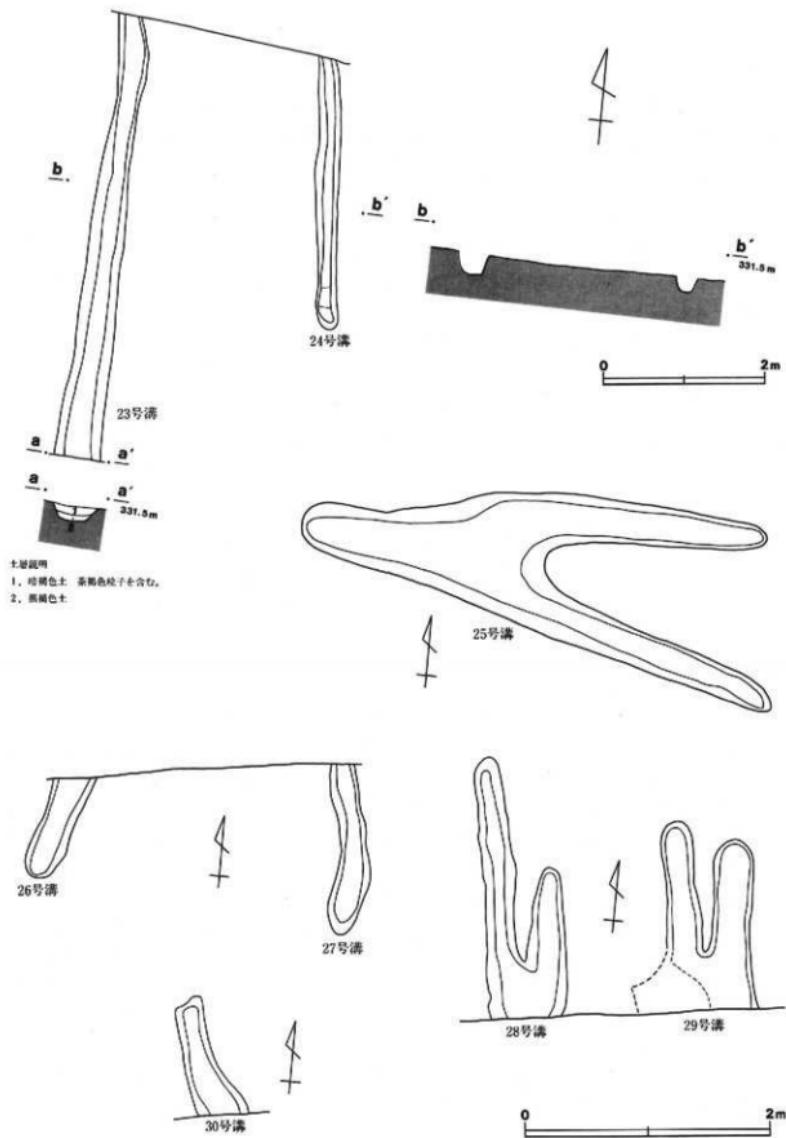
II a 区（第47図、写真図版15）

位置 II a 区、B, C, D-7~12区に位置している。

遺存状況 本来浅い溝であったことに加え上部が削平を受けており、一部消滅している箇所がある。西端は2号溝を境に烟状の溝は確認できなかった。

形状／規模 45×23mの範囲から浅く幅の狭い溝が多数検出された。ほとんどの溝は、ほぼ並行し蛇行しながら東西方向へのびているが、南北に走る溝も西端と東端で検出されている。溝幅は11~40cm、深さ 2 ~11cmを測る。溝間の距離は一定しておらず、調査区中央で約0.4m、南西部では1.2mを数える。西から東へ緩やかに傾斜する扇状地の地形に合わせ、遺構も西へ緩やかに傾斜している。標高は遺構西端で330.62m、東端で329.85mを測る。

遺物 出土していない。



第46図 II区23~30号溝平・断面図 (1/40・1/60)

II b 区（第47図、写真図版15）

位置 II b 区、F、G-9、10区に位置している。

遺存状況 東側が調査区外までのびている一方で、西側は削平をうけ調査区中で消滅している。

形状／規模 18×15mの範囲から浅く幅の狭い溝が多數検出された。東西方向に9条の溝があり、南北方向に4条の溝が交差して、全体で格子状の造構となっている。幅は16~66cm、深さ1~12cmを測る。南北へのびる溝は東西へのびる溝に比べ浅いため、両溝の接点では段差が生じていた。煙の歎と思われる溝と溝の間は約30~60cmを測り、ほぼ一定している。

I 区と同様に、西から東へ緩やかに傾斜する扇状地の地形に合わせ、造構も西へ緩やかに傾斜している。標高は造構西端で330.32m、東端で330.17mを数える。

遺物 出土していない。

なお、烟状造構の6地点（A・C・E・F・H・J）の覆土について植物珪酸体分析を行った結果、イネ科植物の栽培を積極的に支持する資料は得られなかった。植物珪酸体分析についての詳細は第4章の分析結果をみていただきたい。

（5）その他（第42図）

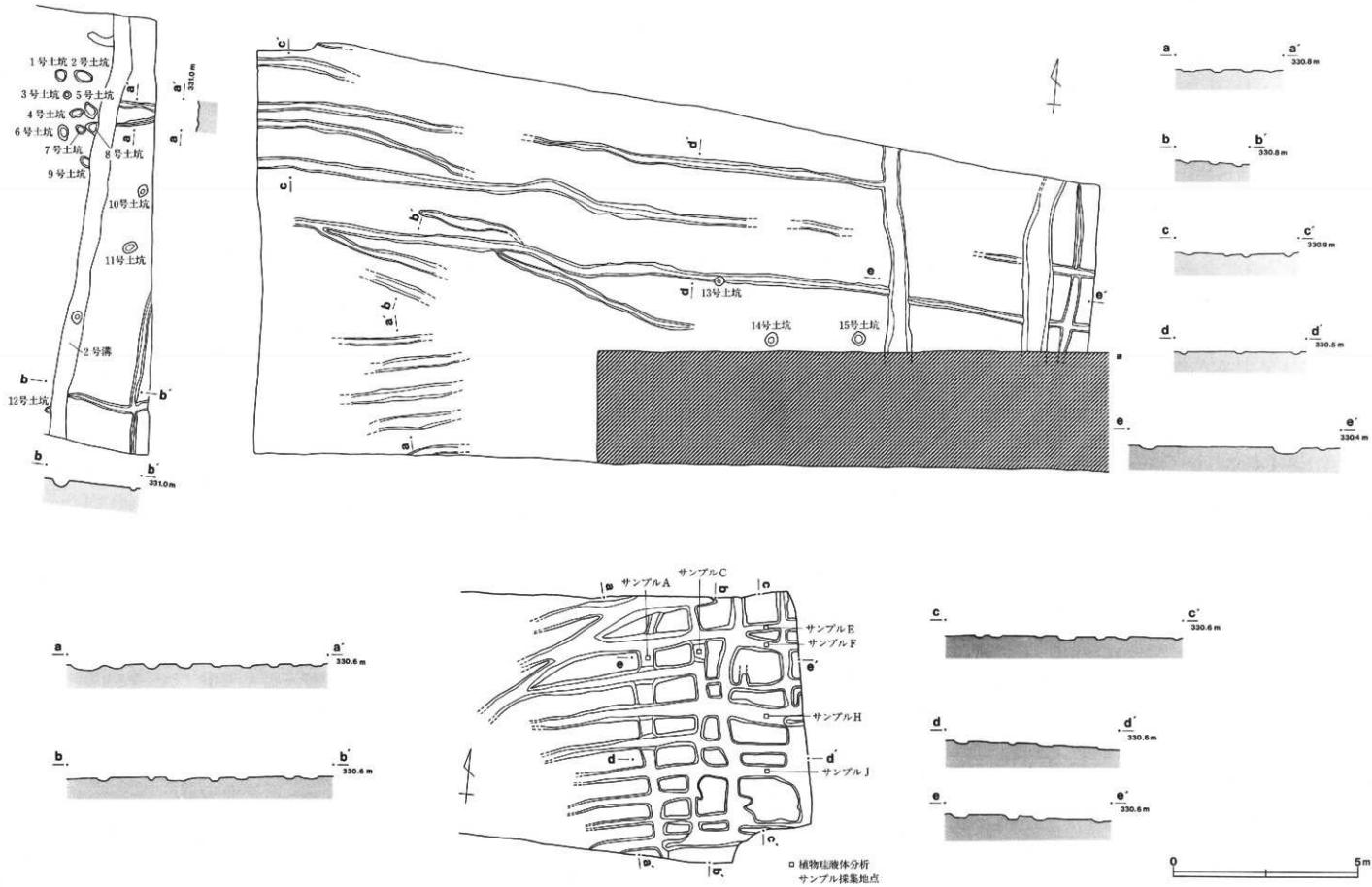
C-14、15地点に幅1m、長さ3.5mの3号試掘トレンチを設定し深堀りしたところ、地表より約1mの地点で赤褐色土の広がりが検出された（第42図）。幅約1mで不整形な凹形を呈している。当初、赤褐色土を焼土と考え、炉址の可能性を考慮して付近を精査したが、遺物が出土せず、はっきりとした掘り込みも確認できなかった。そのため、赤褐色土の土壤分析を河西学氏に依頼した。以下はその分析結果である。

八田村野牛島・大塚遺跡3号試掘坑断面に見られる赤色土壤について

土壤薄片を作製し、偏光顕微鏡下で観察した。粒径は、均質でシルト粒子を多く含み、まれに最大15mmの円磨された泥岩（頁岩）などを含む。多く普通に見られるのは、泥岩（頁岩）、緑色変質火山岩類を含む変質火山岩、石英、長石、单斜輝石などである。緑色変質した火山岩類では緑簾石・緑泥岩を含むものがあり、巨摩山地などに分布する新第三系起源の可能性が推定される。石英は波動消光を示す。岩石粒子としてはほかに、火山ガラス、安山岩、玄武岩？などを含む。火山ガラスは、引き延ばされた形態（D型）を示す無色火山ガラスと塊状の無色火山ガラス（B型）とが認められる。鉱物粒子ではほかに、緑簾岩・サクロ石・ジルコン・酸化角閃石・黒雲母などが検出される。

以上の粒子のうち、泥岩、緑色変質火山岩類を含む変質火山類、石英、長石、单斜輝石などは、御動使川河川堆積物中に普通に含まれる粒子である。この塊状の赤褐色土壤は、御動使川の堆積物と類似性の高い堆積物であることが認められる。花崗岩類に由来する粒子が少ないとから、釜無川河川堆積物との関係はさほど強くないものと推定される。

以上の分析結果から、赤褐色土が御動使川堆積物である可能性が強いことが示唆された。赤褐色土の塊が人為的なものか自然堆積物であるかの判断は難しいが、少なくとも遠方から搬入された土壤ではないと考えられる。



第47図 II区烟状遺構 (1/100)

第IV章 自然科学分析

野牛島・大塚遺跡発掘調査に伴う自然科学分析報告

<目次>

はじめに	81
1. 試 料	81
2. 分析方法	81
(1) 植物珪酸体分析	81
(2) 微細物分析	82
3. 結 果	82
(1) 植物珪酸体分析	82
(2) 微細物分析	82
4. 考 察	84
引用文献	84

<図表・図版一覧>

表 1 植物珪酸体分析結果
表 2 微細物分析結果

図 1 植物珪酸体群集の層位分布

図版 1 植物珪酸体

図版 2 木材・種実遺体

第1節 野牛島・大塚遺跡発掘調査に伴う自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

野牛島・大塚遺跡は御動使川扇状地扇尖部から先端部に位置する。今回の発掘調査では、調査範囲西側に位置するI区において奈良・平安時代の住居跡が検出されており、本遺跡西側に隣接する大塚遺跡から続く集落跡であることが推定されている。また、調査範囲東側のII区では平安時代～中世の可能性がある溝状遺構や畠状遺構が確認されている。このうち畠状遺構については、その形状から畠の可能性が考えられている。

このように本遺跡では当時の人間の生業活動が明らかにされつつある。そこで、今回は、本遺跡II区で検出された溝状遺構および畠状遺構の性格に関する情報、特に栽培植物の有・無に関する情報を得るために植物珪酸体分析を実施する。また、平安時代の住居跡では当時の人間が利用した植物に関する情報を得るためにカマド・土坑覆土の水洗選別により得られた微細な炭化物について種類同定を実施する。

1. 試 料

調査区内の基本層序は、上位より現在の水田耕作土、褐色土、暗褐色土、明褐色土に区分されている。このうち、暗褐色土から奈良・平安時代の遺物が出土しており、遺構覆土となっている。また、最下部の明褐色土は調査区の広い範囲にわたって厚く堆積しており、細粒な碎屑物よりなることと、本遺跡の立地環境からみて、扇状地形にかかわった堆積物の可能性がある。

(1) 畠状遺構・溝状遺構

畠状遺構の試料は、歓間6カ所を設定し、歓間部分に堆積している土壤を採取した6点である(畠状遺構サンプルA・C・E・F・H・J)。歓間部分の堆積物は暗褐色の微粒砂シルトからなり、腐植に比較的富む。粒團が形成されている。粒團の大きさは不均一であり、発達の程度は悪い。堆積後の細かい植物根痕が多い。

溝状遺構の試料は、11号・12号・13号・14号・15号溝覆土である。溝覆土には水成堆積を示す葉理状の構造は認められない。部分的に粒團構造が残る土壤(粗粒砂混じり微粒砂シルト)からなり、溝周囲から流れ込みに起因するものと思われる。

以上の試料について植物珪酸体分析を実施する。

(2) 炭化物

炭化物は10点あるが、同一試料名のものを統合すると、1号住カマド内焼土、3号住カマド内焼土、6号住土坑内覆土、8号住カマド南側覆土、9号住土器内覆土の5箇所になる。

以上の試料について、炭化物の種類同定を行う。

2. 分析方法

(1) 植物珪酸体分析

植物珪酸体分析は、近藤・佐瀬(1986)の方法を参考にした。数々を秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステイト、比重2.4)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴

下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、これらの珪酸体を包含する組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

（2）微細分析

双眼実体顕微鏡下で観察し、種類が特定できそうな微細物を抽出する。この中で比較的大型の炭化物片は、木口（横断面）・柱目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。また、検出された種実遺体も、その形態的特徴から種類を同定する。

3. 結 果

（1）植物珪酸体分析

結果を表1、図1に示す。煙状遺構および溝状遺構の各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（容食痕）が認められる。いずれの試料もタケア科やウシクサ族の産出が顕著であり、ヨシ属やイチゴツナギ亞科がわずかに、あるいは稀に認められる。イネ属は、溝状遺構の試料番号A、12号・13号溝から短細胞珪酸体がわずかに認められるのみである。

（2）微細分析

結果を表2に示す。全試料とも微細な炭化材が多数検出されている。炭化材は微細なため同定できるものは少なかったが、比較的大きめのものを拾って樹種同定を試みた。その結果、コナラ属コナラ亜属クヌギ節が1点同定された。種実は少量検出されたがいずれも炭化しており、保存が悪い。また、3号住からは焼けた骨の破片が検出されたが、微細なため種類の特定は難しい。以下に検出された木材と種実について形態的特徴を示す。

表1 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	煙状遺構					11号溝 覆土	12号溝 覆土	13号溝 覆土	14号溝 覆土	15号溝 覆土
		A	C	E	F	H					
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属		1	—	—	—	—	—	3	1	—	—
タケア科	58	63	119	120	101	81	51	64	109	87	73
ヨシ属	—	3	1	7	2	—	1	—	4	4	3
ウシクサ族ススキ属	4	7	18	17	11	16	1	11	15	10	20
イチゴツナギ亞科	7	10	7	14	7	6	3	6	10	18	20
不明キビ型	34	32	54	54	42	43	7	31	34	42	49
不明ヒゲシバ型	1	1	6	6	4	3	1	6	4	—	2
不明ダンチク型	36	34	63	63	47	54	20	57	40	53	51
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
タケア科	20	55	50	35	47	89	49	34	60	60	50
ヨシ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—
ウシクサ族	14	22	35	26	17	26	3	15	20	30	36
シバ属	—	—	—	1	—	—	—	—	3	1	—
不明	18	35	17	10	14	14	7	11	18	15	18
合計		141	150	268	281	214	203	84	178	217	214
イネ科葉部短細胞珪酸体		52	112	102	72	78	129	59	60	101	108
イネ科葉身機動細胞珪酸体		193	262	370	353	292	332	143	238	318	322
総計											

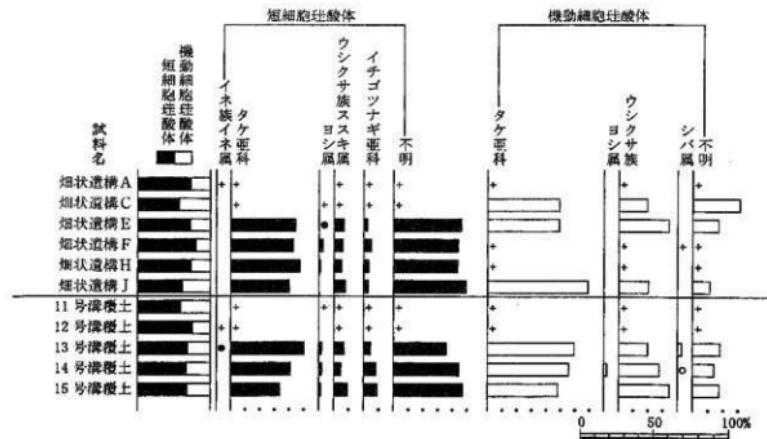


図1 植物珪酸体群集の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

<木材>

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) アナ科
試料は年輪界で割れている。年輪界に向かって径を漸減することや、年輪界に僅かに残る孔隙部道管の径などから環孔材と判断した。小道管は単独で放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、单列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。

<種実>

・イネ (Oryza sativa L.) イネ科イネ属

炭化した胚が検出された。大きさ4mm程度。楕円形であるが、胚の痕跡部分が欠けたように見える。表面には数本の筋がみられる。

・マメ類 (Leguminosae)

炭化した種子が検出された。大きさ5mm程度。偏平な楕円形で、側面に縦長の「へそ」が存在する。

表2 微細物分析結果

試料名	同定結果		
	種実	木材	その他
1号住 カマド内焼土	イネ(1)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(1)	炭化物片(細片多数)
3号住 カマド内焼土	マメ類(2)		骨片(6)
	イネ(1)		炭化物片(細片多数)
6号住 土坑内覆土			炭化物片(細片多数)
8号住 カマド南側覆土			炭化物片(細片多数)
9号住 土器内覆土	マメ類(2)		炭化物片(細片多数)

4. 考 察

(1) 畑状造構および溝状造構の性格について

畑状造構および溝状造構覆土の植物珪酸体組成は類似し、タケア科が卓越し、ウシクサ族（スキ属など）を伴う特徴を示した。このことは畑状造構と溝状造構の堆積物が同様な由来の土であることを示唆するが、その構造は畑状造構畠間埋積物の方が粒団の発達が強く異なっている。このような土壤構造の違いは土地利用状況の違いを反映している可能性がある。粒団は人為的な擾乱作用や自然条件下の霜の作用等で形成されるが、ここでの粒団も同様の成因が考えられる。溝内埋積物に比較して粒団の発達が強かったのは、畑状造構の方が人為的な擾乱の影響を強く受けていることを示している可能性がある。

畑状造構埋積物から検出された栽培植物の種類はイネ属のみであり、それ以外のムギ類などイネ科に属する栽培植物は検出されなかった。検出個体数が少ないとから、畑状造構においてイネ属が栽培されていたことを積極的には支持できない。ただし、後述するように当時の住居跡からはマメ科の種子などが検出されていることから、畑状造構でイネ科以外の栽培種が栽培されていた可能性も否めない。

このように今回の調査では、畑状造構の性格を特定することはできないが、粒団の形成や栽培種のイネ属の存在などから耕作地として利用されていた可能性はある。今後、畑状造構を構成する土壤の微細構造を検討することでより詳細な検討が可能になると思われる。

ところで、多産したタケア科（その中でも特にササ類）は、冷温帯落葉広葉樹林の林床を覆う植物であり、伐採や災害（山火事・台風など）、樹木の枯死などで生じた開けた空間に先駆的に進入してくる場合が多い。またウシクサ族もスキに代表されるように、開けた草地に群落を作る種類が多い。おそらく、平安時代～中世頃には人為的に切り開かれた遺跡周辺にタケア科やスキ属などが侵入し、草地を作っていたものと考えられる。また、その他、イチゴツナギア科やヨシ属なども生育していたと考えられる。

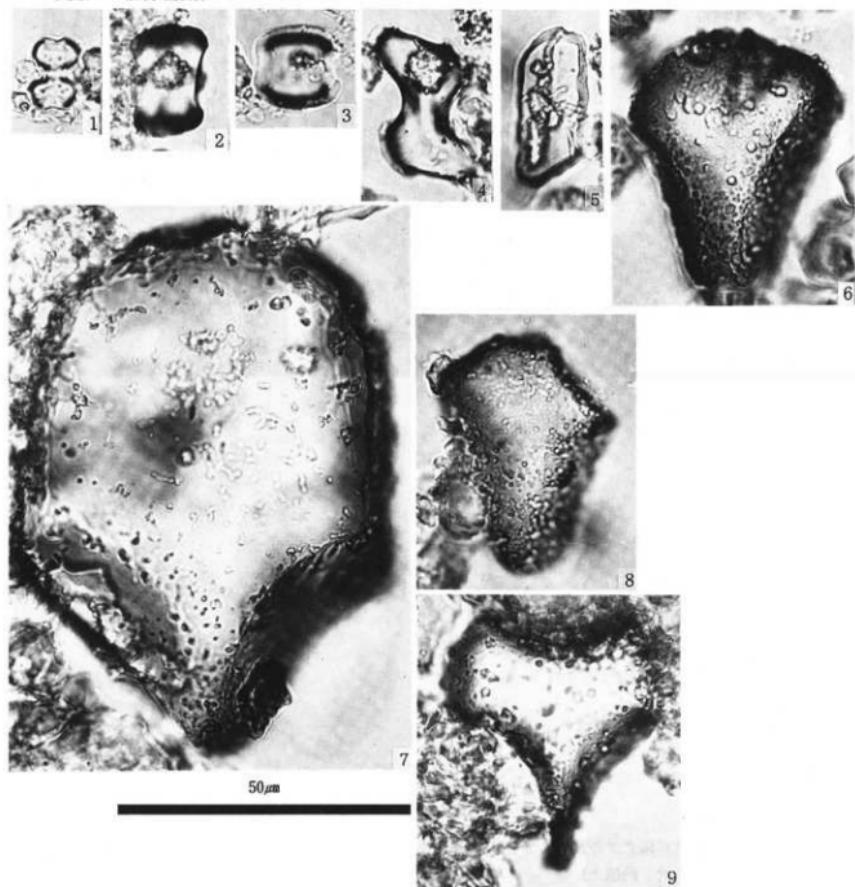
甲府盆地では、これまでに、古代の遺跡で、イネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエ、キビ、マメ類などが検出されている（柳原、1998）が、今回はこのうちイネとマメ類が検出されている。甲府盆地では、イネの検出例は非常に多いが、マメ類の出土例は先の文献を見る限り少ないようである。本遺跡でもこれらが畑作植物として栽培されていた可能性もあるが、いずれも炭化種実のため、種類が限られており、今後の情報蓄積、とくに低地での調査の情報整備が待たれるところである。また、畑状造構からイネ属の植物珪酸体がわずかに検出されたが、稲藁は古来から資材として有用であったことから、農業資材としてもちこまれた可能性も考えられる。

また、カマド内から検出された炭化材は、燃料材として利用された木材の一部が炭化・残存した可能性がある。樹種は、落葉広葉樹のクヌギ節であった。クヌギ節の木材は、比較的堅い材質を有し、薪炭材としては国産材中で最も優良とされる（平井、1979）。いわゆる雜木林の主構成種であり、集落周辺で比較的容易に入手できたことが推定される。これらの材質や入手が容易であることが、燃料材として利用された背景に考えられる。

引用文献

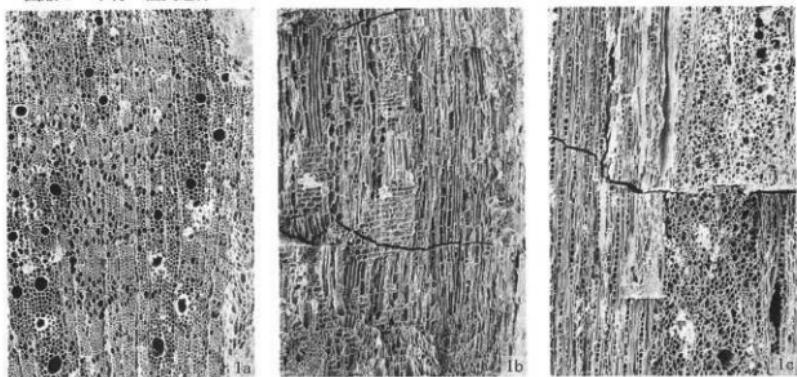
- 平井信二（1979）木の事典 第2巻、かなえ書房。
柳原功一（1998）炭化種実から探る食生活—古代から中世を中心に—、「帝京大学山梨文化財 研究所1998年度研究集会 遺跡・遺物からなにを読みとるか(2) 食の復元 資料集」、p.39-53。
近藤鍊三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、p.31-64。

図版 1 植物珪酸体



- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (13号溝覆土) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (13号溝覆土) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (細状遺構 F) | 4. ススキ属短細胞珪酸体 (15号溝覆土) |
| 5. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体 (15号溝覆土) | 6. タケ亜科機動細胞珪酸体 (15号溝覆土) |
| 7. ヨシ属機動細胞珪酸体 (14号溝覆土) | 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (15号溝覆土) |
| 9. シバ属機動細胞珪酸体 (13号溝覆土) | |

図版2 木材・種実遺体



— 200 μm : a
— 200 μm : b, c



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（1号住カマド内焼土）

2. イネ（3号住カマド内焼土）

3. イネ（1号住カマド内焼土）

4. マメ類（3号住カマド内焼土）

5. マメ類（9号住土器内覆土）

(a : 木口 b : 軸目 c : 板目)

第V章 調査の成果と課題

野牛島・大塚遺跡の調査の結果、合計9軒の竪穴式住居が検出された。いずれも甲西バイパスの西側、I区で発見されている(第3図)。I区の西側には大塚遺跡が隣接しており、大塚遺跡B区で発見された住居址と本遺跡の住居址は連続していると言える。このため本章では大塚遺跡の資料を加え、野牛島・大塚遺跡周辺の奈良・平安時代の住居址についてまとめてみたい。

第1節 野牛島地区における奈良・平安時代の住居址

本節では、とくに住居の構造と住居内の遺物出土状況について留意点を整理し、若干の考察を行う。住居の構造については、平面形、規模、床面積および竈の構築位置などの住居プランと、竈・土坑・壁溝・柱穴などの住居内施設の2点に注目し、それぞれ時期、地域を考慮しながら検討していく。

以上の項目に従い、住居の特徴をまとめたものが第5表である。第5表の中で時期が明示されている住居址のみを抽出し、時期ごとに並べたのが第6表である。なお、大塚遺跡の時期は報告書に従っている。

平面形については、東西軸と南北軸の差が30cm以上のものを長方形、以下のものを正方形とし、未調査等によって正・長方形と判断できない形を矩形とした。規模は、住居址上端の東西軸×南北軸を測り、床面積は、住居址下端の東西軸×南北軸で計測した。壁溝は含めていない。また、竈については構築材と遺存状況に着目した。

住居プラン、住居内施設とは別に、遺物出土状況については、野牛島・大塚遺跡に限定して比較検討を行う。

(1) 住居プラン

第6表をもとに、住居址の各要素を比較した結果、時期の相違による住居址の変化が以下のように把握できた。

8C中頃(大塚遺跡第1段階)……大塚遺跡で報告されているとおり、長方形で、長辺に竈が造られる長辺竈が大きな特徴である。竈は北壁か西壁に敷設される。床面積は約8m²以下の住居と20m²以上の住居に大きく分かれる。

8C後半(大塚遺跡第2段階)……平面形では長方形に加え、正方形も現れる。竈は住居短辺に移動し、さらにはほとんどが東壁に造られるようになる。床面積は11m²前後のものが多くなるが、20m²を超える住居もみられる。

9C初～中(大塚遺跡第3・4段階)……今回の分析の中でこの時期の住居址が最も多い。大塚遺跡、野牛島・大塚遺跡では集落の中心となる時期である。平面形は長方形が多いが、前段階と比べ正方形の割合が増加する。床面積はほぼ10m²前後に安定し、突出した大型住居は見られなくなる。また、短辺の東壁やや南よりに造られる竈が一般化する。

9C中～後半(大塚遺跡第5段階)……平面形は長方形、正方形ともに見られる。床面積は縮小化し、8m²以下となる。竈は前時期に統いて東壁に造られる。

以上の点をまとめると、竈の構築位置は長辺から短辺へ移動し、北あるいは西壁から東壁へと変化する。同時に規模、床面積はともに縮小・定型化し、平面形は正方形を呈する住居址の比率が高くなる。このように竈構築位置、平面形、規模・床面積が互いに関連しながら、住居プランは変化している。

(2) 住居内施設について

まず竈の構築材、遺存状況について検討する。竈の構築材として石が袖に利用されている例は、竈が検出された36軒中17軒におよぶ。調査時にはすでに石が消失している竈もあることを考えれば、石の使用率は高く、時期別にみても各時期を通して利用されている。石を入手しやすい環境が、袖における石の利用を促した要因のひとつとして考えられよう。石が使われている袖に対し、石の支脚が確認された住居址は36軒中3軒と非常に少ない。

竈の遺存状況は全体的に悪い。大塚遺跡では焼土と堀方および袖に使われた石によって竈と確認される例が多く、袖が完存している例は少ない。袖で石が確認された住居址17件中、石が一部でも原位置を留めていた住居址は9件である。一方野牛島・大塚遺跡では、3号住居址で袖がほぼ完存し、9号住居址で袖石および天井石がほぼ原位置で確認されるなど、5軒中2軒の竈が比較的損傷の少ない状態で検出された。しかし1・6号住居址では袖の基底部しか確認できず、8号住居址では北側の袖がまったく確認できなかった。このように野牛島・大塚遺跡では遺存状態に差異が見られるが、5軒すべての竈に厚く焼土が堆積し、竈が長期間使用されたことが窺われる。

竈から特殊な状況で遺物が検出されている例としては、須恵器の完形環蓋が燃焼部中央で平らな状態で出土した大塚遺跡B区9号住居址と、竈の奥壁から垂直に刀子が出土した野牛島・大塚遺跡6号住居址が挙げられる。

こうした竈の遺存状況および遺物の遺存状況をみると、自然に崩れたものに加え、支脚の抜き取りや意図的な竈の破壊などのいわゆる「竈祭祀」が行われた可能性が考えられる。今回はより具体的な「竈祭祀」について明らかにすることはできないが、野牛島・大塚遺跡6号住居址に関して言えば、刀子に焼けた痕跡が見られないことから、竈廻業時に置かれたものと考えられる。竈廻業時及び使用時の人の行動を把握するためには、個々の竈を丹念に検討するとともに、類例を増やし竈の遺存状態や遺物の出土状況での類型化を進め、積極的に解釈することが必要であろう。

次に土坑に関しては、時期よりも地域による偏りが大きい。大塚遺跡ではほとんど確認されていないが、野牛島・大塚遺跡では竈が検出されたすべての住居址から土坑が発見された。いずれも竈南側に隣接して浅い土坑が掘り込まれている。土坑の用途については、水溜施設や貯藏穴などいくつか推定されているが、本調査においてその役割を特定する証拠は得られなかった。ほとんどの土坑の覆土には、炭化物や焼土など竈の堆積物や明褐色粘土などの袖構築材が含まれていた。こうした堆積物は竈からの流れ込みと考えられるが、竈が意図的に破壊される場合、破壊した天井や袖を土坑内に廻業する可能性もあるのではないだろうか。ともすれば、竈にのみ集中し土坑の観察が疎かになっていた面がある。自戒の意味をこめて土坑の覆土、堆積状況に注意を払いたい。

壁溝はほとんどの住居に見られず、大塚遺跡B区9号住居址、野牛島・大塚遺跡9号住居址の2軒でのみ確認された。柱穴は、野牛島・大塚遺跡、大塚遺跡ともまったく検出されていない。壁溝、柱穴とともに住居の上屋構造との関係を論じなければならないが、ここでは事実報告のみに留める。

(3) 遺物出土状況

ここまで、大塚遺跡と比較しながら野牛島・大塚遺跡の住居址の構造を見てきた。以下からは、野牛島・大塚遺跡の住居址における遺物出土状況についてまとめてみたい。

発掘した9軒の内、住居全体を発掘したのは1・3・6・8・9号住居址の計5軒である。資料とし

第5表 野牛島地区住居地比較表

区 名 称	住 居 形 式	平 面 形	面積(m ²)	位 置	構 造 材	造 作 状 況	土 床 (床面積)		鋪 設 材	鋪 設 方 法
							面 積 (m ²)	深 度 (m)		
I 区 1 3 C 備 正方形	正方形	2.8×2.9	8.26	東側中央	實地色土	一	円形	0.28 / 0.15	褐色土・灰土	-
I 区 2 3 C 備 正方形	正方形	3.3×3.1	10.07	東側中央	實地色土	一	円形	0.44 / 0.22	褐色土・黃色粘土・灰土	-
I 区 3 3 C 備 正方形	正方形	3.3×3.1	10.07	東側中央	實地色土	一	椭円形	0.55 / 0.14	-	-
I 区 4 3 C 7 無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I 区 5 9 C 7 無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I 区 6 9 C 中-正方形(床面積)	正方形	3.2×3.6	9.37	東側南より	實地色土	一	円形	0.35 / 0.15	褐色土・明褐色粘土・灰土・灰	-
I 区 7 9 C 7 無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I 区 8 9 C 備 正方形	正方形	3.8×3.7	11.46	東側中央より	實地色土	一	不整形(面積0.52 / 0.37)	褐色土・灰土・灰	金網・繩籠・瓦留	-
I 区 9 3 C 備 正方形	正方形	3.6×3.5	10.06	東側中央より	實地色土	一	不整形(面積0.30 / 0.19)	褐色土・灰土・灰	金網・繩籠・瓦留	土被上から原位置のまま
大屋敷地										
A 区 1 11 C 備 正方形	正方形	4.5×5.1	22.64	東側中央	地石・瓦片	一	-	-	-	-
A 区 2 6 C 備 正方形	正方形	3.4×3.0	10.37	東側中央	地石	一	-	-	-	-
A 区 3 6 C 備 正方形	正方形	2.7×2.2	5.26	北側中央	地石	一	-	-	-	-
A 区 4 6 C 備 正方形	正方形	3.5×4.1	12.46	北側中央	地石	一	-	-	-	-
A 区 5 11 C 中-正方形	正方形	3.3×2.9	9.68	北側中央	地石	一	-	-	-	-
A 区 6 8 C 中-正方形(床面積)	正方形	3.5×2.9	9.06	北側中央	地石	一	-	-	-	-
A 区 7 6 C 中-正方形	正方形	3.4×2.9	8.37	北側南より	地土・瓦片	一	-	-	-	-
A 区 8 6 C 中-正方形	正方形	3.4×2.9	8.37	北側南より	地土・瓦片	一	-	-	-	-
A 区 9 6 C 中-正方形	正方形	3.8×3.3	11.68	北側南より	地石	一	-	-	-	-
B 区 1 9 C 備 正方形	正方形	2.7×2.5	5.75	北側南より	地石	一	-	-	-	-
B 区 2 8 C 備 正方形	正方形	3.8×4.1	14.42	北側南より	地土・瓦片	一	-	-	-	-
B 区 3 6 C 備 正方形	正方形	3.5×3.4	10.56	北側南より	地土・瓦片	一	-	-	-	-
B 区 4 6 C 備 正方形	正方形	3.5×2.9	8.06	北側中央	地土・瓦片	一	-	-	-	-
B 区 5 6 C 中-正方形	正方形	3.5×2.5	6.72	北側中央	地土・瓦片	一	-	-	-	-
B 区 6 9 C 中-正方形	正方形	5.4×4.7	20.61	北側中央	地石	一	-	-	-	-
B 区 7 9 C 備 正方形	正方形	3.0×3.5	8.48	東側中央	地石	一	-	-	-	-
B 区 8 12 C 備 正方形(床面積)	正方形	3.2×3.4	9.52	(東側中央や南より)	地石	一	石・土被上	-	-	-
B 区 9 13 C 備 正方形	正方形	3.5×3.4	10.06	(東側中央や南より)	地石	一	石・土被上	-	-	-
B 区 10 9 C 備 正方形	正方形	-	-	東側中央	-	-	地土・瓦片	-	-	-
B 区 11 9 C 備 正方形	正方形	3.6×3.3	10.54	東側中央	-	-	地土・瓦片	-	-	-
B 区 12 9 C 備 正方形	正方形	3.3×2.8	7.26	東側中央	-	-	地土・瓦片	-	-	-
B 区 13 9 C 備 正方形	正方形	3.9×3.5	12.02	東側中央	天井石?	一	-	-	-	-
B 区 14 9 C 備 正方形	正方形	3.5×3.3	9.68	東側中央	-	-	地土・瓦片	-	-	-
B 区 15 9 C 備 正方形	正方形	3.4×3.4	10.54	東側中央	地石	一	-	-	-	-
B 区 16 9 C 備 正方形	正方形	3.3×2.8	7.26	東側中央	地石	一	-	-	-	-
B 区 17 9 C 備 正方形	正方形	3.4×3.3	9.68	東側中央	地石	一	-	-	-	-
B 区 18 9 C 備 正方形	正方形	3.4×2.7	7.44	東側中央	地石	一	-	-	-	-
B 区 19 9 C 備 正方形	正方形	3.5×3.1	9.65	東側南より	地土・瓦片	一	-	-	-	-
B 区 20 9 C 備 正方形	正方形	3.4×3.4	9.32	東側南より	地石・瓦片	一	-	-	-	-
B 区 21 9 C 備 正方形	正方形	3.3×3.1	9.83	東側南より	地石	一	地土・瓦片・天井石	-	-	-
B 区 22 9 C 備 正方形	正方形	3.3×3.1	9.83	東側南より	地石	一	地土・瓦片・天井石	-	-	-
B 区 23 8 C 中-正方形(床面積)	正方形	4.3×5.7	21.2	西側中央	-	-	瓦被上	-	-	-

第6表 野生島地区時期別住居比比較表

通称名	区 住 居 名 号	时期	住居プラン		畠		内 施 設		外 施 設		備 考	
			平面形	床面積(m ²)	床面積(m ²)	床位置	構造材	造作状況	平面形	最大高 さ(m)	壁 土	
大屋	A区 12 8 C中	新石器(後期)	3.5×2.9	8.06	北壁寄り	地石	地石・焼土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 8 8 C中	新石器(後期)	2.9×3.5	6.77	北壁や東寄り	—	地土柱・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 23 8 C中	新石器(後期)	4.3×5.7	21.2	西壁中央	—	地土・焼土・埴り方	—	—	—	—	—
野牛島・大屋	I区 3 8 C狭	三方形	3.3×1.1	10.02	東壁やや寄り	黄褐色粘土	油	円筒	0.44/3.23	黄褐色土・黄白色粘土・焼土・灰	—	—
野牛島・大屋	I区 4 8 C狭	矩形	—	—	—	—	—	新円筒	0.35/3.14	—	—	—
大屋	B区 9 8 C狭	新石器	5.4×4.7	20.6	西壁中央	地石	地土・埴り方	—	—	北壁・天井を削 開口	—	—
大屋	B区 16 8 C狭	地石	1.9×5.5	12.05	西壁中央	地石	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 20 9 C船	正方形	3.4×3.4	9.3	東壁やや寄り	地石・天井柱に 地石・埴り方	—	—	—	—	—	—
野牛島・大屋	I区 9 9 C船	正方形	3.6×3.6	10.06	東壁やや寄り	地石・天井柱・ 地石・灰	不整齊な円筒	0.20/0.07	黄褐色土・明褐色土・灰	北壁・雨戸・開口	—	—
大屋	A区 6 9 C船	新石器	3.4×4.0	8.37	東壁中央	地石	地石のみ	—	—	—	—	—
大屋	B区 1 9 C船	新石器	3.8×3.3	11.68	東壁やや寄り	地石	地石のみ	—	—	—	—	—
大屋	B区 6 9 C船	正方形	3.5×4.4	10.56	東壁やや寄り	地石	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 7 9 C船	正方形	3.5×4.4	10.56	東壁やや寄り	地石	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 11 9 C船	新石器	3.0×3.5	8.36	東壁やや寄り	地石	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 12 9 C船	正方形(後正形)	3.2×3.4	9.36	(東壁やや寄り)	地石?	石・土柱付近	—	—	—	—	—
大屋	B区 13 9 C船	正方形	3.5×3.4	10.06	東壁やや寄り	地石	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 14A 9 C船	正方形	—	—	東壁中央	—	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 14B 9 C船	新石器	2.6×3.1	10.56	東壁中央	—	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 15 9 C船	新石器	3.3×3.8	7.75	東壁やや寄り	—	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 17 9 C船	正方形	3.5×3.3	9.56	北壁寄り	地石	埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 19 9 C船	正方形	3.5×3.1	9.65	東壁より	—	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	B区 21 9 C船	正方形	4.1×3.2	14.02	東壁やや寄り	黄褐色土・ 地石・灰・埴り方	—	—	—	—	—	—
野牛島・大屋	I区 6 9 C船～中	新石器(後正形)	3.2×3.6	9.7	東壁より	黄褐色粘土	地・一筋	円筒	0.35/0.15	黄褐色土・明褐色土・灰・土	—	—
野牛島・大屋	I区 8 9 C船～中	正方形	3.8×3.8	11.46	東壁やや寄り	黄褐色粘土	地・一筋	不整齊な円筒	0.32/0.07	黄褐色土・灰	—	—
大屋	I区 11 9 C船～後	正方形	3.3×3.8	6.96	東壁中央	地石	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	I区 22 9 C船～後	正方形	3.3×3.1	7.83	東壁やや寄り	地石	地土・埴り方	—	—	—	—	—
大屋	A区 1 11 C狭	三方形	4.5×3.1	20.64	南壁	地石・天井柱・地・一筋	—	—	—	—	—	—

ては少ないが、5軒を対象として住居址の遺物分布状況を垂直・水平両方向からそれぞれ検討する。

まず垂直方向からみた場合、そのパターンは大きく以下の2つに分かれる。なお、1号住居址は床面付近のみ遺存していたので、遺物の垂直分布は把握できない。

- ① 上層から下層まで土器片が出土する。相対的に遺物の出土量が多い。
- ② ほとんどの遺物が床面付近で出土する。①と比べ相対的に遺物の出土量は少ない。

①に該当するのは3号と9号住居址である。両住居は住居廃絶後、少なくともある一定期間、ゴミ捨て場として利用されたか、窪地への土器の流入があったと考えられる。出土遺物には時期の異なる土器片が混在している。

②に該当るのは6号と8号住居址である。8号住居址は中・上層にまったく遺物がないのに対し、6号住居址には上層に遺物が若干見られる。床面に遺物が遺棄あるいは廃棄された後は、一定期間ゴミ捨て場として利用されることも、遺物の流入もほとんどないまま埋没したと考えられる。6号住居址の場合、床面上の遺物と上層の遺物が接合しないことから、住居廃絶後、ある一定の期間をおいて若干の遺物の廃棄、流入が起きたと考えられる。

上述したように6号と8号住居址の遺物分布状況は類似しているが、覆土堆積状況については次のように様相が異なっている。6号住居址が自然の堆積を示すのに対し、8号住居址ではこぶし大の石が上層から下層まで出土しており、意図的な埋め戻しが行われた可能性がある。このように遺物分布の状況が似ていても、埋没過程は一様でなく、様々な廃棄パターンがあると考えられる。今回、垂直方向の分布状況について検討ができる住居址は4軒のみであり、資料として偏りがあることは否めない。しかし野牛島・大塚遺跡において、少なくとも以下の3種類の住居廃絶パターンを推測することができた。

- ① 住居の廃絶：遺物の遺棄・廃棄→埋没：遺物の廃棄・流入→調査時検出
- ②-1 住居の廃絶：遺物の遺棄・廃棄→埋没→埋没：小規模な遺物の廃棄・流入→調査時検出
- 2 住居の廃絶：遺物の遺棄・廃棄→埋没：（意図的な埋め戻し？）→調査時検出

次に器種構成をみてみると、①の分布状況を示す3・9号住居址では、須恵器が出土遺物の主体である。一方、②の分布状況を示す6・8号住居址では須恵器はほとんど見られず、出土した遺物はほぼすべて土師器であった。3・9号住居址がそれぞれ宮ノ前III～IV期とV期に比定され、6・8号住居址は、宮ノ前VI期に比定されることから、住居ごとの遺物構成の差異は、時期差を示していると考えられる。宮ノ前遺跡の遺物を分析した柳原功一氏によれば、宮ノ前遺跡ではVI期になると土師器が8割を占め、III～V期まで主体であった須恵器に取って代わるという（柳原・平野1992）。このように宮ノ前遺跡と野牛島・大塚遺跡の器種構成の変化はほぼ一致すると見える。

では、時期と①②の遺物分布との関係はあるのだろうか。野牛島地区では宮ノ前IV・V期の住居址は多数確認されているが、宮ノ前VI期以降の平安時代の住居址は非常に少ない。つまり、宮ノ前VI期にあたる6・8号住居が廃絶された後、周辺に居住する人々が少なかったため、住居への遺物の廃棄・流入が起りにくく、遺物が床面付近に集中する②の分布状況となったのではないだろうか。資料対象が少ないため推測の域をでないが、1つの可能性として指摘しておきたい。

遺物の分布を水平方向からみた場合、とくに注目されるのは住居址北側で遺物の出土が明らかに少ない点である。この傾向は5軒の住居址すべてに共通している。遺物はいずれも竈周辺に多数分布する傾

向があるが、住居址の北側とくに北東角付近では、非常に少ない。遺物出土数の多い9号住居址の例をみると、硬化面がみられない東部では遺物がほとんど検出されていない。

資料が限られるため、こうした分布状況から住居の空間利用について明言することはできない。しかし、9号住居址に関して言えば、硬化面の広がりや壁溝の途切れ、土坑、遺物の分布状況等の関係から、入り口の想定やある程度の居住空間が推測できると考えられる。

第2節 まとめにかえて—調査の検討課題—

以上、住居プラン、住居内施設、遺物分布状況についてそれぞれ検討してきた。住居の時期決定の問題や遺物分布状況での定量分析の欠如など、十分な分析ができているとは言いがたい。また、遺跡の考察が住居址のみに偏り、その他の遺構との関係を検討していない点も今後の重要な課題である。今後は石橋北屋敷遺跡や立石下遺跡の情報を合わせ、より総合的な検討を行いたい。

最後に野牛島地区全体の遺跡を概観し、まとめとしたい。第II章でも述べたように、野牛島・大塚遺跡周辺は、八田村の中でも遺跡が集中する地域である。野牛島・大塚遺跡や大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡、立石下遺跡では8世紀から9世紀の住居址が数多く検出されているが、10世紀の住居はほとんど見られない。一方、前御動使を挟んで南側では、前御動使川に隣接する榎原・天神遺跡で10世紀の住居址が2軒出土し、現在も調査が進められている百々遺跡では、10世紀の住居址が100軒以上検出されている。

このように、前御動使川を挟んで遺跡の時期が全く異なり、集落の様相が変化している。すなわち前御動使川以北の野牛島地区では8～9世紀の集落が中心となり、以南の百々地区では10世紀が集落の主体となっている。奈良・平安時代の御動使川の流路については、いまだに確定されていないが、こうした遺跡の分布をみると、前御動使川のルートに当時の川が流れている可能性が高いと考えられる。つまり、奈良・平安時代の野牛島地区は、遺跡北側を流れる流路（御動使川あるいは割羽沢川）と前御動使川とに挟まれた、ひとつの地理的な単位であった可能性が高い。

数年前まで、御動使川扇状地北部は、遺跡がほとんど確認されていない地域であった。しかし、現在では多くの遺跡が調査され、人の動きが少しづつ明らかになりつつある。本遺跡の調査が、八田村のみならず御動使川扇状地における人々の歴史を解明する重要な手掛かりとなれば幸いである。

本報告書には認識不足や推測の飛躍など多くの至らない点があると思われる。しかし、批判が可能となるデータはより多く盛り込んだつもりである。多くの方々のご批判ご教示を受け、今後より精度の高い報告書作りを目指すことを記して、結びの言葉としたい。

引用・参考文献

- 石野博信 1990 「日本原始・古代住居の研究」 吉川弘文館
石守 晃 1996 「住居の廃絶の一形態『焼却処分』について」「すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって」 山梨県考古学協会
今泉 漢 1996 「豊穴住居の解体」「すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって」 山梨県考古学協会
岩田明広 1998 「床の硬化を考える」「土壁」 第2号 考古学を楽しむ会
岡本範之 1990 「平安期における甲斐巨麻郡の動向」「山梨県考古学協会誌」 第3号 山梨県考古学協会
桐生直彦 1987 「豊穴住居址を中心とした遺物出土状態の分類について－研究史の整理－」「東国史論」 第2号 群馬考古学研究会

- 桐生直彦 1993 「『残された』遺物と『残った』遺物—自然廐屋・焼却廐屋と不慮廐屋の対比—」『東京の遺跡No.40』
- 桐生直彦 1995 「廐出現以降の堅穴住居址内の遺物出土状態をめぐる問題」『山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会
- 桐生直彦 1996 「遺物出土状態からみた堅穴住居の廐絶」「すまいの考古学—住居の廐絶をめぐって」 山梨県考古学協会
- 桐生直彦 1997 「変貌する古代堅穴住居像—発掘調査の盲点となりがちな諸施設について—」「遺跡・遺物から何を読みとるか（Ⅰ）」 帝京大学山梨文化財研究所
- 柳原功一・平野修 1992 「宮ノ前遺跡」 莢崎市遺跡調査会ほか
- 小林清隆 1997 「廐と貯蔵穴—千葉市周辺地域の古墳時代の事例から—」「研究連絡誌』第48号 千葉県文化財センター
- 小林謙一 1996 「堅穴住居跡のライフサイクルからみた住居廐絶時の状況—南関東の掘文中期集落での遺物出土状態を中心に—」「すまいの考古学—住居の廐絶をめぐって」 山梨県考古学協会
- 小林謙一 1997 「堅穴住居跡調査における一視点—集落論の前に住居調査論を—」「山梨県考古学協会誌』第9号 山梨県考古学協会
- 坂本美夫・末木健・塙内真 1983 「甲斐地域」「神奈川考古（シンボジウム 奈良・平安時代土器の諸問題）」
14 神奈川考古同人会
- 坂本美夫 1989 「甲斐型杯一編年について（Ⅰ）—」「山梨考古学論集』II 山梨県考古学協会
- 笹森健一 1990 「3. 坚穴住居の使い方」「古墳時代の研究』第2巻 集落と豪族居館 雄山閣
- 末木健 1986 「甲斐国巨麻郡の成立と展開」「研究紀要』3 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 末木健 1996 「堅穴住居の埋没と出土遺物から」「すまいの考古学—住居の廐絶をめぐって」 山梨県考古学協会
- 瀬田正明 1993 「甲斐整杯の成立年代について—甲斐国分寺跡・国分尼寺周辺の調査から」「山梨県考古学協会誌』第6号 山梨県考古学協会
- 田尾誠敏 1992 「相模地方の甲斐型土器覚書」「山梨県考古学協会誌』第5号 山梨県考古学協会
- 田尾誠敏 1995 「相模地方の甲斐型土器覚書II」「東海大学校地内遺跡調査団報告』5 東海大学校地内遺跡調査団ほか
- 高橋康子 1999 「貯蔵穴の研究—式蘇国豊島郡内の竪付き堅穴住居跡にみられる貯蔵穴の分析について—」「土壁』第3号 考古学を楽しむ会
- 田中大輔 1998 「平安時代の様相と問題点」「角力場第2遺跡」 若草町教育委員会
- 堀 隆 1991 「住居廐絶における廐解体をめぐって—廐祭祀の普遍性の一側面」「東海史学』第25号
- 堀 隆 1995 「廐の廐棄プロセスとその意味」「山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会
- 中沢悟 1986 「廐の廐棄について」「大原II遺跡・村主遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新津健 1997 「大塚遺跡」「山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第137集
- 西秋良宏 1996 「住居廐絶研究の視点—歐米の研究動向から—」「すまいの考古学—住居の廐絶をめぐって」 山梨県考古学協会
- 野崎進 1997 「遺物の出土状態をめぐって」「山梨県考古学協会誌』第9号
- 萩原三雄 1986 「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」「山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会
- 保坂康夫 1999 「御勤使川扇状地の古地形と遺跡立地—中部横断道の試掘調査の成果から—」「研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 松村恵司 1995 「鉄鎌と建築儀礼」「山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会
- 森原明廣 1999 「堅穴住居の埋没過程分析の一視点」「遺跡・遺物から何を読みとるか（Ⅲ）—住まいと住まい方—」 帝京大学山梨文化財研究所
- 山下孝司 1986 「奈良時代における甲斐の土器編年」「山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会
- 山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ（ed.） 1992 「甲斐型土器」—その編年と年代— 山梨県考古学協会
- 米沢容一 1997 「硬い床と軟らかい床—硬化面から得られる情報—」「土壁」創刊号 考古学を楽しむ会
- 米沢容一 1999 「フィールドノート・床面の補修—今後の床面研究の方向性を考える一視点として—」「土壁』第3号 考古学を楽しむ会

遺物觀察表

第7表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(1)

1号住居址出土土器観察表(第15回)

番号	器種 器形	法量(cm)		製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面				
1	土師器 环					密、金雲母・白色粒子含	にぶい茶褐色	良	口縁1/5
2	須恵器 环				ロクロ整形	密、白色粒子含	灰色	良	口縁1/5
3	須恵器 环	11.2	6.8	3.3	ロクロ整形、回転糸切り	密、白色粒子含	暗赤褐色～灰色	良	1/2
4	土師器 甕	35.2			ロクロ整形	やや粗、砂粒・白色粒子含	褐色	普通	口縁1/4
5	土師器 甕				ロクロ整形	やや粗、砂粒・白色粒子含	暗褐色	普通	底部1/5

2号住居址出土土器観察表(第16回)

番号	器種 器形	法量(cm)		製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面				
1	須恵器 甕				ロクロ整形	密	青灰色	良	口縁破片
2	土師器 环				ロクロ整形	密、白色粒子含	暗褐色(外) 褐色(内)	普通	口縁破片
3	須恵器 甕	14.4			ロクロ整形	やや粗、白色粒子含	褐色	普通	底部1/5
4	須恵器 环	7.4			ロクロ整形、回転糸切り	普通、白色粒子含	白灰色	普通	底部1/4

3号住居址出土土器観察表(第19回)

番号	器種 器形	法量(cm)		製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面				
1	土師器 环				ロクロ整形	密、白色粒子含	にぶい黄褐色	普通	口縁部～ 底部1/6
2	土師器 环	6.5			ロクロ整形、摩耗がひどく、回 転糸切り痕がわざかに残る。	やや密、白色粒子含	にぶい茶褐色	普通	底部1/4
3	土師器 甕	25.3			ロクロ整形	やや密、砂粒含	茶褐色	普通	口縁～肩 部1/3
4	土師器 甲斐型甕				ロクロ整形	やや粗、金雲母含	暗褐色(外) 褐色(内)	普通	口縁破片
5	土師器 甕				ロクロ整形	やや粗、長石・砂粒 含	茶褐色	普通	口縁破片
6	土師器 甕	6.4			ロクロ整形	やや密、長石・砂粒 含	黒褐色(外) 茶褐色(内)	普通	底部1/4
7	土師器 甕	14.4			ロクロ整形	やや粗、長石・砂粒 含	暗茶褐色(外) 茶褐色(内)	普通	底部1/4
8	土師器 甕				ロクロ整形	やや粗、砂粒含	茶褐色	普通	底部1/5 底欠損
9	須恵器 环	12.8	6.8	4.5	ロクロ整形、摩耗が激しく、回 転糸切り痕がわざかに残る。	やや密、全体的にや や粗い	灰色	普通	口縁部一 部欠損
10	須恵器 环				ロクロ整形	密、白色粒子含	青灰色	良	口縁1/5
11	須恵器 高台环	13.2	8	6.4	ロクロ整形	密、白色粒子含	灰紫色(外) 赤褐色(内)	良	約1/2
12	須恵器 环		7		ロクロ整形、回転糸切り	密、白色粒子含	灰色	良	底部のみ 充存
13	須恵器 环		7		ロクロ整形、摩耗が激しい。	やや密、全体的にや や粗い	にぶい灰色	普通	底部のみ 充存
14	須恵器 甕				ロクロ整形	密、白色粒子含	青灰色(外)灰 茶褐色(内)	良	口縁1/6
15	須恵器 甕				ロクロ整形	密、白色粒子含	青灰色	良	破片

第8表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(2)

4号住居址出土土器観察表(第21回)

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器 甕	21.8			ロクロ整形		普通、砂粒含	褐色	普通	口縁1/3
2	土師器 甕				ロクロ整形		普通、金雲母・砂粒含	茶褐色	普通	肩部破片
3	土師器 甲斐型甕		7.6			タテハケ	やや粗、金雲母含	暗赤褐色(外) 暗褐色(内)	普通	底部1/2
4	須恵器 环	11.2	6.3	3.4	ロクロ整形、回転糸切り		密、白色粒子含	灰色~暗赤褐色	良	約1/2
5	須恵器 环	12.8	7.6	4	ロクロ整形、回転糸切り		密、白色粒子含	暗灰色	良	約1/3
6	須恵器 环	12.4	6.8	4	ロクロ整形、回転糸切り		やや密、白色粒子含	灰色	良	約2/3
7	須恵器 环				ロクロ整形		密、白色粒子含	灰色	良	口縁破片
8	須恵器 环				ロクロ整形		密、白色粒子含	灰色	良	口縁破片
9	須恵器 环				ロクロ整形		密、白色粒子含	灰色	良	口縁破片
10	須恵器 环				ロクロ整形		密、粒子がやや粗い。	明褐色(外) 灰色(内)	普通	口縁破片
11	須恵器 高台环	15.4	8.4	6.4	ロクロ整形、回転糸切り		密、白色粒子含	青灰色(外) 灰色(内)	良	約1/2
12	須恵器? 环				ロクロ整形、回転糸切り 回転ヘラケズリ		やや密、長石含	明褐色	普通	口縁部欠損
13	須恵器 环				ロクロ整形		密、白色粒子含	灰色	良	口縁破片
14	須恵器 环				ロクロ整形		密、白色粒子含	灰色	良	口縁破片
15	須恵器 环				ロクロ整形、摩耗が激しく、回転糸切り痕がわざかに残る。		やや密、白色粒子含	にぶい灰色	やや良	底部破片
16	須恵器 环				ロクロ整形、摩耗が激しく、回転糸切り痕がわざかに残る。		やや密、白色粒子含	にぶい灰色	やや良	底部破片
17	須恵器 环				ロクロ整形、摩耗が激しく、回転糸切り痕がわざかに残る。		やや密、白色粒子含	明白色	やや良	底部破片
18	須恵器 高环				ロクロ整形		密、白色粒子含	暗赤褐色	良	脚部破片

5号住居址出土土器観察表(第21回)

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
1	須恵器? 环				ロクロ整形		普通、白色粒子含	明褐色(外) 橙褐色(内)	やや良	口縁~底部破片
2	土師器 环				ロクロ整形		普通、白色粒子含	暗茶褐色	やや良	口縁

6号住居址出土土器観察表(第23・24回)

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器 甲斐型环	10.4	5	3.9	ロクロ整形	暗文	密、暗褐色粒子含	橙茶褐色	良	約1/2
2	土師器 甲斐型环	10.8		3.9	ロクロ整形	暗文	密、暗褐色粒子含	橙茶褐色	良	1/2、底部欠損
3	土師器 甲斐型环	10.2	5.1	4	ロクロ整形、回転糸切り	暗文	密、暗褐色粒子含	橙茶褐色	良	口縁部一部欠損
4	土師器 甲斐型环	10.4	5.6	4.2	ロクロ整形		密、暗褐色粒子含	橙茶褐色	良	約1/2
5	土師器 甲斐型环	10.8	6.3	4.1	ロクロ整形	ヘラケズリ	密、雲母含	茶褐色	良	口縁部一部欠損

第9表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(3)

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎 土	色 調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
6	土師器 甲斐型壺	11			ロクロ整形	ヘラケズリ	密、黒母含	茶褐色	良	口縁1/4
7	土師器 甲斐型壺		6.3		ロクロ整形、回転糸切り 埴文	ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	底部1/4
8	土師器 内黒壺		6.9		ロクロ整形	黒色處理	やや密	橙色(外) 黒色(内)	やや良	底部破片
9	土師器 内黒壺	10	4.9	4.4	ロクロ整形	黒色處理・埴文	やや密	橙褐色(外) 黒色(内)	良	約2/3
10	土師器 内黒壺	16	9.2	5.2	ロクロ整形	黒色處理	やや密	明褐色(外) 黒色(内)	やや良	約1/4
11	土師器 坏壺				ロクロ整形		密	暗褐色	やや良	約1/4
12	土師器 皿			3		ヘラケズリ	やや密、暗褐色粒子含	茶褐色	やや良	約1/2
13	土師器 甲斐型壺	24.2			ヨコハケ	タテハケ	やや粗、砂粒・金雲母含	暗茶褐色	普通	口縁1/2
14	土師器 甲斐型壺				ヨコハケ	タテハケ	普通	砂粒・金雲母含	褐色	普通
15	土師器 甲斐型鉢				ヨコハケ	タテハケ	普通	砂粒・金雲母含	茶褐色～暗茶褐色	普通
16	土師器 甲斐型壺		8.3		木葉痕		やや粗、砂粒・金雲母含	暗茶褐色	普通	口縁～調部1/2
17	土師器 壺		9.5		ロクロ整形、回転糸切り		普通	砂粒・長石含	暗茶褐色(外) 明茶褐色(内)	やや良
18	土師器 壺				ロクロ整形		やや良、砂粒・金雲母含	明茶褐色	やや良	肩部～底部1/2
19	須恵器 壺				ロクロ整形		密、白色粒子含	青灰色	良	底部片

7号住居址出土土器観察表(第26回)

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎 土	色 調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器 甲斐型壺		6.1		ロクロ整形、回転糸切り 埴文	ヘラケズリ	密、白色粒子含	茶褐色	良	底部のみ 完存
2	土師器 壺				ロクロ整形		やや密、砂粒含	暗茶褐色	良	底部破片
3	土師器 甲斐型壺						やや粗、砂粒・金雲母含	暗茶褐色	普通	口縁～調部破片
4	須恵器 壺	10.8	6.3	4	ヨコハケ	ミコハケ	密、白色粒子含	灰色	良	約1/3
5	須恵器 高台壺			8	ロクロ整形、回転糸切り		密	灰色	良	約1/3
6	須恵器 坏壺				ロクロ整形		密、白色粒子含	青灰色	良	破片
7	須恵器 壺				ロクロ整形		密、白色粒子含	暗灰色	良	底部破片

8号住居址出土土器観察表(第29回)

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎 土	色 調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器 壺	10.8	5.3	4.2	ロクロ整形、回転糸切り	ヘラケズリ	やや密、暗褐色粒子含	赤茶褐色	やや良	口縁一部 欠損
2	土師器 壺				ロクロ整形	埴文	密、暗褐色粒子含	赤茶褐色	良	口縁部破片
3	土師器 壺			3.9	ロクロ整形	埴文	密、暗褐色粒子含	赤茶褐色	良	口縁部破片
4	土師器 壺		5.6		ロクロ整形	埴文	密、暗褐色粒子含	赤茶褐色	良	底部2/3
5	土師器 壺		5.2		ロクロ整形	ヘラケズリ	密、暗褐色粒子含	明橙色	良	底部破片

第10表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(4)

番号	器種	法量(cm)	製作技法		胎 土	色 調	焼成	残存率
			口径	底径	器高	内 面	外 面	
6	土師器 环		ロクロ整形		密、暗褐色粒子含 ヘラケズリ	明褐色	良	底部破片
7	土師器 环蓋	15.7	ロクロ整形		密、暗褐色粒子含	赤茶褐色	やや良	約1/4
8	土師器 皿		ロクロ整形		密、暗褐色粒子含	赤茶褐色	良	口縁部破片
9	土師器 甌		ロクロ整形		普通、砂粒含	黄褐色	普通	口縁部破片
10	土師器 甌		ロクロ整形		普通、砂粒含	明褐色	普通	底部~底部1/3
11	土師器 甌		ロクロ整形		普通、砂粒含	明褐色	普通	口縁~肩部破片

9号住居址出土土器観察表(第32・33図)

番号	器種	法量(cm)	製作技法		胎 土	色 調	焼成	残存率	
			口径	底径	器高	内 面	外 面		
1	土師器 甲斐型环	11.2	6.4	4.6	ロクロ整形 暗文	密、赤褐色粒子・長 石含 ヘラケズリ	にぶい橙色	良	約1/3
2	土師器 甲斐型环	10	6.4	4.4	ロクロ整形	密	赤褐色橙色	やや良	口縁一部 欠損
3	土師器 甲斐型环				ロクロ整形 暗文	密、赤褐色粒子・長 石含 ヘラケズリ	にぶい橙色	良	底部破片
4	土師器 环	13.2	7.8	4.4	ロクロ整形	密、白色粒子含	橙色(外) 暗灰色(内)	やや悪	約1/2
5	土師器 甌		5.4		ロクロ整形、回転糸切り	やや密、金墨母含	赤褐色(外) 灰褐色(内)	普通	底部2/3
6	土師器 甌		8.8		ロクロ整形	やや密、金墨母含	赤褐色	普通	底部1/4
7	土師器 环蓋				ロクロ整形	密、白色粒子含	にぶい褐色	普通	破片
8	須恵器 环	12.3	6.5	4.3	ロクロ整形、回転糸切り	密、白色粒子含	青灰色	良	1/4欠損
9	須恵器 环	12.4	5.4	4	ロクロ整形、回転糸切り	密、白色粒子含	青灰色	良	約1/4
10	須恵器 环	12.2	7	3.9	ロクロ整形、回転糸切り	密、白色粒子含	青灰色	良	約1/4
11	須恵器 环		6.6	3.8	ロクロ整形、回転糸切り	密、白色粒子含	灰色	良	口縁欠損、 底部1/2
12	須恵器 环	12.4	7.2	4.1	ロクロ整形	密、白色粒子含	灰色(外) 青灰色((内))	良	完存
13	須恵器 环		6.2		ロクロ整形、回転糸切り	やや密、白色粒子含	にぶい灰色	やや悪	底部
14	須恵器 环		7		ロクロ整形、回転糸切り	密、白色粒子含	にぶい灰色	やや悪	底部
15	須恵器 环		6.8		ロクロ整形、回転糸切り	密、白色粒子含	灰色	良	底部3/4
16	須恵器 环		7		ロクロ整形	やや密、白色粒子含	黄褐色	やや悪	底部
17	須恵器 环		7		ロクロ整形、回転糸切り	密、白色粒子含	灰色	良	底部1/4
18	須恵器 环				ロクロ整形	密、白色粒子含	青灰色	良	口縁破片
19	須恵器 环蓋				ロクロ整形	密、白色粒子含	暗灰色	良	口縁破片
20	須恵器 甌				ロクロ整形 当て具痕	密、白色粒子含	赤灰色(外) 青灰色(内)	良	口縁破片
21	須恵器 甌		17.4		ロクロ整形 指頭痕	密、白色粒子含	赤褐色	普通	底部

第11表 野牛島・大塚遺跡出土土器観察表(5)

番号	器種 器形	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
22	須恵器 壺				ロクロ整形		密、紺色粒子含	灰色	良	肩部1/2
23	須恵器 壺				ロクロ整形		密、紺色粒子含	灰色	良	底部1/2

I b 区 2号溝状遺構出土土器観察表(第40図)

番号	器種 器形	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器 壺				ロクロ整形		密、金雲母、長石含	赤褐色(外) 褐色(内)	良	口縁破片

I区14号溝状遺構出土土器観察表(第40図)

番号	器種 器形	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器 壺				ロクロ整形		密、長石含	褐色	良	口縁破片
2	土師器 皿				ロクロ整形		やや密、長石含	橙色	やや良	底部破片
3	土師器 甲斐型壺				ヨコハケ	タテハケ	やや粗、金雲母含	暗褐色	普通	口縁破片

I区17号溝状遺構出土土器観察表(第40図)

番号	器種 器形	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器 甲斐型壺				ロクロ整形		やや粗、砂粒・金雲母含	暗赤褐色	普通	口縁破片

I区20号溝状遺構出土土器観察表(第40図)

番号	器種 器形	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
		口径	底径	器高	内面	外面				
1	須恵器 壺				ロクロ整形		やや粗、白色粒子含	紫灰色(外) 灰色(内)	良	底部破片

写 真 図 版

写真図版 1

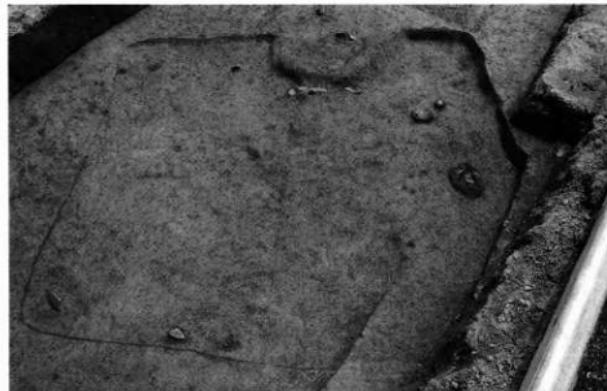


1. 野牛島・大塚遺跡 全景（西から）



2. 野牛島・大塚遺跡 全景（東から）

写真図版 2



1. I 区 1 号住居址
(西から)



2. I 区 1 号住居址甌 (西から)



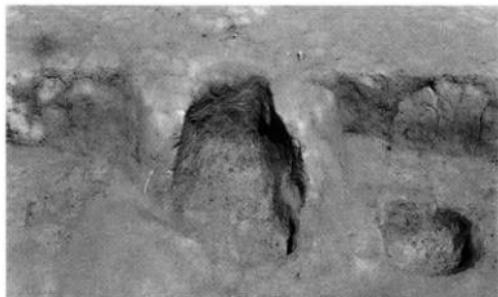
3. I 区 1 号住居址遺物出土状況



4. I 区 2 号住居址
(南から)



1. I 区 3 号住居址（西から）



2. I 区 3 号住居址竈（西から）

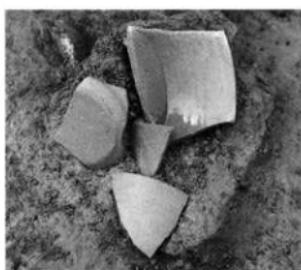


3. I 区 3 号住居址刀子出土状況

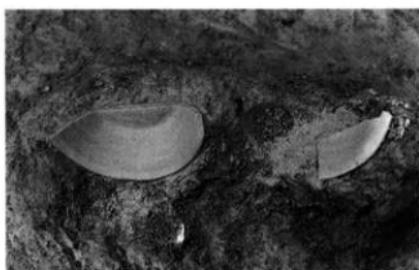
写真図版 4



1. I区4・5号住居址（南から）



2. I区4号住居址遺物出土状況



3. I区4号住居址坏出土状況



4. I区6号住居址
(西から)

写真図版 5



1. I区6号住居址
竈の壁に張り付いた刀子



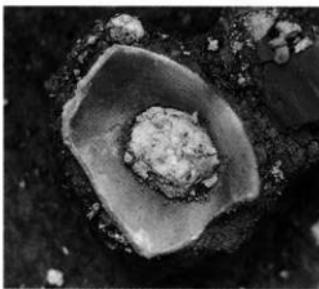
2. I区6号住居址竈（西から）



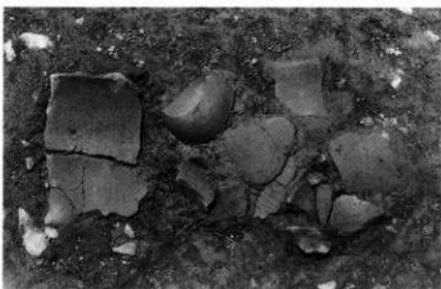
3. I区6号住居址壊出土状況



4. I区6号住居址甕出土状況



5. I区6号住居址壊出土状況



6. I区6号住居址甕・壊出土状況

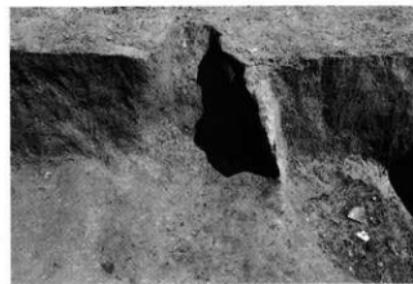
写真図版 6



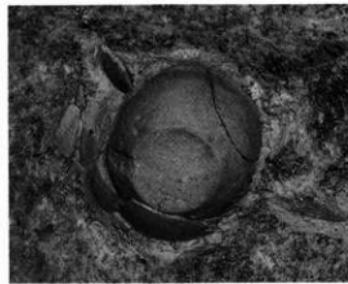
1. I区7号住居址
(南から)



2. I区8号住居址
(西から)



3. I区8号住居址甕 (西から)



4. I区8号住居址壺出土状況



1. I 区 9 号住居址
遺物出土状況（西から）



2. I 区 9 号住居址
(西から)



3. I 区 9 号住居址竪・
壺出土状況（西から）

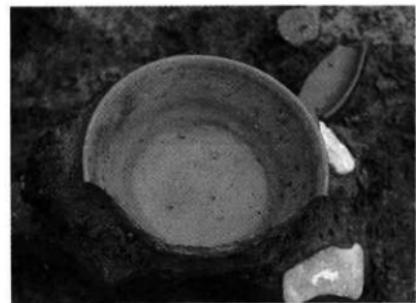
写真図版 8



1. I 区 9 号住居址竪
(西から)



2. I 区 9 号住居址竪
(西・正面から)



3. I 区 9 号住居址竪出土状況



4. I 区 9 号住居址竪出土状況

写真図版 9



1. I a 区 2号溝（南西から）



2. I b 区 2号溝（西から）



4. I 区 4号溝（北から）



3. I 区 3号溝（北東から）



5. I 区 5・6号溝（東から）

写真図版10



1. I a 区 8号溝・1号柱穴列（西から）



3. I 区 7号溝・8号土坑（西から）



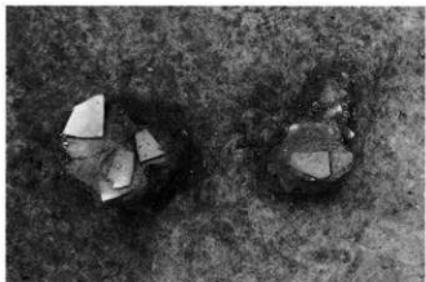
2. I b 区 8号溝（西から）



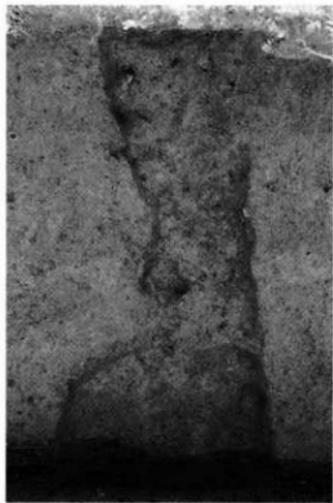
4. I 区 11(奥)・12号溝（手前）（東から）



1. I区14号溝（西から）



2. I区14号溝遺物出土状況



3. I区17号溝（南から）

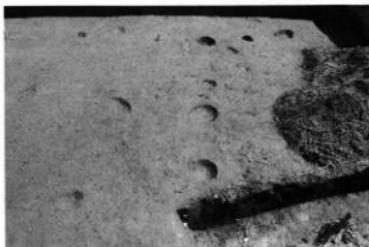


4. I区18・19・20・21号溝（北東から）

写真図版12



1. II区F,G-12,15区土坑群（西から）



2. II区C,D-14,15区土坑群（北から）



3. II区1号柱穴列（北から）



4. II区1号溝（北から）



5. II区2号溝（北から）



1. II区3号溝(右)・4号溝(左)(南から)



2. II区5号溝(手前)・6号溝(東から)



3. IIa区7号溝(東から)



4. II区8号溝(左)・9号溝(右)(北から)



5. IIb区調査区遠景(西から)



6. II区10号溝(手前)・11号溝(奥)(東から)

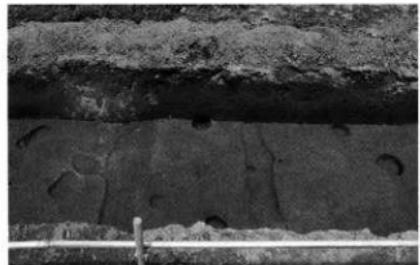
写真図版14



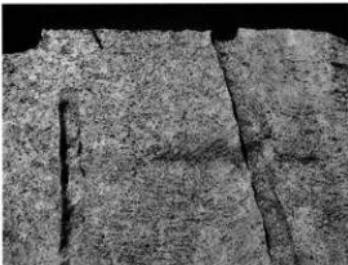
1. II区13号溝（右）・14号溝（左）・3号柱穴列
(北から)



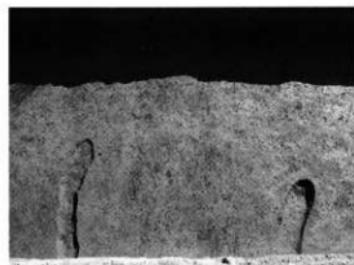
2. II区16号溝（右）・17号溝（左）(北から)



3. II区18号溝（左）・19号溝（右）(南から)



4. II区23号溝（右）・24号溝（左）(北から)



5. II区26号溝（右）・27号溝（左）(北から)



6. II区28号溝（右）・29号溝（左）(北から)



1. II a 区烟状遺構確認（西から）



2. II a 区烟状遺構全景（西から）



3. II b 区烟状遺構確認（東から）



4. II b 区烟状遺構全景（東から）

写真図版16



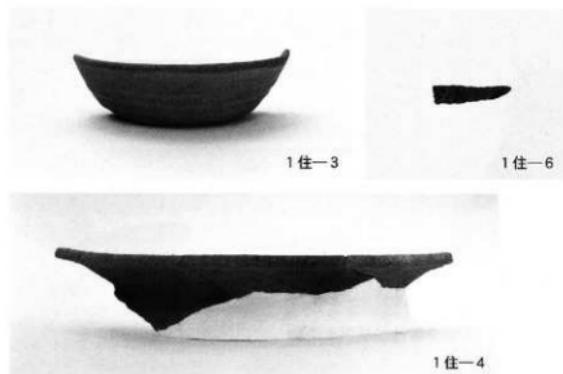
1. 作業風景（8号住居址）



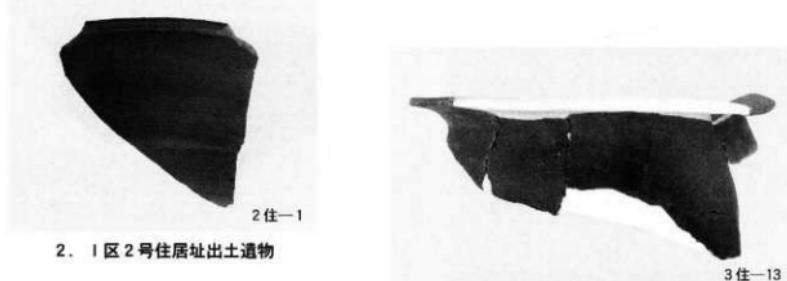
2. 作業風景（8号住居址）



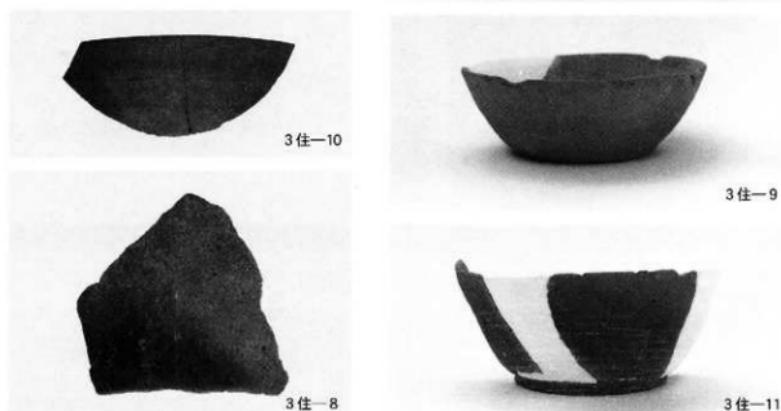
3. 作業風景（II b 区烟状造構）



1. I区1号住居址出土遗物

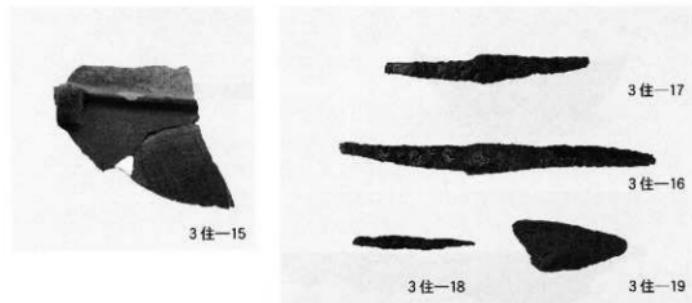


2. I区2号住居址出土遗物

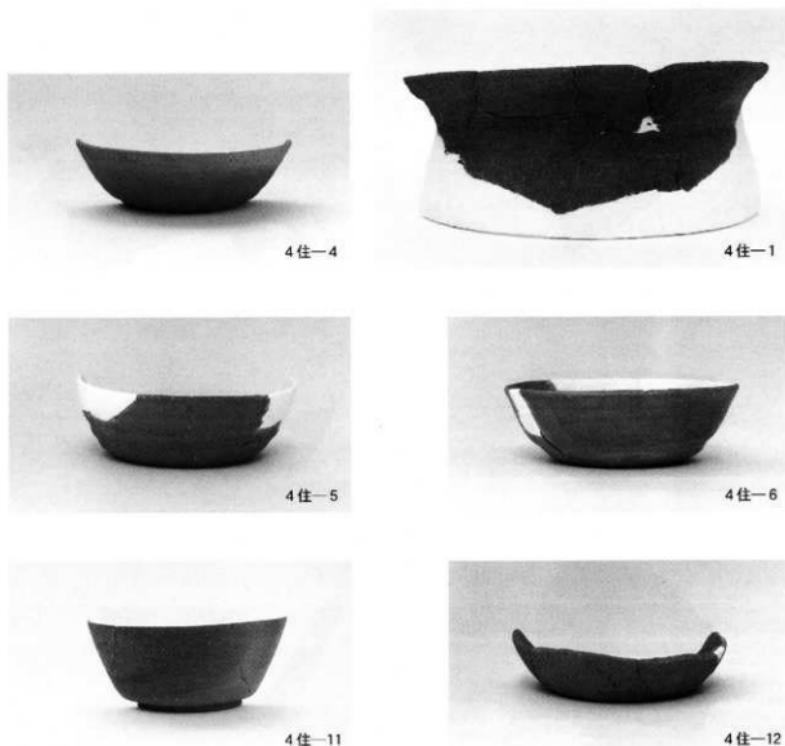


3. I区3号住居址出土遗物

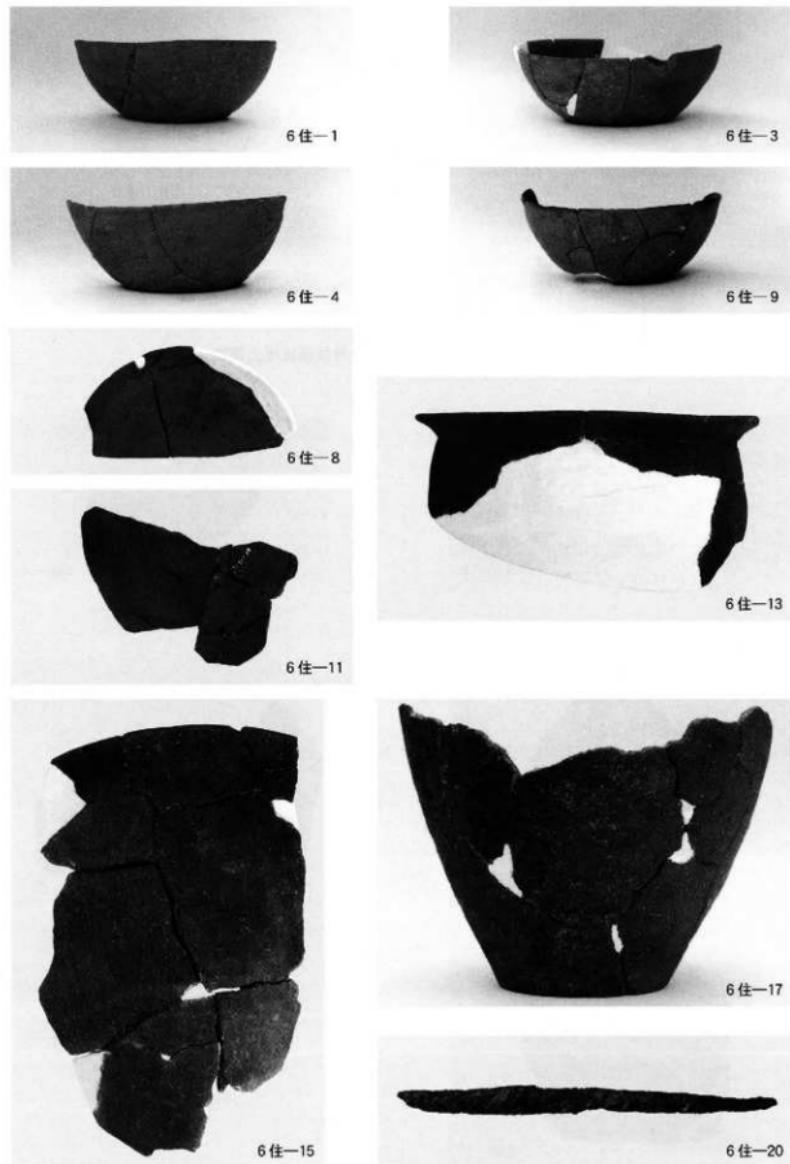
写真図版18



1. I区3号住居址出土遺物



2. I区4号住居址出土遺物



1. I区6号住居址出土遺物

写真図版20



7住-1



7住-4



7住-5

1. I区7号住居址出土遺物



8住-1



8住-4



8住-7



8住-10



8住-11

2. I区8号住居址出土遺物



9住-1



9住-2



9住-4



9住-8



9住-9



9住-12



9住-7



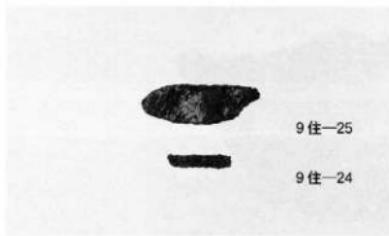
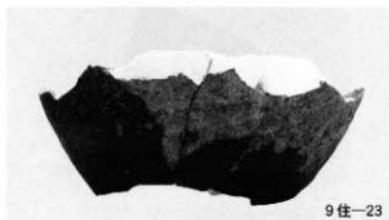
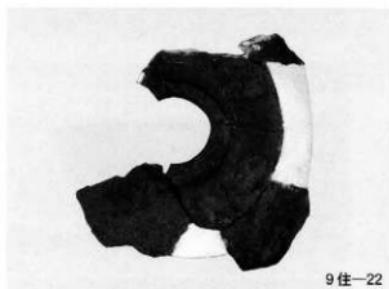
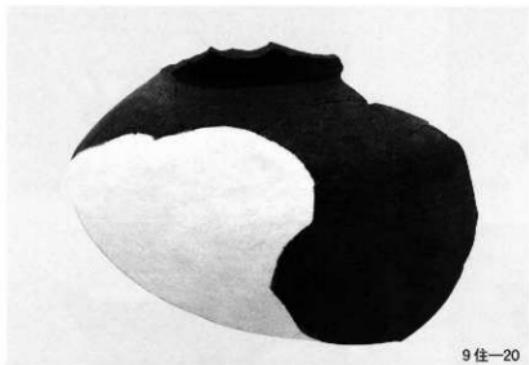
9住-19



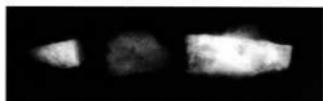
9住-21

1. I区9号住居址出土遺物

写真図版22



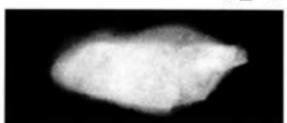
1. I区9号住居址出土遺物



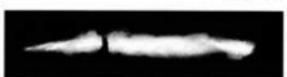
1住—6



3住—17



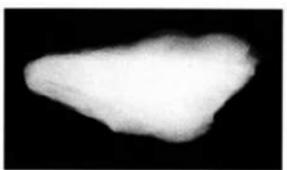
3住—19



3住—18



3住—16



9住—25



6住—20

1. 住居址出土鉄製品X線透過写真

報告書妙録

ふりがな	やごしま・おおつかいせき
書名	野牛島・大塚遺跡
副書名	八田村道163号線ボトルネック解消市町村道県代行事業の工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	八田村文化財調査報告書
シリーズ番号	第2集
編著者名	斎藤秀樹
編著機関	八田村教育委員会
所在地	〒400-0205 山梨県中巨摩郡八田村野牛島1946-1
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野牛島・大塚遺跡	山梨県中巨摩郡 八田村野牛島	19384	19	35度 39分 55秒	138度 28分 40秒	19990507~ 19990910 19991003~ 19991119	4000	ボトルネック 解消事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
野牛島・大塚遺跡	集落址	奈良・平安時代	竪穴住居 柱穴列 土坑 溝状遺構 烟状遺構	9 4 160 51 2	土師器 須恵器 鉄製品	御勅使川扇状地扇端部に立地する集落址

八田村文化財調査報告書 第2集

山梨県中巨摩郡八田村

野牛島・大塚遺跡

八田村道163号線ボトルネック解消市町村道県代行事業の工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成12年3月31日

編集／発行 八田村教育委員会

〒400-0205 中巨摩郡八田村野牛島1946-1

TEL 055-285-1883

FAX 055-285-0491

印 刷 所 鬼灯書籍株式会社

〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5

TEL 026-244-0235

FAX 026-244-0210

